
ネギまの世界でやりたい放題！

悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギまの世界でやりたい放題！

【Nコード】

N9833M

【作者名】

悠

【あらすじ】

主人公は如月 洸。交通事故に巻き込まれる少年を自分の命と引き換えに助け、その清らかな心に感動した神様からのささやかなプレゼントによりネギま！の世界へと転生。その後、彼は・・・皆さんの小説を読んで自分も書いてみたい！と思いました。しかし、難しいものだと感じ早くも挫折寸前w

筆者はBASTARD！が大好きなのでどんどんBASTARD！！関連のものを出していく予定です。アイテム、魔法・・・それに敵も・・・？更には幼馴染までついてきちゃったよ！しかも名前

は色々とストレスですよー！
処女作品の為、雑な書き方ですがどうかご指導やら感想いただけると嬉しいです！

プロローグ（前書き）

初小説です。

こんなのまだまだ荒削りですがよろしければ見ていってください！
では・・・

ブローグ

燦々と照りつける太陽に、耳に聞こえるは小鳥の囀り

周りを見渡せば緑に生い茂った木々の群れ・・・森のようだ

その中で岩にもたれ何かを考えている少年 まあ、俺の事だが。

周りを見渡すと木、木、木、狼、狼・・・

「・・・どうしてこうなった・・・」

数時間前

「やつべえ！遅刻しちまう・・・！」

俺は時計を見ながらパンを頬張り家から飛び出した。

「あらあら、洸君ったらまた遅刻？」

急いで玄関を出ると隣の家のおばさんがそう話しかけてきた。

「俺だつて好きで遅刻してるわけじゃ・・・ああ！いいや、とにかく行つて来るよ！」

隣のおばさんの話もそこそこにし、急いでバイクを発進させた・

俺の名前は、如月 洸^{きんづな こう} 今年から大学二年生。最近パソコンを購入しインターネットを繋げられるようになってからは毎日のようにやっている。

最近になってインターネット上でも色んな小説があることに気づいた。俺自身はライトノベルとか余り買わないため、どんな感じなんだろうってな気分で見いてみたら案外面白くてつい遅くまで読んでしまう毎日になってしまった。

その所為でここ最近、大学に遅刻するのが多くなっているのは内緒だ。

最近読んでいるのはいわゆる転生ものってやつ。様々な人間が様々なゲームやアニメ等の世界に行き活躍してしまうという話。

男なら一度ぐらい強くなって戦ってみたい！とかいう夢を持ったことぐらいあるだろう。俺だって昔は強くなるために筋トレとか空手とか習ったぐらいだ 直ぐ辞めたけど。

とまあ、そんな子どもの頃を思い出してしまい、つい読んでしまうんだ。だから俺は悪くない。

いつものように大学近くの駐車場にバイクを止め、大学までの道を歩く。今日は渋滞もなかったから、なんとか歩いても間に合いそうだ。心の中でほんとと安堵の息をついていると・・・

「ん？あれやばくねえーか？」

道路に子どもが飛び出してきているのが見えた。子どもの目線の先にはサッカーボールがあり、それに夢中になって周りが見えていないようだ。そこへ待ってました！といわんばかりのスピードで突っ込んでくるトラック・・・減速してない！子どもに気づいていないんだろうか？

「おいおい、冗談だろ・・・！」

俺はすぐさま子どもを助けるべく走った。こんなもん目の前で死なれちゃやってられねえ！

しかし、無情にも車は子どもに接近していく。

「間に・・・合ええええ！！！」

俺は道路に飛び出し、そのまま子どもを突き飛ばした。

「よかつ・・・んぐつ！」

俺は子どもが飛んでいく姿を見ながら、意識を手放した。

どれぐらい時間がたったのだろうか。俺は少し覚醒し、瞼を開いた。眼前には妙齡の女性　子どもの親だろうか？　が居て、涙で眼を濡らしていた。

「ごめんなさい、私が眼を離していなければ！」

そうやって聞こえた気がする。頭がぼんやりとしていてよく理解できなかった。

「ごほつ・・・あれぐらいの、子どもの歳なら、何しですか、わかんないっすから、氣いつけないと、あかんすよ？後子どもは・・・？」

俺は言葉を切りながらも親に伝えたいことを伝えた。親は泣きながら「わかりました。子どもなら無事です」と言ってくれた。良かった、こんな思いしたのに無事じゃなかったらたまったもんじゃない。安堵の息をもらし、ふと自分の身体を見てみると自分の血で真っ赤になっていた。あー、こりや助からない程の出血じゃね？そう認識すると段々と眠くなってきた。意識も更にぼーっとしてきた感じがする。

「へっ、へへ。こんな、最後とは、思わなかったけど、人助けもしたし、最後に美人のお姉さんに抱かれて死ぬるなら、重畳かな・・・」

そういうと母親は驚くように俺の顔を見て、更に涙を流しながら身体を抱きしめてくれた。胸の双丘がこれでもかと言わんばかりに密着した。・・・生きてて良かった。あつ、死ぬのか。

自らの家族と、これから後悔に苛まれるでさいなまれるあろう子どもとその母親にお詫びをしながら意識を手放した・・・

「こうちゃーん！」意識を手放す前に：聞き覚えのある幼馴染の声が聞こえた気がした。

プロローグ（後書き）

あとがきって何書いたらいいんやろ・・・次の話も頑張って書きま
す！

神様、俺転生したい！（前書き）

タグに入れちゃったけど作者はBASTARD！！が好きです。キ
ャラは出てこないかもしれませんが魔法はバンバンでできます。

神様、俺転生したい！

「んっ・・・うん？ここどこだ？」

俺は再び目を覚ました。眼前に広がるは完全なる白い世界。そんな中俺一人だけがその空間にいる。そんな感じがした。

「おいおい、折角良い事したつもりなのにこんな仕打ちかよ。神様は冷たいねえ。」

「そんな事はないのじゃ」

「お？誰かいるのか・・・って、あんた誰？」

声のする方向へ顔を向けると、幼稚園ぐらいの子どもが俺の目の前にいた。ん？何か見たことある気がするぞ・・・よくみると先ほど俺が助けた子どものような気がした。

「あ？あれ？さっき助けた子ども・・・？俺生きてるの？」

「いや、お主は死んでおる。私の格好はお主が生前にもっとも強く思い描いた格好となつておる。それほどまでに子どもの心配をしたのじゃな」

「ん、そうか。だからそんな格好・・・ってだからあんた誰よ？」

「おお！こりゃ失礼した。私は神様なのじゃ。お主の行いを見ててつい出てきてしもった」

神様はそういうと舌をぺろりと出した。なんというお茶目な神様なんだろ。それにしても神様とはまた・・・信じがたいものがあるが良く見てみると後光が射しているような気もしないでもない。

「お主の心意気に涙した私は、お主の願い事を叶えてやろうと思いいこの場に來たのじゃ。何か願い事はあるかの？」

そう言われても、もう死んでるしなあ・・・願い事ねえ。

「助けたあの子が俺の命の分まで人生を生き抜いてくれたらいいかな。不良になられちゃたまったもんじゃねえ！」

そついうと神様は驚いた表情をし、ふと笑みを浮かべた。

「お主は死んでも尚、他人の事を考えれる人間のようじゃな。惜しい人を亡くしたのう」

そついい神様は手を合わせて俺を拝んだ。いや、あんたがそれしてどうするんだ。拝み終わった後、神様は何か考えるような構えを取り、数分立ってから口を開いた。

「あの子は元気に育つようじゃ。物心ついた時に母親からお主の事を聞かされ苦しんだ時期もあるようじゃがその苦難を乗り越えていき、幸せに暮らしている・・・そついう未来が見えたの。お主の墓にもよく行き、自分の身の回りの報告に行ったり相談したりしに行くみたいじゃな」

おお、未来視か、流石は神様だな。あの子が元気でいてくれるなら俺も命を張った甲斐があったもんだ。しかし、墓に相談って・・・

「さて、お主自身の願い事はないかの？」

俺自身？俺自身ねえ・・・死んでるんだし、天国に行くとかかなあ・・・そういや、よく見る小説とかでは死んだ後に転生とかしてたよな。

「神様、俺・・・転生とかしてみたい！」

「輪廻転生かの？お主には徳があるから好きな候補を聞くぞ。また人間か？」

「いや、この世界とかじゃなくてさ。漫画とかアニメとか・・・無理・・・だよな」

やはり神様はこの世界の神様という事かな。そりゃ普通転生って聞いたら輪廻の事を考えるよな「それがお主の望みなら叶えるぞ？」
まあ、無理ってわかってて聞いたからいい・・・ってマジか！？

「え？いいの？そんなんできるの？」

「うむ、私はこう見えても全知万能の神様じゃからな！私に不可能はないのじゃ」

神様すっげー！んじゃ早速飛ばして・・・もらっ前にっつと。

「神様！俺今のままだや漫画の世界に行っても活躍できないのになんか能力ください。」

「おお？そうじゃのう・・・考えるのに時間がかかるから好きな能力を3つ程言ってみるがいいのじゃ。」

神様は快く了承してくれたので、必死にチートっぽい能力を考えてみる・・・何がいいかな。

そして選んだ能力はこの3つ

- ・その世界の最高の生物の体力と無限に溢れる魔力・気力
- ・各分野における技術（戦闘技術や魔術の知識や気の使用法等）
- ・その世界だけではなく他の世界の魔法を使用できる

「ふむ、最初の一つだけでも十分な能力じゃのう。」

「俺だつて死んだ後ぐらい良い思いしたいです。」

「まあ、いいじゃろう。して、どの世界に行きたいのじゃ？」

世界・・・世界かあ。どんな世界でもいいんだけどなあ。

「魔法使つてみたいし・・・魔法がある世界なら何処でも！」

「ふむ・・・どこでも、か。私も現世のそういつた事情はよくわからぬが・・・そうさな、前に昇天した人間が「俺もネギま！みたいな魔法ありき、ハーレムができる暮らしをしたかった」と言つておつたのう。その世界ではどうじゃ？」

ネギま！か。原作断片的にしか知らないけど・・・それがまた新鮮で面白そうだな！

「はい、じゃあその世界をお願いします」

「良からう。昇天した者の願いも追加して、お主の外見も変化しておくぞ。さあ、第二の人生を歩むが良い！・・・原作より少し前がテンプレらしいのでそのようにしておく」

神様がそういうと真っ白な空間にぽっかりと穴が・・・俺の真下の空間が開いた。真下って事は・・・

「ちよっ、そんなメタな・・・うわあああ」

身体が浮遊感を覚え、景色も下から上へと流れていく。

「落下もテンプレらしいぞー。」

そんな事言われても知るかーっ！

「そっいえばあの女子…どうしたものかのう。」

神様が何か言ってた気もするが、落下する際の風の音で言葉は消え去り気にも留めなかった。

神様、俺転生したい！（後書き）

とりあえずネギまの世界に無事転生しにいました。

こんな感じで大丈夫ですかね？

これが俺の力？（前書き）

ちよこちよこ感想戴き、感謝の気持ちでいっぱいござる（動揺）

今回でようやく初魔法が・・・

そして早速修正のアドバイスを聞きしたので若干修正しました。

これが俺の力？

そして森の中

いてて・・・ドーン！ってなったぞ。目茶目茶な事しやがるな・・・

「それにしても、ここはどこだ・・・？」

辺りを見渡してみても緑だらけ・・・近場にある岩に背をもたれ今の状況を分析してみる。

ネギま！の事は良く知らないから何がなにやらさっぱりわからないが・・・原作より少し前とか言ってたな。他の転生ものの小説から予想すると、赤き翼との出会いとかがザラだったし今回の転生もそうなる可能性も大だな。流石神様、よくわかってらっしゃる。

「とりあえず行動を・・・っ！？」

考え事をしていたからか、辺りの空気が変わったのに気づく事ができなかったー（まあ、考え事してなくても気づけないけどね！）
周りに視線を向けると象のようなそれでいて二足歩行の怪物がこちらを見ていた。

なんだあれは・・・そういえば昔読んだ文献によるとヒンドゥー教の神様であるガネーシャが象の形をしていたと・・・じゃああれはガネーシャ？いや、神々しいオーラみたいな物は感じ取れない。では・・・それに似ていると言われるベヒモス・・・のような存在か？

「つか、でかすぎだろ・・・俺の5倍はないか？どうしてこうなった・・・」

そうばやいていても状況は変わってくれず、象・・・ベヒモスはその巨体に似合わず俊敏な動きで飛び掛ってきた。

「わっ、ちよっ！あぶねー！」

目の前をベヒモスの爪が軌跡を描いていくのが目に見えた。ベヒモスの爪は木々を一刀両断し、再びこちらに眼を向けた。

「（俺、なんか悪いことしたのかな？）」

そう思わずにもいられない不憫さに涙が出そうになったが、このままでは涙どころか血が出そうなのでベヒモスの攻撃をかわしつつ奴の行動を観察してみた。すると

「（段々、攻撃が見えてきたぞ？）」

相手の攻撃に慣れたのか、そういえば改めて思い出すと戦闘の知識なんかもらっていたんだと思い、開き直ってみた。

「負ける気がしないと思わなきゃな。魔法の世界にきたんだ　魔法を使うしかないだろ」

俺はニヤリと口角を上げ、魔法を唱える　！

「獣風情が、思い知れ！爆裂！」ダムド

俺が呪文スベルを唱えると、その一帯に爆発が起こった。爆発が起こった範囲は半径5m程であり、その範囲にあった木々は焼け焦げる事もなくこの世から消え去った。大地は深く抉れ、完全にその一帯だけ

荒野と化していた。ベヒモスは叫び声を上げる事無く一瞬でその命を刈り取られてしまったのだ。

こっ、これは楽しい。超絶ハンサムな某主人公でなくても高笑いしなくなってくるぜ。

俺はクツクツと笑いながら空を見上げた。

「この力があれば、原作破壊も夢じゃない！第二の人生では自由に生きるぞー！」

俺は、神様に感謝し大声を上げた。

数刻、ひとしきり自分の能力について見当し、自分の姿についても考えてみた。

「これは・・・若くなってるのか？」

どうやら神様の悪戯？によって青年期程度に戻っているようだ。神様の力は偉大だなと思うと同時に細かい事を気にしないようにした。よし、とりあえずはこの森を抜けない事には何も始まらないか。俺はそう考え、森の中を歩き始めた。

「大分暗くなってきたな・・・つか腹減ったあ」

朝食食べたきりで何も食べていないことに気づいた。自分の周りの木々には果実等ついておらず、腹の音がぐぐつと鳴り始めた。

「流石に創造の力はもらってないからなあ、食物は出せないし現地

調達・・・とにかくこの森を出ないとな。」

金の心配はない。この世界に飛ばされた時に神様がサービスしてくれたのか、一緒に袋がついて来た。中を覗いてみるとお金と地図が入っており、そこでまた神に感謝を捧げたが一緒に食料も入れておいて欲しかった。後、袋の隣には禍々しいオーラを携えた刀と刀身が見えない程美しい剣が刺さっておりそれもついでに戴いておいた。まあ、魔法使うから必要はないかもしれないけどねえ。

数刻前の事を思い出しながら歩いていると、なにやら美味しそうな匂いがしてきた。

「これは・・・この香ばしい匂いは・・・すき焼き!!」

そして、俺の身体は残像を残しその場から消えた・・・。

これが俺の力？（後書き）

BASTARD!! と言えば爆裂ですね。まあ、今後も色々と出ますけどね！

とりあえずオリ主の装備は・・・BASTARD!! の読者ならわかりますね？あの忍者マスターが装備している刀と竜王子の剣ですよ！

紅き翼との遭遇・・・！（前書き）

まだ3話なお気に入りが14件・・・これは今後も期待されている方がされていると考えてもいいんですかね。

色々駄文ではありますが頑張っていきますよー！

紅き翼との遭遇・・・！

??? side

「おお、詠春これがつ！」

赤毛の少年が鍋の中を覗いて喉を鳴らした。

「そうだ、これぞ日本の郷土料理すき焼きだ！」

詠春と呼ばれた男が胸を反らし、どうだ！と言わんばかりの顔を覗かせた。

「ほほう、美味そうじゃのう。どれ肉を・・・」

白髪少年と赤毛の少年が肉を入れようとした所・・・

「待てナギ、ゼクト！まずは火の通りにくい野菜からだなあ」

詠春がゼクトと呼ばれた少年とナギと呼ばれた少年を諷めようとしている所を隣の男 アルビレオ がクツクツと笑ってみせ、

「知ってますよ、詠春。貴方みたいな人を鍋將軍と言っみたいですね？」

「なんと。何か強そうな響きじゃな」というのはゼクト。

「すげえ強そうだな鍋シヨーン・グン・・・俺の負けだ。詠春、今日からお前が鍋シヨーン・グンだよ。」というのはナギ。

「んー？なんか褒められてる気がしないなー（鍋奉行じゃなくて？）」

と団欒としてるところへヒュツと風切り音が聞こえたと思えば目の前の鍋は哀れの無い姿へと変わっていた。主に詠春の頭の上に。しかし具材が散らばる中、肉だけは死守されていた・・・

「ちょーつと食事中に失礼するぜ！放浪傭兵剣士ジャック・ラカン参上！あんた達が赤き翼の諸君だな？いつちよ勝負しようぜ！」

褐色肌の大柄の男 ジャック・ラカン は先ほど投げた剣を拾い颯爽とナギ達の前に立ちはだかった。

「・・・せん」プルプルと怒りに震えながら詠春は頭から鍋を外した。

「あん？」と状況を読んでないラカンは聞き返した。

「食べ物を粗末にする奴は許せん！」詠春は一瞬で刀を取りラカンへと向かった。

「いいぜ、まずはお前からか 　　ん！？」

「おい、師匠！なんかすげー魔力の塊が近いづいてくるぞ！」

ナギが驚愕の顔を浮かべゼクトに尋ねた。

「う、うむ。このような魔力は感じた事がないぞ。アル、索敵を頼む」

「ぐう・・・気合防御！」

ラカンが身の危険を感じたのか防御の構えを取り・・・炎熱波に飲み込まれていった。

洗side

うう・・・折角の飯にありつけると思ったのに・・・と思って八つ当たり今回の犯人の大男に向かって魔法を唱えてしまった。魔法を唱えたからかー（安易に八つ当たりをしたからか）少し落ち着ける様になつてきた。周りにいる人を見渡せば・・・

「（ちょっと！こいつら紅き翼じゃん！ということとはさっきぶっ飛ばした大男ってラカンの事か！）」

心の中で、やっちまったなあーと思っっていると

「おい、お前。さっきの魔法は一体なんだ？初めて見たぞ！」

とやや興奮気味のナギが話しかけてきた。

「お？おお。あれは精霊魔法だが・・・多分理解できないと思うぞ。」

「理解できない・・・とは？それに精霊魔法といっても私たちとは違う感じがしますね」

「うん、そうだと思う。まあ先祖代々伝わる魔法だと思ってくれればいいよ！」

ナギとゼクスは納得できなさそうな顔をしているが、アルは笑顔のままだ。詠春はどこへ怒りをぶつければ・・・と隅で泣いていた。

「それで、貴方は一体誰ですか？」

そついや名前を言ってなかったな。名前は別に元々の名前でもいいだろうな、うん

「俺の名前は如月 洸です。気楽に洸って呼んでね」

と良い笑顔で言った・・・つもりだ。

ナギside

なんかすげー魔力を持つてる奴がきたと思ったたら知らない魔法をぶっ放しやがった。しかも威力も高い。本人に聞いてみたら精霊魔法は精霊魔法だけど何か別のものらしい。よくわかんねえけど、こいつ強いって事だよな！

「俺はナギ。こっちがゼクトって言って俺の師匠！んでそつちがアルでそこで泣いてるのが詠春だ！」

「わしがゼクトじゃ。それにしても威力の高い魔法だったの・・・」

「私はアルビレオです。アルと呼んで下さい。ゼクトの言うとおり

変わった術でしたね。詠唱コードも唱えて無かったですし、興味深いです。」

「私は近衛詠春だ。私の怒りのやり場を失ったが食べ物への仇は取れた。ありがとう」

全員の自己紹介が終わったところで先ほどの大男も立ってきた。

「いてて・・・なんか凄い魔法を食らったぜ。おい、黒髪野郎！中々やるじゃねえか！俺様と勝負しろ！」

「腹へって気が立ってたから結構本気で放ったのに・・・流石ジヤック・ラカンだな。」

勝負！？俺もつえー奴とは勝負したいぜ！

「おい、洗！俺とも勝負しろ！」

「おいおい、なんだよ。バトルジャンキーばっかだよ。いいぜ、まとめて相手したらー！」

二人まとめてつか？上等だ。あそこの筋肉野郎と一緒にされちゃ困るぜ！

「食らえ！来たれ 虚空の雷 薙ぎ払え 雷の斧！」

その後、三人の戦いは熾烈を極めたが数時間決着がつく事はなかった。

「拉致^{オシ}があかないな・・・！仕方ない、受けろっ地獄の炎を！爆炎^{ヘリ}波動！」

洸が魔法を唱えると洸の周囲を超高熱の火柱が昇り、辺り一面を焦土にした。むしろマグマの海ができた。ラカンとナギは仲良く気絶したという・・・

紅き翼との遭遇・・・！（後書き）

ちよびつと長くなりました。筆者の中での高位の火魔法を出してしまいました。つか、戦闘表現とか難しいですね、というか威力高すぎですかね？w

皆様の感想とお気に入り登録等が俺の力になるっ！

和解、そして (前書き)

ふひー、なんとか連続更新できてるけど・・・そろそろしんどいでござる！

和解、そして

流石に伝説級・・・チート二人はしんどいな。神様にもたらされた知識がなけりや完全にフルボッコにされてたな。今回も体力と魔力の差で勝てたようなもんだたし・・・経験をつまないとイケないな。

「おい、おまえ！」

おつ、ナギが復活した。一瞬で防御に全魔力を通したからといって爆炎波動ヘリオンですら気絶＋多少の火傷で済むのか・・・公式チートだな見ればラカンももう起きてるし、強すぎだろ。イフリートも隅っこで泣いてるぞこりゃ。

「ん？なんだ、ナギ」

「お前、俺たちの仲間になれよ！」

テンプレ（ごほんごほん）・・・そうだな。経験をつむためにも、原作介入するためにもここは仲間になった方がいいだろうな。それに、ついていった方が面白そうだし（笑）

「いいよ、俺で良ければ力を貸すよ」

「本当か！？良い競い相手ができたぜ」

ナギは笑顔を浮かべてガッツポーズを取っている。その隣でゼクトはやれやれといった表情を浮かべており、アルはニコニコと笑顔を

振りまいてる。こいつ何考えてるのかわかんないな・・・詠春は・・・はっ!?

「だっ、大事な事を忘れていた」

「え?どうしたんだ?」

俺はガクンと膝をつき、眼をうるわせながら

「はら・・・へったんだ・・・」

意識がもうすぐ飛びそうな程、空腹感が襲ってきた。詠春が再び料理を作り始めてたからだ。

「おっ、おい!詠春、早く作ってやってくれーっ」

その後、なんとか飯にありつけた俺だが・・・

「おい、ラカン。何故あんたも飯を食べてる?」

隣ではナギとラカンが肉の奪い合いを始めていた。

「ん?体力の回復には肉を食べないとな!それにあんたらといった方が退屈しなさそうだ」

ガハハと言わんばかりの笑顔でそう言ってくる。まあ、確かに退屈はしないよな。というか、俺と同じ考えだし。

「それではジャックもついてくるといことでしょうか。ふう、私達のパーティーにチートが3人も。やれやれですねえ」

そついうアルこそ、チートに見劣りしないと思うんだが・・・

何はともあれ、俺はこうして紅き翼と合流する事になった。

これからどんな展開が待っているのかがとても楽しみだ。そう思い床についた。

いつもの朝日ではなく、この世界での朝日を見るために・・・

和解、そして （後書き）

ネギま！ってこんな話でいいのかな？@@@；

色々わからない所ありますけど、なんとか赤き翼に加入したんだ
ぜ！

キャラ紹介（ストーリーに合わせて更新していくかも）（前書き）

べっ、別にもうストックがないとかそんなんじゃないんだからねっ！

困ったときのキャラ紹介ですねっ

キャラ紹介（ストーリーに合わせて更新していくかも）

キャラ紹介

オリジナル主人公

名前：如月 洸きわひつ こう

能力：

？その世界の最高の生物を超える体力と魔力・気力
？各分野における技術―（戦闘技術や魔術の知識や気の使用法等）
？その世界だけではなく他の世界の魔法を使用できる
基本的にはBASTARD！の魔法しか使わないようにしている
（それで十分だと考えている為）

年齢：18歳程度（本来は20歳） 神様の悪戯？にて若返っている。精神が肉体に馴染む、最高の体力を維持する為、更に無限に溢れる魔力・気力により不老状態である。 現在は再生のために一回り小さくなってしまった。成長したが14 15歳程度にしか見えない。元々は黒髪黒目の東洋顔だったが、復活した際に色素変化が起こってしまったのか、魔力の影響からか朱色がかった髪に真っ赤に燃える程の赤目になってしまった。やはり爆炎の魔力が高いようだ。

性格：前世では普段から温厚で好青年であったが、ナギやラカンの影響により多少好戦的になるも温厚であるのは変わりなし。（多少口調は変化した）戦闘時になると超高魔力の影響により気分高揚状態となる。そうなると高圧的・傲慢状態となる。（要するにDSのような感じになる）

例：うるせえー！てめえは死ねえー！！ すっかり好戦的に。最初とは違い普段からもちよつと俺様口調が入っちゃうときも… どうやらDSの格好した自分が混じっておりその影響で高圧的になつてしまつた様子。（第20話参照）

ネタを愛する心を持つており、鞆の中に入つてた様々な道具を使い日夜、人を困らせているという…。

二つ名：大魔王（自称）

爆炎の魔法使い（昔から言われている二つ名。主な二つ名である。）

暗黒の破壊神

狂乱の支配者（爆炎3：7狂乱 最近はこのような割合で知られてます。）

パクティオーカード：・英雄の幻想 アーティファクト：ファンタズマゴリア

（効果：術者の魔力に応じて好きなものを召喚できる。1日に3回まで）

・真祖に魅入られし者 ア

ーティファクト：ルナティックフルムーン

（効果：満月時に使用すると自らの能力に真祖の能力を加える事が出来る。）

オリジナル2

蘆江 寧 あしえ ねい

能力：？神様に頼み洸の場所まで追いかけていった。願いごとはそれに集中していた為洸の様に色々な能力は持っていない。

？体力・魔力の強化（異世界へと渡る際に付加された能力。体力魔力共にナギの劣化版程度の能力）

？劣化版万能魔法（洸の？と同じ能力。ただし、威力は大きく劣る。）

洸の幼馴染にして自称恋人。

洸以外の男は眼中になく、全ての愛を洸に向けているものの本人は懐かれてるなーという程度にしか認識していない。第1話で洸が死んだからは、自分の心も同じように死んでしまう。洸と同じように洸が助けた少年を庇い昇天する。

そして、ネギま！の世界へと来る。

キャラ紹介（ストーリーに合わせて更新していくかも）（後書き）

話数を稼いだけとか言わないで><

ああ、石が飛んでくるううう

グレート＝ブリッジ奪還させていただきます。(キャッツカード(前書き))

毎日更新を予定していたのに、数日も遅れてしまうという体たらく！

申し訳ございません、お許しください！

そんな体たらくをしていた自分の小説がなんと・・・

アクセス15000を超えました！

未だに冷めやらぬ興奮ですが、皆様のご協力あつてのことです。感謝
感謝

グレート＝ブリッジ奪還させていただきます。（キャッツカード

俺達はあれから傭兵家業を行いながら世界を旅した。俺も自分に操れる魔法も少ないと感じ、日々魔術構成の特訓をした。それを見たラカンやナギもまた俺に負けじと特訓を繰り返していた・・・そんな同年のあくる日、帝国により連合の喉元に位置する巨大要塞「グレート＝ブリッジ」が陥落した。

俺達「紅き翼」は人助けや魔物退治、盗賊の討伐等を行いそれにより名が売れてきたようだ。そのためか、今回のグレート＝ブリッジ奪還作戦にも協力するよう連合から依頼された。

「なあ、ナギ。奪還作戦参加するのか？」

「ん、なんだコウは恐いのか？」

ナギがニヤニヤして俺に聞いてきた。こいつ意地悪だなあ・・・（笑

「人を殺すことには慣れはしないが・・・大分落ち着けるようにはなった。今なら役に立てるつもりだ。」

そう、この世界に来てから俺は人を初めて殺した。前世？では平和な国に住んでいたからわからなかった。しかし、ここは暗殺も起こる世界。人殺しという罪に押しつぶされてたら次に死ぬのは自分なのだ。そうわかってながらもこの数ヶ月、自分の血塗られた手を見て罪に苛まれる夜が続いた。ここ最近でなんとか克服できるようになってきたが。

「辛いんだったらいいんだぜ？その分、俺が暴れられるからな」

「ラカン・・・すまないな。危なくなったら助けてくれ」

「お前の危ないところなんて見たことないけどな」

ラカンが肩をすくめてそう言つと周りの皆も笑い始めた。いい奴らだよ、こいつら・・・

「おっほー！これ全員敵かー！？」

「ナギ、出過ぎるなよ？いくらお前がチートだからと言って限界はあるんだからな」

「そういうお前さんもつい出過ぎになるじゃろ。」

「ガハハ！確かにそうだな」

「ジャック、貴方ですよ」

「脳筋多いなこのパーティー・・・」

各人がそれぞれ会話を残す。周りは緊張してるのにこの一帯だけは緊張という空気は流れていない。周りからは訝しげな眼を向けられているが、特に気にする事もなかった。

「よし、紅き翼・・・行くぜ！」

「おっつ！」

そして開戦となった

「おおお！爆裂焼球！爆裂焼球！怒龍爆炎獄！！」
インテリベリ インテリベリ ナバーム・デス

俺は無限に溢れる魔力を活性させ、複数の小火球や大火球を群れに向けて打ち放った。インテリベリちなみに！爆裂焼球つてのが小火球を生み出す魔法であり、ナバーム・デス怒龍爆炎獄つていうのが大火球を生み出す魔法だ。

大小の火球により地は決れ爆発に巻き込まれ次々に溶け朽ちて行くヒトの姿に嘔気を感じながらも蹂躪を繰り返した。正に阿鼻叫喚とはこのいったものを言うんだろ。隣をちらりと見てみると、ナギやラカンも集団戦闘を繰り返しており俺たち紅き翼は前へ前へと進んでいく。

しかし、流石巨大要塞と言われるだけあるな。防御が堅いぜ。と、考え事をしていたら数人の魔法使いが俺に向けて魔法の射手を放ってきた。しかもかなりの量だ。量に伴い、質もかなり練られている。避けられない・・・かな？

「避けなければ・・・防げばいい。エレエナムメイリン！聖靈よ 我が盾となり給え 一霸邪霊陣（ストライバー）！！」

俺を中心に絶対防御の魔法結界が張られる。この魔法結界は全ての魔法を防ぐ絶対魔法防御結界であると同時に使用者の魔法すら結界外へ漏らさないため俺自身も魔法は使えなくなってしまう。だが、そんなデメリット俺には通用しない！

「こういう時のために・・・これがあるんだよな！」

俺は腰に下げた刀・・・妖刀ムラサメを手に取り、

「いくぞ、ムラサメ・ブレード！魔人剣！！」

刀が眩しくひかり、足を一步踏み込み、刀を薙いだ。高速の剣技が魔法使いを切り刻む。肉を抉る感触、飛び散る血潮や臓器・・・目の前でその惨状を見ても心はクリアなままだ。ん、一人切り損ねた奴がいるな…。

「ひつ、ひい！こつ、殺さないでくれ！」

「…悪いな。先ほどまで俺を殺そうとしてた奴を許すほど今の俺には余裕はないんだ。お前さんも死ぬ覚悟があつて戦場に出てきてるんだろ？それなら潔く…消えてくれ。」

刀を下段から斜め上段に向かつて切り払い、残った男も絶命した。俺もいつかはそちらに行くからな。だが、その時が来るまでは死なない。今はその時ではない…！！

刀についた血を払い、俺は味方に向かつて声をあげた。

「今からすっげー魔法を使うから、各人自分の命は自分で守れよ！守れない奴は全力で逃げろ！！俺の魔法を食らったら一瞬で沸騰するぞ！」

味方に注意を促し（一応俺も防御結界を一人一人にかけてあげたが）その後、巨大要塞へ向けて呪文（スペル）を唱え始めた。

「プー・レイ・プーレイ・ン・デー・ド・・・」

俺が呪文^{スベル}を唱え始めると、俺の周囲より炎が溢れかえってくる。その炎は大地を焦がし、人をも喰らい、全てを無に帰す

「地の盟約にて従いアバドンの地より来たれ　ゲヘナの火よ爆炎となり　全てを焼き払い尽くせ魔焦熱地獄^{エグ・ソイダス}！！！！」

超超高熱の炎の塊を身に纏い、俺は敵陣を飛び回った。俺と触れたモノはじゅっと音を漏らすと共に身体を灰燼と化した。

俺の魔法に守られていた兵士が言うには、余りの超超高熱に岩どころか大地をも歪ませ土地を変形させたという。おー、こわ。

「ちと、やりすぎたか？」

俺はひと時地獄の炎となり戦場を駆け巡った。もちろん、自分の足場なんて融解されて存在を留めていなかったし、俺が防御結界をかけた奴以外の姿等見えもなかった。そこにいた全ての存在が消え失せていたのだ。でも、ちゃんと加減をして要塞だけは頑張って壊さないようにしたんだ。ちよつと外壁が融けちゃっただけだね。

「すっ、すげーじゃねえか！コウ！」

俺の背中をバンバン叩きながら喜びの声を上げるナギ。

「相変わらずのパワーですね。流石、バグの塊ですねコウ。」

アル、ニヤニヤしながらそう言わないでくれ。やりすぎたと思ってるんだから。

「まあ、敵の戦力も大幅に削いだ事じゃしのうち。地形が変わって逆を守りやすくなったようじゃしのうち。要塞も手に入れたし詠春の国でいう一石三鳥という奴じゃな」

ゼクトは優しいなあ・・・慰めてくれるとは・・・

「そんな言葉はないんだがな。俺としては洸が無事でよかったよ。」
そう言いながら詠春が追悼の黙祷をしている。それを見て俺もそれに習って黙祷を捧げた。

「まあ、敵だったからいいんじゃない？こいつらも殺られる覚悟があつてでてきてるんだろうし。」

確かにその通りだよな、ラカン。ちょっと殺りすぎちゃったけど・・・これが戦争というものなのかな。悲しい気分だ。

「よし、とりあえずは勝ったんだ！全員、帰還しようぜ！」

俺たちは草木も残らぬ荒地を後にした・・・。

これを機に俺達紅き翼は一気に有名人となった。ナギは「千の呪文サウザントマスタの男」と呼ばれるようになり、俺にも二つ名がついた。

「暗黒の破壊神」や「爆炎の魔術師」、等どこかで聞いたことあるような二つ名であったので大変満足だった。これからは他の四天王の魔法も使えるよう更に自分を磨いていくとしようかな。

グレート＝ブリッジ奪還させていただきます。（キャッツカード（後書き）

初めての大戦。洸の気持ちは罪悪感でいっぱいです。

なので、前回のキャラ設定に書いた戦闘中の高圧的・傲慢というのは未だその一片を見せません。今後、戦闘を重ねていく内にどうなるのか・・・？w

皆様のアクセス、感想、お気に入りが俺の力となる！

ここまでお読みくださりありがとうございます！（一言言わなくてもいいって？すんませw

番外編1〜はじめての・・・（前書き）

仕事忙しいっす。

でも、書き続けるっす。

20000アクセス突破！更なる応援待ってます！

番外編1 はじめての・・・

「何？南の村から救援要請だと？」

俺達は泊まっている村の酒場でそんな話を聞いた。どうやら村人が言うには・・・

「山賊が村の金銀を狙って定期的に襲っているようですね」

「へっ、あそこの村は一宿の借りがあつたな。なら俺達でぶつつぶしてやろうぜ！」

ナギのこういう素直な感情好きだな。好感が持てるってやつか。これがナギの英雄としての素質なんだろうか？

「俺様も協力するぜ、そんな胸糞悪い話は好きじゃねえぜ」

ラカンも同調してくれる。こいつも良い奴だな。

「それじゃ私は先に転移魔法で向かいますね。ゼクトと詠春は私が。ナギとラカンはコウにつれてきてもらってください。」

そういい残しアル達は影へ飲み込まれていった。アルの奴・・・まさかアレを試させてくれるためにチート級を置いていつてくれたのか？・・・友よ。感謝するよ！

「コウ！お前転移魔法まで使えるのか！？むちゃくちゃな奴だな」

ナギ、お前にはむちゃくちゃと言われたくないよ。羨ましがらなら

早くあんちよこをどうにかしてくれ・・・

「おう、この前自分のバッグを覗いたら良い物があってな・・・っし、これだ」

そういつて俺は鞆の中からバットを取り出した。

「おつ、おいコウ…なんだよ、その禍々しい棒は？」

流石千の剣を持つ男…この禍々しさがわかるか！

「ふっふっふ。これこそ我が宝具…アビゲイルセットの一つ、アビゲイルバットだ！」

そう言いながら俺は素振りを済ませ、二人に近づいた。

「あびげいるばつと…？おつ、おい。なんでそれを持って近づいてくるんだ？」

ふふっ、ナギ。痛いのは最初だけさ。

「大丈夫！気づいたら目的地さ！アノクタラ サンミヤク サンボダイ…」

俺の周囲を闇の瘴気が覆う…そしてその闇は全て俺の持つバットへと力を集結していく　！！目の前から逃げてだそうとする二人に向けて解き放つ！

「いってこい！俺式アビゲイルホームラン！！」

俺は縦から下に向けて斬撃を払い、一人目 ラカン を遙か彼方へと吹き飛ばし、返しの一閃でナギを同じ方向へと吹き飛ばした。

「っし、俺も追いつこう。天翔 ワッ・クォー 黒鳥嵐飛 レイ・ガン！ いくぜー！」

遙か彼方まで飛ばされた二人を高機動飛翔呪文で追いかけていった。

く南の村く

先についていたアル達は村長に話を聞いていた。どうやら噂通り山賊に襲われているとの事であった。

「ふう、自分が生きるためとはいえ人を陥れるのは良くないな。」

詠春がため息をつき、空を仰いだ。蒼天の上空は曇りも無く・・・曇り無く・・・？

「何か凄い勢いで飛んできますね。鳥でしょうか？」

「いや、鳥はあれほどの速度は出せないだろう！ というかこっちに近づいてないか！？」

二つの黒い点は・・・否、その後ろにもその二つの黒い点を越える速度で近づいてくる点が見えた。三つの点は速度を落とさないままこちらに・・・というか明らかに落下地点ここじゃないのか！？

「ふう、精度は完璧ですが・・・些か危険ですねえ。」

アルは独り言を呟いたかと思うと重力魔法を唱えた。二つの点は地面にめり込み、後から来た点は重力魔法の範囲外で急停止しゆっくりと近づいてきた。

「おいアル！危ないじゃないか！」

最後の点 洸は冷や汗をかきながら近づきそうだった。

洸 side

危なかったぜ。いきなり目の前に重力魔法が展開されるんだもん。ナギとラカンはずぶれちゃったけど・・・こいつらチートだから大丈夫だろう。

「むう、あれがコウの転移魔法か？転移というか吹き飛ばしただけのようじゃが・・・」

「だがちゃんと狙い通りだったっしょ？」

「モロに俺達狙いだっただけだな・・・」

詠春がやれやれと言った表情でそう言った。アビちゃん、あかんらしいよ・・・（涙）

「しかし、この二人起きませんね。」

アルが杖先でつつんとナギとラカンをつつくが一向に起きる気配

がない。・・・しめた！ここであのアイテムだ！

「俺に任せておけ！」

鞆の中をゴソゴソ漁り始める。ゴソゴソ漁らないと見つからないとかどんだけ亜空間なサイズの鞆だよな・・・っし、これだ。

俺はこれもまた怪しげなオーラをかもし出す「それ」を取り出す。

「そつ、それはなんだ？」

ふっふっふ。よくぞ聞いてくれたな詠春。まさか、1日でこんなにもアビゲイルセットを使うとは思いもなかったが・・・

「これはマジック・モーニングスター」「おはようマイ・マザー」一番星君グレート「さ！」

タララー！某緑の剣士がアイテムを手に入れた時の効果音が辺りに鳴り響いた！...ような気がした。

「それで、その邪悪な雰囲気しか感じられないモーニング・スターで何をするつもりなのじゃ？」

「ふふ、こいつに殴られたら眠っている時にどんなに深い魔法の眠りからも必ず目覚めさせる効果があるのだ。」

「では、仮に起きてたらどうなるんだ？」

「...永遠に眠る事になるだろう。よし、殴るぜ！」

詠春は俺を止めようとし、アルはニヤニヤ笑い、ゼクトは呆れた表情を浮かべていた。

「死ねえナギ、ラカアアンー!!」

俺は勢い良く振りまわしたモーニング・スターを叩きおろした。

「うおっ、あぶねえー!!」

ナギは起きてたらしく、即座に避けた…が。

グシャ

モーニング・スターは大地を砕き、ラカンを更に地面へとめり込ませた。

「ちっ、片方逃したか…」

「おいコウ！今舌打ちしたろ！死ぬとこだったじゃねえか！」

怒りを露わにしながらナギが近づいてくる…が。

「いてて、なんかすげえ勢いで殴られた気がしたぜ」

うわっ、こいつマジで起きてきた。アビちゃん嘘ついてなかったんだね…単にこいつがバグなだけってのもあるけどな。

その後ラカンとナギにやりすぎだ！と怒られた俺を放っておきアル、ゼクト、詠春は情報収集を続けていた。

「んで、ここがその山賊のアジトか。」

ナギが不適な笑みを浮かべてそう言った。

「・・・のようですね。中に何十人もの気配を感じます。」

「とりあえず潰せばいいんだろ？楽勝じゃねーか！」

「おい、ラカン。壊しすぎるなよ」

俺はラカンを抑えながら一つの事を考えていた。…人を殺さなければいけないのか、と。

「大丈夫か、洸。顔色が悪いぞ？」

「あつ、ああ。すまない詠春。大丈夫だ。」

「よし、景気づけに一発派手なのをぶちかましてやるぞ！紅き翼いくぜー！」

「おう！」

ガァン！と山賊のアジト内から大きな破壊音が鳴り響いた。

「こういつ狭い所では魔法は使えない…かな。俺の魔法は威力が強すぎるし。」

そういつて腰に下げた刀を抜き、俺は敵を探した。

「てめえら何者だ！」

角を曲がった先で敵に出会った。山賊は言葉を放った後、手に持っていた剣を振りかぶり斬り放ってきた。

「遅い！でやあああ！」

敵の斬撃を左へと受け流し、切り返して敵の身体を薙ぎ払った。流石名刀。人の身体をバターの様に切り裂いた。が。リアルに手に残る人を切った感触。途端に漂う濃厚な鉄を混じった血の香り。眼前に広がる贓物：肉、肉、肉、肉、肉

「うっ！」

俺は耐え切れずその場で嘔吐し、床に尻をついた。自分の身を守るためとはいえ人を斬った感触や匂いに勝てなかった。少しばかり時間が立つと、匂いは気にならなくなったきた。この世界に来て身体の変調があったのか？なんにしる有難い。こんな場所で戦闘不能になってしまったては役立たずもいいところだ。

「ここにもいたのか！おいお前らついてこい！」

敵は待つてくれず、だしな。俺は立ち上がり敵を見つめた。数は3人か？

「こんな所で死ねないんだよ……！うああああ……！」

その後、山賊のアジトは壊滅。俺達は村に戻り村長に報告した。

「洸、大丈夫か？」

詠春が水を持ってきてくれる。周りを見渡せばお祭り騒ぎをしている。どうやら山賊を追い払った事で俺達は歓迎会を受けているようだ。

「ああ、ありがとう。…人を斬ったのは初めてなんだ。」

詠春は苦笑し、隣いいかい？と言った後隣に座った。何も言わず…ただずっと座ってくれていた。

番外編1 はじめての・・・（後書き）

後半の詠春が格好良いです・・・

アルが転移魔法使える使えないなんて知らないぜ！でも、アルなら何でも出来る気がするんだぜ！

まだ洸君が人を殺めるという事をしたことの無い話でした。ここから何度もこの体験をし、グレートブリッジ戦に行くわけです。

次回更新も早く頑張る！

集まる仲間　そして物語は一つのフィナーレへと（前書き）

やったぜ！連続更新だぜ！

そしてアクセス数3万超えました！これも皆様が協力してくださる
おかげです！

よっしゃー！ナギ編をこのまま終わらせてやるぜー！

集まる仲間 そして物語は一つのフィナーレへと

あの「グレートブリッジ奪還作戦」において俺達が有名になったのは前にも話した通りだ。俺達は二つ名までつき、今回新たな仲間ができた。そうガトウとタカミチである。ガトウは元々政府の調査員？だったらしく今回の戦争を裏で操っている組織があるのではないかと考えたらしく政府から抜け調査しているらしい。

「そういえばガトウは戦闘中になんか光輝くよね！あれ格好いいね！」

「そういえばそんなの見たことあるな！あれ一体なんだ？」

俺とナギがガトウに問い詰めてみた。

「ん？あれは感掛法と言つてな。魔力と気を……」

実際にやつてもらった。かつこよす！

「魔力と気を……こうか？ん、できないな。パワーアップできると思つたんだがなあ」

どうやら俺は気の質が大幅に違うらしく、魔力と溶け合う事はないとの事だ。……ん？気の質が違う……という事はもしかしたら“あれ”ならできるかも？

「ふうー……はあっ！ドラゴン・モード龍闘発勁！！」

ゴワッ！と俺を中心とし風が巻き上がる。どうやら異質の気という

のは龍の気だったようだ。しかし、今の段階でこんなにも気が溢れ出しているとは…百倍にしたら恐すぎだろ…

「すっげー！コウもなんかできたじゃねえーか！」

「感掛法とは違うな…気のみを更に数倍にした感じか。元々の量の比べ更には…・流石と言えるな。“暗黒の破壊神”殿は。今の姿じゃ暗黒ではなさそうだが。」

ハッハッハと笑いながらそう言うガトウ。いいじゃん、正にDSじゃないかその二つ名。俺は龍闘^{ドラゴン・モード}発勁を解き、色々な技を使えることに満足していた。

「コウさんは師匠の様に気を増幅させることができるんですね！」

タカミチ少年が目を輝かせながら聞いてきた。

「まあ、ガトウのとはまた違うらしいが…でも、できるようだ。」

「凄いです！」

その後もタカミチ少年と色々雑談した。なんか素直で可愛いのに、なんであんなオッサンに…

その後俺達は人助けを続け、更に有名へとなっていく。もちろん、ネギ君達が京都で見る写真も撮ったぞ。俺はナギの頭の上に腕と頭を乗せて撮ってやった。後でナギに怒られたけどな！

俺達が人助けをしている間にガトウ達は様々な情報を調査していた。

この戦いで裏を引いてる連中“完全なる世界”についてもだ。（多少原作知ってる程度の俺よりよっぽど物知りだ！）

そんなあくる日の事、ガトウから会わせたい人がいると聞き俺達紅き翼はその人物の元へ向かった。

その相手とはアリカ姫であった。そついやこんな人いたなーと思うながら挨拶を試してみた。

「お初にお目にかかります。」

「気安く私に話しかけるな」

おい、ガトウ。なんで俺達は罵倒されているんだ。俺は言葉攻めとか好きくないぞ！

その言葉に嫌気がさして俺は会談の席から脱退。暫くの間紅き翼とは別行動をする事にした。

初対面で罵倒されて黙ってホイホイ言うことを聞いている俺様じゃねえよ！

別行動を始めたといっても、連絡を取らないというわけではない。彼らがアリカ姫に協力してるという話も聞いたし、完全なる世界についての確証たる情報を掴んだという話も聞いた。しかし、その代償として紅き翼は連合の反逆者として追われている身になっている。俺もその時にいなかったとはいえ、紅き翼の一人として追われている…

「そろそろ合流すつかなー。大分戦にも慣れてきたし…慣れたらいけないんだろうけどな。」

いつまでも別行動しているわけにも行かないため、何か大きな行動を起こす時に合流しようと考えていた矢先に、彼らはある行動に出るということだ。夜の迷宮に幽閉されているアリカ姫を救出しに行く…そこで合流しようと考えた。が、

「あいつらあつという間に救出しやがつた…」

そう、既に救出しており今アリカ姫は俺達紅き翼のアジトに連れられていた。

「よっ、ナギ。姿見んのは久しぶりだな。」

「おっ、コウ！久しぶりじゃねーか！今まで何処に行ってたんだよ！」

ナギは俺の姿を見かけると満面の笑みを浮かべて俺に近づいてくる。こうみると、やっぱりこいつはカリスマあるんだろうなと思えるな。

「色々あつてね。（まあ、お姫様の態度がむかついたからだけど）今度から俺もまた一緒に行動するよ。」

「へへっ、コウが居れば俺達も更に無敵だなっ」

そうだな。とナギに言おうとしたところ、奥の方から何やら大声が聞こえた。

「ん？アリカ姫以外にも誰がいるのか？」

ああ。とナギは俺にも夜の迷宮での事を話してくれた。そうかテオドラがいるのか。扉を開け、俺も中に入ってみる。すると、ラカンと仲良く？お話していた。

「むっ？誰じゃお主は」

褐色肌の少女、テオドラは俺に向けてそう言った。

「初めまして、皇女様。俺の名前は如月 洸だ。今までこいつらは別行動していたけど紅き翼の一員だよ。」

「コウ？なんと！ではお主があのか“狂乱の支配者”か！？」

テオドラはさつと、ラカンの後ろに隠れ警戒心を更に強めた。あるえー？なんかまた二つ名増えてない？しかも、それがメインなの！？

「待て、なんだその“狂乱の支配者”ってのは！？」

「最近のお主の二つ名じゃ。戦闘中は狂ったように敵を討ち滅ぼし、戦場を支配するという恐怖からつけられたのじゃ。」

あるえー？嘘だろそんなの…確かに昔に比べてちょっとアグレッシブになった気はせんこともないけど…

「爆炎の魔術師とかどこにいったんだ…」

「貴方、最近では炎以外にも魔法を使っているではありませんか。」

アルが的確に突っ込みを入れてくる。確かに色々試したくて様々な魔法使ったよ？カルの魔法とかネイとかアビちゃんとか…それでも主に爆炎魔法を使っていると思っていたのに。

「それにしても貴方が狂乱ですか。前は戦闘に出るたびに緊張や泣き言を言っていましたのに…人は変わるものですね。」

「泣き言は言ってねえよ！」

俺達がそんな話をしているのを横目にナギとアリカ姫はなにやら真面目な話をしていたらしい。あいつらデキてるな。まあ、そうじゃないとネギ君産まれないしな。

集まる仲間　そして物語は一つのフィナーレへと（後書き）

次でとうとう墓守の迷宮へ突入・・・しかし、造物主というだけあってウチの造物主は強いんだぜ！（え？他のも強いって？たはー！

洸はついに龍闘^{ドラゴン・モード}発勁を会得。しかし、まだ修練が足りないので百倍は無理なのです。残念。

次の戦・・・予想できるか！？ええ、できないと思いますよ（ギリッ

決戦 一つ目のフィナーレ (前書き)

PV40000アクセス突破！新作出すたびに10000近くアクセス増えるようになりましたね！

普段の俺とは思えない程の量・・・だと！？（多分

これにて戦いは終了、もうすぐ原作介入だね！

そして今回の最後はまさかの・・・！？

決戦 二つ目のフィナーレ

〈決戦前夜〉

俺達は墓守りの宮殿の近くに陣を張り、最後の夜を明かそうとして
いる。

「なんだかんだで明日が完全なる世界との決戦かー…長いようで短
かったなあ。」

「おう、コウ。こんな所で何感慨ぶってやがるんだ？」

「おいおいナギ。明日は決戦なんだぜ？ちよつとはこう…なんてー
の？」

そう俺が言葉に悩んでいると、ナギは大笑いを始めた。

「何言つてんだコウ！俺やお前、それに紅き翼がいるんだ。負ける
わけなんてねーだろ！」

こいつは…。

「っち。ナギに諭されるなんてな。ああ、そうだな。俺達がいりや
負けるわけないな！」

俺達は暫く笑いあつた後、ナギは明日に備えて寝ると言つて寢床に
戻つていった。

「…。いるんだろ？アル」

「おや、気づかれてましたか。」

俺がそう呟くと後ろの木の陰からアルが出てきた。

「弱気になるなど、今の貴方らしくない。どうかしましたか？」

確か原作では今回の黒幕…造物主だっけか？が出てくるんだっとな。流石の俺達もただじゃすまないだろうし…って考えてるわけなんだよな

「ん、嫌な予感がするんだ。…アルちょっと耳を貸してくれ。」

アルは何ですか？という表情を浮かべ俺の話に耳を傾けた。その後何を言ってるんですか！と言わんばかりに驚愕した後、俺を睨み付けた。が、俺の真摯な表情から冗談を言っているわけではないと感じ、洪々了承した。

最後の夜が終わりを迎えようとしていた。

さて、とうとう敵の本拠地、墓守りの宮殿へと攻め込む時がきた。眼前には幾万を越す敵の群れ…俺はこれからの戦いに身体を震わせた。

「なんだ、コウ。まだびびってんのか？」

ニヤニヤしながら話しかけてくるナギ。

「ばーか。これは武者震いってんだ。強敵を前に俺の身体が喜びの声をあげてるのさ。」

「すっかりコウもこのバカ共と同じ様になりおったのう……」

ゼクトは呆れ顔をしつつ、笑い顔を浮かべた。

「連合、帝国共に間に合わない……か。」

「仕方ないさ、詠春。既にタイムリミットだ。」

「よし、皆！これが最後の決戦だ！気を抜くなよ！？」

ナギが後ろに声をかける。俺達の後ろには帝国、連合と各国が集まっている。

「ナギ、初撃は俺に任せてくれ。目の前の雑魚共を一掃してやるよ。」

「

「おお？言ったな？久しぶりにお前の広域魔法……見せてもらっぜ！」

俺はニヤリと笑い、

ワッ・クォー

レイ・ガン

「天翔 黒鳥嵐飛！」

敵の群れに突っ込んだ。

着地すると同時に爆裂焼球インテリベリを放ち敵を一掃した。

「こんだけ囲まれてるとすっげーな。俺様の力を見せてやるぜ……！」

俺は魔力を収束させ、滅びの呪文^{スベル}を唱え始めた。

「デイ・グム・ステイン！！！！大地と大気の精霊よ！！古の契約に基づきその義務を果たせ！！」

^{スベル}呪文を唱え始めると、地は幾重にも裂け雷鳴は轟き風は嵐となつて吹き暴れた。その現象により敵の群れは何千と吞まれていったが、それでも敵の数は圧倒的に多かった。何千という敵が呪文を重ね、一つの巨大な光の矢を作り出しそれを解き放った。

「ふんっ！」

迫る巨大な光の矢を俺は片手で打ち払った。巨大な魔力に包まれた今の俺にはその程度の魔法の矢等通用しないのだ！

「わははは！！見たかサル共！貴様らの魔法等蚊程度にしかすぎんわ！見ろ、大地と大気に満ちた精霊達の魔力が共振しているだろう？性質の異なる両者の魔力が完全に融合した時……？これ以上は判るな？なら散りも残さず消え去れ！天地爆烈^{メガデス}！！！！」

強烈な光を放ち、凄まじい大爆発を巻き起こした。

「うははは！破壊だ！全て破壊し尽くせええ！」

くナギsideく

すっ、すげえ！

コウが敵の群れに飛び去り火柱が上がった後、ここら一帯の天候が一気に変わった。その後…コウの魔力が膨大に膨れ上がり…閃光を大撃音が鳴り響いた。眼を開けると、地の先まで埋め尽くすのではないかと思っていた敵が…一瞬で消え去った。

「凄い威力ですねえ…流石チートバグ。あれが噂の「狂乱の支配者」ですか。」

クスクス笑いながらアルはコウを見ていた。俺達のところまで聞こえるほどの笑い声が今のアイツなんだろう。良い感じに壊れてきたな！

「なあゝにしてみんだ、ナギ！残りの雑魚共は俺が片してやるから先に特等席に行つとけ！」

「へっ、言うようになりやがって。いいか？コウが道を開いてくれた！」

俺はニヤリと口角を上げ、

「野郎共…いつくぜーっ！！」

おおおおー！！と誰もが声を上げ足をひたすら前へと動かした。

＼洗side＼

ふう、大分殲滅したな。それにしても天地爆烈^{メガデス}で結構戦力を削いだ

と思ったのに、まだまだワラワラと出てきやがった。まあ、俺の敵ではなかったけどね。

「コッ、コウ殿！」

ん？ああ、確かナギのファンのセラスさんだっけか？なんでこんなに目がキラキラしてるんだろ？

「先ほどの戦闘…圧倒的な能力に感服しました。流石は「爆炎の魔術師」殿ですね！」

なっ、なんだと…この子。今俺の事なんて言いやがった…？

「あっ、この呼び名はもう古い呼び名でしたか。燃え盛る炎を見て、やはりこの呼び名が良く似合うと思い、つい…」

「構わない。むしろ、そう呼んで貰えると嬉しい。」

俺は気分が良くなり、戦場であるのを忘れて物凄い笑顔を振りまいてしまった。セラスさんは顔を真っ赤にさせながらサインを頂けないか？と聞いてきたので快く書いた。

「さて、俺はナギ達を追うわ。もう敵もかなり削いだし、後はお任せするね。」

セラスさんは敬礼の構えを取り、御武運を！と言葉をかけてくれた。

「しかしまあ…壊すに壊したなあ」

俺は宮殿の中に入るもトラップ等微塵も在らず、そこにあるのは既にガラクタと化したモノしかなかった。

「そろそろ最深部か…居たっ！」

俺が皆の下へ着く頃には白髪の フェイト の首を掴んだナギの姿が見えた。そして、その奥から強大な魔力が収束されるのも感じた。

「ナギ！あぶねえ！」

そう声はかけるも、ナギは魔法に打ち抜かれ吹っ飛んだ。くっ、もう一発来るかっ！？

「広域魔法盾！…ゼクト！」
シールド

「うむ、最強防護！」
クラティステー・アイギス

「俺様も気合防御！！」

落雷を彷彿させる轟音が一帯に鳴り響き、何度も俺達を打ち貫いた。俺の魔法盾シールドが打ち抜かれるだっ！？くそっ…半端じゃねえな。こちらの惨状も酷いものであり、ラカンシールドは四肢を挟まれ、詠春もナギを庇ったのか瀕死状態。アルはなんとか息を繋いでいるが、重症メーバーの治癒をする余力も無いらしい。俺も全身に火傷を負っている。

「くっ、この野郎…！！」

「待て…コウ！」

後ろを見てみると、詠春に庇われてこれまた瀕死だったナギが立ち上がっていた。出血も多く今にも倒れそうであるが、その眼からは光が消えてはいなかった。

「ナギ！その身体では無茶です！」

「アル、お前の残り魔力全部で俺の身体の傷を癒してくれ。」

「しかし…それでも。」

「数分持てばいい！」

アルが引き止めるのも無理はない。先ほど強力な魔法を放った奴ライフメイカー造物主は尋常ない程の魔力を漂わせている。だが、ここで躓いていられないのも確か。

「ふふつ、ワシもいくぞ。このメンバーの中では傷はまだ軽い方じやからな。」

「師匠、すまねえ。助かる。」

「しかし、二人では到底！」

「なら、俺もいけいいんだろっ？」

「コウ…貴方…」

アルは俺を睨みつけた。へへっ、俺の事心配してくれるのは嬉しいがここで無茶しないと全滅しちまうからな。

「ナギ、俺様が超強力な呪文^{スベル}でアイツを弱らせてやる…最後のとどめは任せる。」

「コウ…おう、わかったぜ！」

「じゃあ詠唱に入る。時間稼ぎを任せるぜ！」

ナギとゼクトがうなづき返した後、敵さんに突っ込んだ。

「はあああつ、^{ドラゴン・モード}龍闘発勁！！！！」

一人で旅をしている間に俺は^{ドラゴン・モード}龍闘発勁を改良させ魔力と気、両方を高めるといふ荒業に成功していた。魔力にも龍の気が混じりだしたかどうかはわからないが、これで普段の俺の数倍の威力の魔法が放てる。

空を眺めると、月が禍々しく光を放っていた。今日は新月じゃないから俺自身にもダメージがいくだろうが…こいつらを守るためなら…俺はっ！

「カイザード・アルザード・キ・スク・ハンセ・グロス・シルク…灰燼と化せ、冥界の賢者」

詠唱と共にありったけの魔力を練り上げる。魔力の鼓動に応じ、風が巻き起こり大気が振動し始める薄目を開けて敵さんを見てみるとゼクトが吹っ飛ばされるのが見えた気がする。ナギ、後もう少し耐えてくれ…

「七つの鍵をもて開け 地獄の門…！！ナギどけええ！造物主^{ライフメイカー}は死ねよやあああ！七鍵守護神！！！！！！」

俺の手のひらから純粹な破壊のみを目的とした魔力波が放たれた。
全てを飲み込む魔力波を恐れた造物主はナギを吹っ飛ばした後、こ
ちらに狙いを定め先ほどの強力な魔法を放った。魔力同士がぶつか
り合い、拮抗する。

「そんな急造で練った魔法に俺様が負けるわけがないだろうが！」

俺は自分の心臓を抉り取り出し、魔力の媒体として強引に魔法の威
力を増大させた。全身の毛細血管が破裂し、様々な部位から血を噴
出ているのを感じたが全て無視した。

「又ツ、又ウウウ！！」

拮抗したのは一瞬だった。膨大な魔力波は敵さんの魔法を喰らい、
直撃を食らわせた。

「これで、終わりだああ！」

瀕死状態と化した造物主へナギが残った魔力を拳に纏わせて打ち貫
いた。凄まじい轟音と共に造物主という存在はこの世から消え去っ
た。

「やつ、やったか…？」

「ナギ・・・ようやくた。俺たちの・・・勝ちだ。」

「勝ち…か。勝ちと言えるのかこの状況は…？」

ナギは周りを見渡すと瀕死状態の詠春、四肢を抉られたラカン、魔

力も切れ身体にも傷を負っているアル、行方がわからないゼクト、心臓を抜き出し血まみれの俺、満身創痍のナギ…快勝とは言えないな。

「・・・ナギ、ここは・・・俺に任せろ・・・」

ナギは何をするつもりだ？と言わんばかりにこちらを見る。というか、今更俺の状況を再確認したらしく、驚愕の顔を浮かべ俺に近寄ってくる。

「おまつ、コウ！死んじまうだろ！ちつ、治療を！」

あたふたするナギを見てふと笑ってみる。途端に血を吐きそうになるが気にしない。だって既に垂れ流しだもの。…ふと思い出してみるとこいつらとの旅も面白かった。やっぱり俺は人の役に立てるって事が好きみたいだなあ…今回の命は仲間を救う為に使ったから本望だよな？まだ俺が息が在るうちに・・・

「開け 天の聖櫃 主の名においてその力に満ちよ」

俺の無限に溢れる魔力、残った生命力を全て集める。原作では成功率は2割を切る低さだが、俺の能力チカラを全部使えば不可能も可能とできるはずだ。俺から金色の光が浮かび上がり皆を包み始める。アルがその異常に気づき、俺を見て「コウ！」と叫んだのが聞こえた。

「アル…昨日の晩に言ってた事…宜しく頼む……。ナギ、この先に・・・姫子ちゃんがいるはず・・・だ。絶対・・・救ってやれよ？ほいじゃあ・・・お別れだ。楽しかったぜ…フア・イト金色の癒し手」

その瞬間、紅き翼の全員を包んだ金色の光は更に輝きを増し、まる

で世界を包み込むように輝いた。

輝きが収まった後には五体満足のラカンや完全回復した詠春等の姿が見え、幸せそうに微笑み、眠るように倒れている洸の姿があった。

その後、世界を滅ぼす「反魔法場」を黄昏の姫御子ごと封印し、この戦いは幕を閉じた。英雄達ともう一人の英雄を讃える声を残して

決戦 一つ目のフィナーレ（後書き）

洩死んじやった。

これで俺の小説は終了です。声援ありがとうございました。

って訳にはいけません。

さて、BASTARD!! スキーな皆様はお分かりになりますか？

心臓を取り出す・・・死・・・強い魔力・・・

まあ、こんな感じです。既に原作介入しているという設定で若干本作品と設定を変える所があると思いますが、これも一つの作品というわけで見てみてください。

つか、造物主つえーよ・・・

復活（前書き）

まあ、直ぐ復活しちゃうんですけどね！

とはいえ、話上では二年間立ってます。色々と在ったんです。彼らにも。

50000アクセス突破！感謝の極みです！

復活

暗い…暗い闇の中…

いつぞやに見た真っ白な空間にいたのと真反対に、今度は真っ黒な空間だ。

自分というちっぽけな存在も…何も存在しないのではないかと疑ってしまふ程の暗黒がこの場を占めている。

俺は、一体どうしたんだっけ？…。ああ、金色の癒し手^{ファ・イート}を使ったから命を落としたんだっか？まあ、心臓も抉り出したしなあ…。

まあ、こうやって命を落とすのは計算の内だ。落としたくはなかったけども…。

自分の命を使った業は今回限りだな。もう俺の身体が保たない気がする。

アルはちゃんと約束守ってくれたかな？火葬とかされてないだろうな

さて、後は奴が復活するまでもう一休みするとするか

数年後

「コウの調子はどうだ？」

「変わらずですよ。それにしても驚きましたね、青酸カリでも飲んだのですかね？」

クスクスと笑うアルの横には棺。今では英雄となっているコウが居た。あれから数年もたつたつてえのに腐りもしない。相変わらず不思議な奴だ。

ここは、俺達が昔助けた村。なんだっけ？山賊から守ったんだっけ？その一番高い所にある祠にコウの遺体を置かせてもらってる。どうやら、本人の希望だったそうだ。

「コウ、お前のおかげで俺達皆元気にしてるぜ。…師匠だけはここにいるのかわかんねえけどな。」

あの時、全員が助かったと思ってたけどよく探してみると師匠の姿だけはなかった。どこにいつちまったんだろうか…

「へへ、そつえばお前にも報告しとかないとな。俺さ。」

ナギは最近の出来事などを棺に向けて話しかけている。確かに、あの時の戦いで得たモノは多く、以前に比べ平和になった。ただ、犠牲も少なくはなかった。

「　　というわけでさ、今から京都に行ってくるわ。えーしゅんの家に遊びに行ってくる。」

ナギはそう報告し、立ち去ろうとした。

おう、行つて来い。またな

「んえ!？」

「どうしましたナギ? そんな変な声を上げて」

ナギは辺りを見渡してみるが、自分とアル以外の姿は見えない。

「気のせいかな? それともお前が送ってくれんのか?」

今は亡き友からの祝辞の言葉と思い、ナギとアルはその場を去った。

「ここが、京都つて所かー!」

「えらい時間かかったが良さそうなお所じゃねえか」

「お前ら声がでかいぞ…」

詠春が呆れた声を出す、久しぶりに故郷だからか顔は綻んでいる。

今、ナギー一行は京都に来ている。メンバーとしてはナギ、ジャック、詠春、アル、アリカである。とはいっても、ナギとアリカは別行動をしており後の三人は詠春の家で飲んでいるだけであるが。

ナギー一行が今回の旅を満喫している中、過去に施された一つの封印

がとけかかっていた。その封印されしモノは邪悪な気を用い、自身の封印を解こうとしていた。

丁度その頃、魔法世界のある村では一つの異変が起っていた。

英雄を祭つてある祠から魔力が溢れ出しているのであった。勇氣ある少女が祠の中に入ってみると…

「え!？」

棺は開かれ、英雄 コウ の身体は空中へ浮かび塞いだはずの胸が開き、新たに作り出された心臓を収めようとしている場面であった。封印されしモノの邪悪な気に同調したコウの身体は自らの肉体の修正と精神の取り込みの両方を行っていた。そして、心臓が身体に取り込まれたその時、閃光が発せられた。

眼を瞑っていた少女が恐る恐る眼を開けると、そこには先ほどのコウより一回り小さくした男の子が立っていた。

「ちいつ、心臓を作るためとはいえ自身の身体を媒体に使わないといけないとはな。まあ、リョウメンスクナの神気のおかげでなんとか蘇る事ができたか。邪悪な気に混じる元々の神気の…な。お？少女、御腹が空いたんだが何か食事はないかい？」

目の前に急に現れた男の子の言葉は一瞬理解ができなかったが、男の子の腹の音が聞こえてくると緊張感も解け、クスリと笑った後村へ案内した。

（洸side）

ふう、なんとかまた戻ってこれたな。今はリョウメンスクナが復活する手前ってところか？俺が死んでから大分たったな…そんな事より腹減ったから飯食おう。

目の前に用意してくれた料理の山をあつという間に平らげ…村長に挨拶した。

「村長、すまないね。俺は今はこんなちんまりしてるけど昔あんたらを助けた事がある紅き翼の一人なんだ。俺の遺体を安置しといてくれて助かったよ」

少年のスマイル！と言わんばかりの笑顔を見せた洸はそのまま立ち上がり、村長に頭を下げた。

「とつ、とんでもないです！あの英雄殿をここに祭らせていただいたことはワシらにとってもとても名誉な事でした。一体何故そのようなお姿に…？」

「まあ、色々あつてね。復活するための代償なのさ。さて、俺は今からナギ達と合流してくるよ。今までありがとさんね！」

そつ村長達に告げた後、俺は外に出て「天翔 ワックオー 黒鳥嵐飛！ レイ・ガン」京都へ向かう為、高速飛翔呪文を唱えた。

「あつ、あの！」

ん、あれはさつきあつた少女か。ここまで案内してもらったお礼をしとかないとな。俺は呪文を解き、少女の傍に降り立った。

「美味しい飯をありがとう、お嬢さん」

俺はそう言い少女の頭をポンポン撫でた。少女は恥ずかしいからか顔を真っ赤にし「きをつけてください」と消えそうな声で言ってくれた。

ああ、ありがとう。と少女に告げ再び大空へと上昇し、旧世界へと翔け抜けた。

その頃京都

「ん？なんか嫌な感じがしねーか？」

「そうですね、何やら邪悪な気配を感じます。」

ラカンとアルは何かとまではわからないまでもリョウメンスクナの気配について察知していた。しかし…

「あの二人の邪魔はしたくありませんね…」

戦後の傷を癒す旅に誘ったのだ。無粋な真似はしたくない。そう思い、ナギにその事を言えずにいた。

「まだ事が起こるのに時間がかかるのであれば…彼らが帰った後に急いで鎮めましょうか。」

そういい、この場は静観する事にした。厄介になる事はわかっていても目の前の小さな幸せの方を大事にしたかった為に

そして次の日の夜

「おー？なんだあれ？」

「あれは…リヨウメンスクナノカミ！？」

「詠春、知っているのですか？」

「俺も文献でしか知らなかったが…どうやら何かの拍子に封印が解けたと見える。」

「っしやー！あんだけのでかさだ。実に戦いがある敵なんだろうな！」

「ジャック…少しは落ち着き…ん？これは…」

アルが動きを止め、ある一点を凝視していた。

「ん？どうしたアル。敵の増援か？」

「いえ、何か大きな魔力を感じまして…近づいてきますよ。」

ナギはにやりとした。戦いが終わってからも人助けや紛争を止めたりと『正義の魔法使い』としては行動していたが、こういった戦闘をするのは久しぶりだからだ。だから、徐々に近づいてくる何かに

期待していた…が。

「あれは、子ども？」

ナギ達の近場で急停止した影はこちらを見下ろしていた。黒髪赤目…魔力の影響か？の少年はゆっくりと下降し俺達の方に近づいてきた。

「なんか感じたことある気だが…お前誰だ！？」

ジャックは警戒心を露わにし、アーティファクト『千の顔を持つ英雄』を展開していた。

ナギもアルも詠春も…全てが奴の方を剥いていた。後ろでリョウメンスクナノカミが迫っているにも関わらず、だ。

「おいおい、俺の顔まで忘れちゃったのかよ。冷たい友情だな、おい。」

少年はニヤリと口角を上げたかと思うと、

「忘れたなら思い出させてやるよ！俺の名は如月 洸！最強にして最悪の魔法使い！…って俺様の名乗りを邪魔するんじゃないやねえこの堕神が！」

名乗りを上げた少年 洸 は迫り来るリョウメンスクナノカミに身体を向け、呪文^{スペル}を唱え始めた。

「見る！そして驚愕しろ！…ザーザード ザーザード スクローノ
ー ローノスーク 漆黒の闇の底に燃ゆる地獄の業火よ…」

洸の手の先に暗黒の魔力が収束し始める。暗黒の魔力は地獄の業火と化し、洸の指が動くのに沿って燃え、一つの魔方陣を構築始める

「我が剣となりて敵を滅ぼせ！爆霊地獄！！！！」

収束された地獄の炎は閃光を伴い、頭の部分を除き一瞬にしてリョウメンスクナノカミを塵と化した。

「けっけっけ。京都の絶景を広域呪文で壊したくないからな。範囲指定の極悪呪文を使わせてもらったぜ。さて、このまま塵にするわけにもいけないし…封印すつか。」

いそいそと封印し始める洸に対して、他の紅き翼の顔は呆然としていた。

「…おい、アル。あれは誰だ？」

「コウ…らしいですね。自分で名乗ってましたし。」

「おいおい、あいつはあんなガキじゃなかっただろ」

「詳しいことは判らないが、気も懐かしい感じがする。あれはコウに間違いないだろう。」

各人様々な考えをめぐらせるが、想像つかず…洸が封印を終えるまで待っていたという。

詳しい内容を後々教え、洸と紅き翼は実に2年ぶりの再会を果たした。誰もが喜び、その日は詠春の家でささやかな宴がなされた。

復活（後書き）

え？色々飛ばしすぎ？

ここから色々と飛ばしていきます。だって内容わからん）

とりあえず、洸は復活しました。だって主人公だもの！

なんか始めに比べて、本当に洸の性格が変わってますね。年月って
怖い！

新たな出会い？（前書き）

ユニーク100000越え！アクセスももう直ぐ70000！！

こんな駄小説ですが、様々な方が見てくれているようで嬉しいです！

パワプロをプレイしつつ頑張ってどんどん書いて行きます！

新たな出会い？

さて、復活したはいいが…今のご時世についていけそうにない。なんせ二年間死人してたし。というわけで、ナギについていき俺も正義の魔法使いを学ぼうと思った。

その後、数年間ナギと一緒に正義の魔法使いとして世界各地を回った。そんなある日の事…

「おつ、おいナギ！あんな所で少女が落ちそうになってんぞ！」

「おろ、本当だな。しかし、お前も中々成長しねえな。」

「そうだな、未だに身長が伸びない…復活した時の影響で生体バランスが崩れたか？それとも…」

俺がブツブツ言ってる間に少女が崖から落ちそうになる！

「っち、今はどうでもいい事だな。天翔 ワッ・クォー 黒鳥嵐飛！ レイ・ヴァン」

高速飛翔呪文を唱え、少女を抱きかかえた。…？この子、今浮かばなかったか？

「なっ！お前！私に何をする！？」

急に抱きかかえられた事により顔を赤くする少女、あれ…この子どつかで見たことあるな

「おい、コウ。無事かー？」

「おう、ナギ。俺が怪我するわけ…」

ナギが俺の名前を呼びながら近づいてくるなり少女は身構える。

「ナギ？ナギだと…？貴様、サウザント・マスターか？」

少女はナギをにらみ付け、そう言い放った。

「ん、確かにそれは俺だが…あんたは？」

「私の名前はエヴァンジェリン。」

「んなつ！？あんたが『闇の福音』か？」

そうだ、どつかで見たことあると思ったらエヴァだ。よかった、喉に刺さった魚の骨が取れた気分だ。

「それで、そのサウザント・マスターと共にいるお前は一体誰だ？」

「ん？俺？俺の名前は如月 洸。しがない魔法使いさ。」

俺の名前を出すと、エヴァの顔は驚愕に満ちた顔に溢れた。

「お前が狂乱の…しかし、そんな風には見えないが…」

エヴァがなにやら考え事をしている様子。ナギは元からどうでも良さそうにしてたので早く先に進みたいようだ。

「んじゃ、エヴァンジェリンさん。助かったみたいだし、俺達はこちらで…」

「なつ、ちよつと待て！」

俺達は何か嫌な予感がしたので静止の声を聞かず急ぎその場を離れた。

それからというもののエヴァは俺達の追っかけをしてくる。確か、ナギの追っかけだったな。ここで原作ブレイクするわけにも行かないし、ここらでナギとは別れるか。それに、名前を出すたびにああいう反応もめんどくさいなあ。偽名を考えよつと。これからは依頼を受けるなり…あゝアルの所に遊びに行くのもいいかも…と思つた。さて、思いだったか吉日。ナギとは次の街で別れ、俺は世界を旅をしながら正義の魔法使いとして活動するのだった。

それから何年もの月日が流れた。

詠春も結婚して子どもできたし、ナギが死んだ噂は流れるわ…ああ、そういえばナギの子ども産まれたんだつたな。とうとうネギ君との原作へと介入か。長いようで短かつたなあ。

俺はあれからテオドラの城にて依頼を受けていた。ここに来た当初は、正体不明だったからか不審者扱いされていたが、事情を話すとテオドラが快く迎えてくれた。そこから世話になつている。ここだつたら宿に泊まる必要もないし？テオドラも気に入ってくれているのか「ずつとここに住んでいてもいいのじゃ！」と嬉しい事を言ってくれる。テオドラはあれから大きくなり、俺と同じぐらいの背に

なった。俺自体はあれから少しずつだが成長し、元の身長までもう少しと言った所。年齢自体はあまり変わってないんじゃないか？と思うほど老けていない。どうやら不老状態にあるらしい。

そいや詠春の子どもも見に行ったことあったな。このかは今も覚えているだろうか？川に落ちて溺れた所を丁度詠春の所へ祝いに行こうとした俺が救った。その時、お守りを買ってあげたんだが…たかがお守りとか言うなよ？祝い品以外何も持ってなかったんだ。それにそのお守りの中に俺特製の魔法盾^{シールド}効果を持ち合わせた札を入れておいたしな！本当のお守りだぜ！いえあー！

まあ、そんなこんなで今はテオドラと仲良く午後のティータイムをしていたんだが…そこへ一通の手紙が来た。差出人は…麻帆良学園、か。

「テオドラ、何やら新しい依頼が来たみたいだ。」

「そうなのか？また行ってしまうのかあ」

そんな寂しそうな顔するなよ…行きたくなくなってしまっじゃないか。

「今回は長期になりそうだな。また遊びに来るよ。」

「うむ！絶対じゃぞ！待っておるからな！」

そう約束をして、俺は旧世界の日本…麻帆良学園へと向かった。

新たな出会い？（後書き）

え？短い？

基本的に2000文字程度しか書けない男なのです。私は…すいませんorz

今回はエヴァが出てきましたね。何やら同じ匂いを感じる洗に興味有りそうですが…どうなることやら。

次回からはようやく麻帆良学園！その次ぐらいからやっとネギ君が登場する予定です！

麻帆良学園編（前書き）

八万アクセス突破！うひゃー！

すごーね！すごーね！もう直ぐ10万行きますね！

これからも宜しくお願いします！

麻帆良学園編

「日本 麻帆良学園」

俺は今、とても珍妙なものを見ている。外見はおそらく(?)人間。ただ、通常の人間にはあつてはいけないモノが存在していた。それは…

「ほっほ、何か言いたそうな目をしておるようじゃなあ…」

俺の目の前にいるモノ 近衛 近右衛門 は困惑じみた表情を浮かべ、俺にそう問うた。

「ああ、実に解剖したい。両手にメスを持って『解剖してやるぜえ』って振り回したいくらいにな。しかし、実物でみてみると恐ろしいものだ。カイジも吃驚な骨格じゃないか…。中身は一体どうなってるんだ?」

俺はニヤリと口角を手をわきわきさせていると、爺さんは冷や汗を垂らしながらほっほと失笑を浮かべた。

「んで、俺にどんな依頼だ?確かに『悠久の風』でフリーランスをしてはいるが…俺を呼びつけるなんてかなりの大事らしいぞ、世間では。」

少し殺気をこめて 俺の優雅なティータイムを邪魔した事による怒り 爺さんをにらみつけてやる。

「ほっ！年寄りにそんな殺気を向けないでほしいのう…今回頼みた

い事というのはじゃなあ…」

爺さんは俺に依頼の内容を話し出した。どうやら俺に学園の警備員をしてもらいたいらしい。俺を警備員如きの為に呼ぶとはいい度胸だ。

「学園も、じゃが。このクラスを主に見てもらいたいのじゃ。」

このクラス…って、ここで原作介入か。俺の目の前の帳簿の上には1-Aと書いてあった。まあ、原作介入するならここです承しておいた方がいいか。

「報酬は弾んでもらうぞ？それで俺は何をしたらいいんだ？今の担任のサポートでもすればいいのか？」

「ふむ、最初は副担任をしてもらおうと思ったが…」

爺さんは俺を値踏みするかの如く、全身を嘗め回すように見つめた。実に不愉快だ。

「爺さん、その目を今すぐ辞めろ。実に不愉快だ。不愉快すぎて鋼^ア雷破弾^{ンセム}を唱えたいぐらいだ。」

俺は軽く右手に魔力を集めると、パリツと音を立てて魔力が具現化し始める。ちなみに鋼雷破^{アンセム}弾ってのはネギま！の世界で言う魔法の矢みたいなものか？まあマジックミサイルなんだ。不可避な魔法で遮蔽物でさえ避けて対象を狙えるという優れもの。殺傷力も魔法の矢より高いし、俺の魔力量なら何百と一緒に打てるから弾幕でも負ける気がしないが。

「ほっ！すまんのう…だからその魔法を止めてくれんか？」

「ちっ、んで結局何をすればいいんだ？」

俺が魔法の奔流を止めると、爺さんは流れる冷や汗を拭い口を開いた。

「洸君には、学生として共にいてもらうとしよう！んむ、決定じゃ」

自信満々な顔をした爺の直ぐ横に鋼雷破弾アンセムを放ってやった。ズガッ！と学園長室の壁は壊れ見通しが良くなった。

「おい、爺さん。俺を舐めてるのか？俺の返事を待たずに決定とはいい度胸だ。さっきはわざと外してやったが、仏の顔も三度までっていう言葉を忘れるなよ？」

爺さんを脅してやった後、爺さんのさっきの言葉を自分の中でリピートしてみた。生徒として…か。まあ、確かに見た目的には学生で通じるだろうなあ…まあ、なにせよ原作介入できればなんでもいいもんかねえ。

「まあ、依頼なら仕方ないか…報酬は更に上乘せしてもらうからな」

俺の言葉を聴いた爺さんは青褪めた顔から一気に笑顔になると、契約書を差し出してきた。契約書の中には色々制限がついていたが、気に入らない所は片っ端から変更してやった。

「こんな所か。そいやこっつて女子校じゃないのか？俺は男だぞ」

「今後共学にしていく為に徐々に男子生徒を増やしていくという設定にしておけばいいじゃろう。」

設定言っな、設定と。まあ、そこらへんの所は突っ込まずに放置してもらったら幸いか。

「OK、了解した。んで、俺の寢床は？」

「流石に女子寮というわけにはいかないからのう…学校に住むとかどうかのう？」

「だが断る。」

俺は更に金を搾り取って近場のアパートを借りる事に決めた。着々と話が進み、終わりが近づいてきた頃…学園長室のドアがかなりの勢いで開かれた。

「学園長！遅れました、大丈夫ですか！？」

あつ、そーいやタカミチ居たんだけか。ネギ君がまだ着任してないって事はタカミチが俺の担任か。つか、こいつ老けたな…

「よっ、タカミチ。元気にしてたか？」

タカミチは俺の顔を見ると、誰だこいつ？みたいな顔をしてきた。こいつら本気で俺の事わかんねーんだもんな。確かに童顔にはなっただけどさ。

「なんだ、お前も俺の顔を忘れちゃったのか。寂しいじゃないかタ

カミチ少年。これは恒例のお仕置きの時間だな。」

俺は口角をニヤリと浮かべ、右手に魔力を集める。魔力が紫電と具現化し始める。

「お仕置き…？一体何を…！？」

濃密な魔力の空気を感じたのかカミチはポケットに手を入れ戦闘態勢に入った。ほう、戦い慣れしたなあ…あんな可愛い少年だったのに。

「まあ、待つのがじゃコウ殿その勝負、ワシに任せてくれんかのう？」

緊迫した空気の中、爺さんが待ったをかけた。どうやら警備員をするための俺の能力を他の魔法先生や生徒に教えてあげてほしいそう^{チカラ}だ。

「へっ、別になんでも構わないよ。タカミチがあれからどれほど強くなっただか気になるしな。」

「何だ君は？初対面なのに少し口が過ぎやしないかい？」

こっ、こいつは…まあ、確かに昔に比べて若干幼くなったりとか、目とか髪の色とか変わったけどさ…。面影ぐらいい…。認識阻害魔法の効果もきつすぎるかなあ。まあ、いいや。久しぶりに稽古をつけてあげることにするか。

麻帆良学園編（後書き）

結構な小説で最初から友好的なタカミチが多いため、ちょっと敵対してみたりしてみた！

ちょっと修正してみました。今後偽名を使っていくとめんどく（ry）なので偽名設定を消しました。

皆さんの感想やポイントが俺の糧となる！

タカミチとの戦闘（前書き）

バトル表現なんてできねえよおお

そして、相変わらずの無敵っぷり。

もうすぐ10万アクセス突破・・・だとう？！

皆様に感謝を！

タカミチとの戦闘

「夜」

うはー、結構な人がお集まりのようで。

「今日から警備に加わってくれるコウ殿じゃ。皆もコウ殿の実力を知りたいじゃろうからここで魔法先生と勝負をしていただく事になった。では、コウ殿前へ。」

爺さんが俺を紹介し、前にすつと出る。うげっ、視線独り占めじゃん…こわっ

「先ほど紹介していただいた如月 洸です。今年から特別魔法生徒として女子中学の方へ入学が決まりました。細かい事は学園長より連絡が行くと思われますのでこの場ではご遠慮ください。」

俺は畏まった態度で頭を下げ、自己紹介を終えた。

「さて、コウ殿のお相手は…高畑・T・タカミチ先生じゃ。」

タカミチの名前を出した瞬間に、辺りはざわめきに包まれた。確かタカミチの能力はこの学園でナンバー2だっけか？そんなタカミチが出るんだ。そりゃ吃驚するかもな。

「相手は魔法生徒でしょう？いきなり高畑先生では流石に分が悪いのでは…？」

ガングロの男が爺さんにそう進言した。俺のためを思って言うてく

れてるは嬉しいが、俺がタカミチに負けるだと？けけっ、面白い冗談だぜ。

「本人同士も納得されている。それでコウ殿が負けてもそれは仕方の無い事じゃろう。」

学園長が彼を諭しているのを見て、タカミチがゆっくりと前へ出てきた。

「先ほどは少しカツとなってしまったが、僕で本当にいいのかい？」

「けけっ、タカミチも俺に勝てる気にいるのか？言つたる？お仕置きだつて。」

再び俺の上から目線な台詞に力チンと来たタカミチはポケットに手をつ込み戦闘態勢に入った。居合拳か…ガトウが懐かしいなあ。

「それでは…両者始めっ！！」

く刹那ver

学園長が戦闘開始の合図を取った後、両者は微動だにせず互いに睨み合っていた…と思う。高畑先生は睨んでいたと思うが、コウさんはそうでもなさそうだったからだ。

「来いよ、タカミチ。全力で、だぞ？」

コウさんは構えというものを取らずただ高畑先生の攻撃を待っているようだ。高畑先生はそんな挑発に乗る人ではなかったが、あえて

乗ってみせた。

「じゃあ、行くよ？はっ！」

高畑先生の拳が音速を越え、ブオツと風を撒き散らしながらコウさんの身体へと吸い込まれ…えっ？

パシッ！

高畑先生の居合拳が払われた！？あの速度を完全に見切るなんて…凄いい！と思っていると、コウさんから一言発せられた。

「おい、これで全力のつもりか？俺を馬鹿にしているのか？」

途端にこの場の空気が変わった。息を吐くのに体力がいるのではないかと思える程の濃密な…殺気。流石に高畑先生も顔色を変えた。

「まさか今のをそんな簡単に払われるとは…結構本気だったんだけど？」

「本当にそう言ってるのか？…これで満足してるならお前の師匠はよっぽど無能だったんだな。」

馬鹿にした笑みを浮かべたコウさん。今度はその言葉を聞いた高畑先生から殺気が溢れた。

「師匠の事を馬鹿にするのは許せない。いいだろう、僕の本気を見せてあげるよ。」

そういつて、高畑先生は両手を合わせた。すると、先生から物凄い

風を感じたと思うと先生が気と魔力を纏っていた。あれは、先生のアルティメット・アーツ究極技法…

「ふむ、感卦法か。ちゃんと習得していたんだな。えらいえらい。」

その姿を見たコウさんは機嫌よくニコニコとしていた。

「余裕だね、じゃあ行くよ！豪殺…居合拳！！」

大砲の様な高畑先生の居合拳…しかもそれを幾重にも出されている。土は大きくめり込み、木々は折れ…その中でもコウさんはとても機嫌良く笑われていた。

「ほっほっ、と中々なモンになったじゃないか。だが…」

全ての居合拳を避けた後、コウさんはバックステップし先生との距離を開けた。

「そろそろ終わりにしようか。今日はお仕置きだからな、いつまでも攻撃を受けているのも飽きてきた。タカミチは覚えてるかな？この世界でただ一人…そうこの最強にして最悪の大魔道王の俺様にしかできないこの業をつ！はあああつ！ドラゴン・モード龍闘発勁！！」

コウさんが気合を入れた直後、その場から莫大な魔力と気が溢れかえった。私の膝はがくがくと震え、周りでは失神している者もいた。

「なっ、それはあの…！！」

「安心しろ、多少は手加減してやるからな？全力で防御しろよ」ドラゴン・モード爆龍勁！！」

凝縮された魔力と気が圧縮され、圧倒的な死を感じさせる弾として高畑先生を襲った。落雷を彷彿させる轟音が鳴り響いた後、高畑先生は大きく吹き飛び地面に叩きつけられた。

「おーい、タカミチ。生きてるかー？」

先ほど圧倒的な業を放った本人は軽いノリで先生に近づいていった。

「ぐふつ、まさか…あの噂は本当だったんですか？」

高畑先生の目から涙が流れていた。え？涙？あの高畑先生が？

「おー。なんとか、な。色々あってこんな身なりになっちゃったが…お前も長い間俺と一緒に居たんだから気と魔力の質で分かれよ。」

「

「認識阻害魔法を貴方チカラの能力で使われていたらわかりませんよ…それにしてもよくぞ無事で…コウさん…」

あの高畑先生がこうも圧倒的な差で倒されるとは。コウさんは一体何者なのだ？もし、お嬢様に敵対するものならば…実力の差はあれど容赦はしない。

「おっほん、再会の挨拶はこれぐらいにしてっと。これがコウ殿の力じゃ。高畑先生をも凌駕する程じゃ。頼りになるじゃろ？これにて今日の集会は終わりじゃ。解散！」

そうして、長い夜は終わりを見せ…新たな1日が始まろうとしてい

た。

タカミチとの戦闘（後書き）

というような形になりました。

しかし、まあ…なんかどんどんやりたい放題してる気がしてたまりませんね。

次に1-Aに入学して・・・直ぐに2年生に上がります！（だってねたがおもいつk

C R エヴァンジェリオン…いえ、なんでもないです。遭遇（前書き）

タイトルに意味はないです。エヴァ打ちたくなってきたなー。

直ぐに原作に入っちゃなんか飛ばしすぎかなー？と思ったのもう
少しだけ1年生編続きますよー！

アクセス数130000突破！すっ、すげえよ！わふー><ノ

C R エヴァンジェリオン…いえ、なんでもないです。遭遇

あの晩の後、俺はタカミチに連れられ、事情を延々と聞かされた後飲みに飲まされた。

まあ、死んだと思ったはずの憧れの1人が目の前に現れたんだから無理もないかなあ…と思ったから文句も言わずに付き合った。まあ、俺も久しぶりにタカミチの顔みれて嬉しかったのもあるけどね。

次の日、二日酔い気味のタカミチに連れていかれ…俺は1-Aのクラスへと入ろうとしていた。先にタカミチが入り、転校生が来るという業務連絡を伝える。その後、タカミチからの呼びかけに応じ俺も中に入っていた。

「エヴァ side」

また、新しい奴、か。何度私はこんなくだらない時間を過ごさねばならないのだ。私をここに縛り付けたナギメ…今度出会ったらただじゃすまさないぞ。

教台に立っているタカミチを尻目にエヴァは窓から外へと視線を移した。どうせ、転校生と言えども自分には全く関係の無い話だからだ。無論、ガラツと音を立ててドアを開ける音など気にもしない。転校生の話すら興味がない…はずだった。

「初めまして、学園長より共学への一步として派遣…ていうのかな？まあ、いいや。転校してきた如月 洸です。こんな女の子だらけの所に男が入るってというのはとても緊張していますが、どうか仲良

くして下さいね？お願いします。」

どこか聞き覚えのある声が聞こえ、教台へと振り向くと…そこには…知らない人間だった。まわりの女共が黄色い声を上げているが私にとつては大事な所はそこではなかった。

「（全く、どうかしてる。アレと狂乱を間違えるとは。）」

そもそも、狂乱はどこに消えたのか。あの後、必死でナギを探し居場所を聞きだすも既に別々に別れておりどこに行ったのかとナギを追い詰めた結果…ここで道草を食っている。

「（ふつ、この年月が立つても未だ追い求めようと思うのだから…恋焦がれているようではないか。）」

自分でそう考えてみると、かーっと顔が熱くなった。するとそこへ…

「エヴァンジェリンさんですね？隣の席になりました。よろしくお願いします」

先ほどの男が私の席の隣に座った。まあ、確かに今は空いているが…何故タカミチもここに座らせるのか。私がタカミチをキツと睨むと奴は苦笑いをしてみせた。

「そんなにタカミチを睨んでやるなよ。俺がここがいいって言ったんだ。」

隣の男は私にしか聞こえない声でそう言った。

「は？」

「俺が、ここがいつて言ったんだよ。エヴァンジェリン・AK・マグダヴェル。」

そう言つて彼は口角を上げてニヤリと笑つた。何だこいつ…あの爺、変な男を連れてきたな…。

「おいおい、変な男とは失礼だな。俺の姿に見覚えは…つてそうか。認識障害魔法使つてゐるからな。流石にエヴァでもわからないか。」

こいつ、何を一人でブツブツと…！？さっき認識障害魔法とか言わなかつたか？

「おい、貴様…何者だ？」

「ふっふっふ、それはだな…ないしょ。」

男はこちらを見るやいなやパチンとウィンクをして見せた。こつ、こいつ…！

「私を馬鹿にしているのか!？」

机をダン！と叩き大声を出して男に向けてそう言い放つた。

「はい、エヴァンジェリンさん静かにしてくださいねー」

我に返つてみると教台に立っているタカミチがこちらを見て苦笑していた。周りの連中も何事か!？とこつちを見ている。朝倉などはスクープ!？と言わんばかりにこちらを見ていた。

「ちっ、なんでもない！」

私はフン！と鼻を鳴らし外へと視線を変えた。

「後で、遊びに行くね。」

ふと、そんな声が聞こえたので横へと振り向いてみたが男は前へ向いてタカミチの話を聞いていた。なんなんだこいつは…

〈刹那 side〉

どうやらコウさんは私達のクラスに転属されるそうですね…。

自己紹介を終えたコウさんに向けて色々と質問攻めをしている我がクラスですが、扱いに慣れているのかすらすると答えられる質問について答えている。腕と言い、頭の回転の速さと良い…本当に同じ歳なのだろうか。もしかしてお嬢様を狙う刺客なのでは！？むっ、そう考えてしまうと余計にそう思ってしまう。今度、本人に問い詰めてみないといけないな。

〈洸 side〉

授業だりーっ…一応聞いてるフリをしてるけど内容が簡単すぎるぜ。つか、中学生の問題だもんなー…隣のエヴァからは殺意が籠ってるような視線を感じるし、後ろの方からは…というか色んな所から強烈な視線を感じるぜ。まったく、やれやれだぜ。悩んでいる内に鐘が鳴ったらしく授業は終わりへと向かっていった。

「はい、今日はこの辺にしておこうか。後、コウさんは今から少し僕に付き合ってください」

なんだタカミチ？そんな非難そうな目で俺を見るなよ。もっと色んな事したくなるじゃねーか。しかし、表面上は良い子な俺。中学生らしく「はい」と声を出しておいた。

「コウさん。あんまり彼女を挑発しないであげてくれないか…？」

ふむ、エヴァの事か。先ほどのやり取りを見てたのか。

「教台に入ればとつてもわかりやすいよ、コウさんの動きは。」

「タカミチに監視されているようだな…それにしてもエヴァですら俺の阻害魔法を超えられないか。一々説明するのも面倒くさいし解くのもいいが、知られたら知られたで面倒くさいし…。」

「おい、貴様。」

俺達が廊下で話していると、いつの間にか隣にエヴァが来ていた。

「今、私の名前を出したな。おい、貴様は何者だ。嘘偽りなく全てを話せ。」

おお、なんと^{プレッシャー}いう圧力なんだ。まあ、エヴァには正体を教えるつもりであつたし、教えても構わないだろう。

「わかった、言うよ。というか、認識阻害魔法を解けばいいのかな

？」

俺はそういつてから認識阻害魔法をオフにしし、少し魔力を解放した。その懐かしい魔力を感じたからか、エヴァは顔を緩ませた。

「この魔力…やはり、お前は…！！」

「そつ。エヴァちゃんが初めに気づいた通り、俺が君の探し人…なのかな？さつきも名乗ったけど如月 洸…爆炎の魔術師にして遺憾ながら狂乱の支配者と呼ばれていた男さ。」

自分の二つ名を名乗るというはずかしさに照れてしまい、照れ隠しと言わんばかりに隣にいたタカミチの頭をアイアンクローした。ミシミシと音を立てながらタカミチは「ちょっ、頭割れちゃいますって！」と声を荒げていたがそんなの気にしない。しかし、改めて名を語ったその瞬間エヴァが勢いよく抱きついてきたものだからついタカミチの頭から手が離れてしまった。

「おつ、おい…いきなり何を」

「うるさい！私の前からいなくなりおつて…！探したんだぞ…？」

なつ、なんだこの小動物のようなウルウルとした瞳は…しかも上目遣いだと…？流石真祖…半端じゃない力の持ち主…だぜ、ぐはっ。

「そんなに俺を探していたとは思わなかった。ナギをずっと追い掛け回していたみたいだしなあ。まあ、これからは共にいるんだ。仲良くしようや。」

俺はニカッと笑い、彼女を見た。というか、いつまで抱きついてい

るんだろっか？

「えーっと、ところでいつまで抱き着いているんだ？」

「なっ、はわわわ…」

顔を真っ赤にしたエヴァはすぐさま距離をとり…というか逃げ出した。くくっ、可愛い奴め。

「なるようにはなつたみたいですネ。」

「そうだな、また認識障害魔法かけ直すの面倒臭いしこのままにしていようかな。」

「コウさんは有名ですからね。死んだことで更に英雄化されてますし…まあ、コウさんが目立つ事をしなければ同一視されませんよ、きっと。」

「そうやってタカミチが俺に対して敬語使ったりするのを見られたら一発でばれそうだけだな。」

俺たち二人は休み時間が終わるまで談話を続けた。タカミチ、昨日のだけじゃ喋り足りなかったんだな。

「如月くうーん！」

ん、俺に声をかけるのは…朝倉か？一体なんだろう。

「今日ね、この後って空いてるかな？ちょっと聞きたい事があるん

だ。」

全クラスメートの情報を握っていたのかこの子は…恐ろしい子！

「まあ、当たり前障りの無い事なら構わないよ。」

「よし、じゃあちょっと場所かえよ。」

そう言われるがままにホイホイと朝倉についていった。屋上に出ると、簡単な事からちよつと禁忌事項まで色々と聞かれたがさりと受け流した。30分程度話をしたかな？と思うと朝倉が「そろそろいいかな」と時計を見てそう呟いた。何かあるのかな？

「ふふーん、ちよつとついてきてよ！」

またもやホイホイとついていく俺。なんか引つ張りまわされてるよな…。

（如月君 転校お祝いパーティー）

なつ、これが来年ネギ君もされるといってお祝いパーティーか。まさか自分もこうやってされるとは…というか1年生の時からはずちやけすぎるだろう1-Aの諸君…。

まあ、その後はクラスの全員とも話しをしたり、ある一部の人間からは獲物を狙うハンターのような目で見られたりと大変であったが楽しむ事ができた。来年のネギ君との遭遇までに…色々と交流でも深めておくとしましようかね。俺はそう思いながらパーティーは終わりを迎えた…。

C R エヴァンジェリオン…いえ、なんでもないです。遭遇（後書き）

今回は1 - Aに転校という形で入り、エヴァさんと遭遇しました。

さて、原作を余り知らない筆者ですが、口調ってこんな感じでしょうか？

色々と参考にしていきたいと思いますので、感想やアドバイスなどお待ちしてます！

偽名設定を削除ということでも少し変更しました。

1年生（前書き）

アクセス16万 ユニーク2万突破！

更新遅くてすいません^^；

急いで書くんて…見捨てないでー><

1年生

さて、その後の話だが…結構苦痛だったな。何が苦痛って…授業だよ。なんで今更こんな簡単な問題を…まあ、当たり前だが試験での成績はトップクラス。だって中学生の問題だよ？大学生の俺が…底辺だったら問題だろ！

クラスの奴らとも大分仲良くなった。かなり溶け込んだんじゃないか？

そうだな…幾つか思い出してみるか。

〈近衛 木乃香の場合〉

「んー・・・」

なんかあの転校生…洸はんの事が引つかかるんよなあ。初めて見た気がするんやけど、なんか懐かしい感じもするし…なんやろなあ。

「ここは、本人に聞いてみたほうがええかもしれんね！」

私は早速洸はんを探しに行くため学校中を歩き回った。

〈洸side〉

なんだろう。なんか木乃香が俺の目の前でうんうん唸りながら、時折俺を睨んだりしてくる。俺なんか悪いことしたかなあ？そしてそれを遠くで…主に俺を睨んでいる刹那。もうやだ…俺も木乃香の前

でうんうん唸っていると、木乃香が遂に口を開いた。

「洸はん、何を唸っとるんや？」

貴方の事でだよ！とは言えない俺…情けない。

「俺の事より、木乃香ちゃんはどうかしたの？木乃香ちゃんこそずつと唸ってたけど…」

木乃香は自分が唸ってたことに気づいたのか、顔を少し赤らめこちらをジロリと睨んだ。

「洸はん意地悪やなあ…なあ、洸はん。一つ聞いてもええかな？」

「一つと言わず何でも聞いてくれて構わないよ」

じゃあ、と一つ咳払いをした後木乃香はそつと言葉を口に出した。

「洸はん、ウチとどこかで会った事ある？」

な…んだ…と？

「何でまたそんなことを？」

「いや、気のせいかもしれんのやけどなんか気になったんよ。なんでやるな？」

まあ、木乃香は小さかったし覚えてないんだろうな。刹那も結構敵対するような目で俺を見てたし…ちよっぴりショック。

「ん、昔会ったことがあったよ。俺がキミの御父さんの所に遊びに行った時にさ。木乃香があの時溺れたりするから大変だったんだからな？」

「え？え？洸はんがあの人に助けてくれた人なん！？でもあの人ってウチらよりおっきい人やったで？」

まあ、困惑するわなあ。俺は木乃香の頭に手をのせ髪をクシャクシヤとしてやった。

「まあ、難しい事を考えるな。いいじゃん、俺と木乃香は昔出会ってるっていう事さえわかってれば。これから宜しくな？」

俺がニコツと笑みを浮かべてやると、木乃香は少し顔を赤くし、「そつ、そうやね！」と笑顔を返してくれた。その後、他愛無い話をしたりして木乃香は俺に懐く？ようになった。何か困ったことがあれば相談してきたりと、信頼度が上がったようだ。

く桜咲 刹那の場合く

コウさんは不思議な人だ。いつも持っているあのバッグも不思議で、教科書が出てくるのはもちろん、ハンマーやバットなんてものも出してくる。まるで、魔法のバッグだな。そう、自分で思うとついクスッと笑みを浮かべてしまった。そういえばあの人も魔法使いなんだから魔法のアイテムぐらい持っても可笑しくは無いか。そうだ、刀が出てきた時もあったな。えっとアレは確か

く数日前く

「くっ、なんだ今日の侵入者の量は…！」

「刹那、そこ右だよ。」

私の後ろで褐色肌の女性 龍宮 真名 が敵の居場所を教えてくれる。私は指示のまま右にむけて夕風を振るった。ヒット。侵入者 鬼 は上体と腰が別れたまま絶命した。真名みたいな全体が見える後衛役とパートナーを組めると仕事が捗る…はずであったが、「ちよつと拙いかもね。」その言葉を聞くまでは、だ。

「拙いつて何がっ!？」

「ちよつと敵の数が多すぎるね。私達、段々囲まれてきてるよ。」

切り倒しても切り倒してもまるで無限に沸くかのように出てくる鬼達。くそっ、何人の術者が来ているんだ!? そうこうしている内に私達は囲まれてしまった。

「すまんなあ、嬢ちゃん達。わしらも仕事なんじゃ、許してくれとは言わんが…ちいーと痛い目にあってもらうぞ！」

先頭に立つ鬼がそう言いつつ、突進してきた。その鬼の攻撃を夕風で受け流そうとするも受け流しきれず、別の角度からきた鬼に身体を吹き飛ばされてしまった。吹き飛ばされた先には木があり、身体を強打してしまう。息が掠れ、胃液が逆流しそうになるがここで諦めては! と思いキツと目を開け追撃を避けきる。真名の方も大分苦戦しているらしく…結構というが大分ピンチである。鬼の攻撃を避けつつ切りかかるも、先ほどの攻撃が足に来てたのか足がもつれて転んでしまう。鬼達が傍に寄ってくる音が聞こえ、ここまでかと思

っていると…

「まてえい！」

凜と冴え渡る声がその場を支配する。声の出先を探してみると、木の上に誰かが立っていた。

「大勢で可憐な婦女子を囲み、汚らわしい手で清らかな身体を穢そうとする醜い物共よ。恥と知れ。」

「なっ、なんやお前は！？」

「貴様に名乗る名はない！とあああ！俺様スーパーキイック！！
(着地と同時に爆裂^{ダムド}！！)」

声の持ち主が木の上から飛び立ったと思うとそのまま閃光の如く急降下し、着地と同時に炎が巻き上がった。蹴りの威力と炎の魔法により地が抉れた。周囲の鬼共は何事かと距離をあげ、様子を窺った。

「よっ、遅れちまったな。」

こちらに向けて軽く挨拶してくる赤みのかかった髪に黒衣を纏った人 如月 洸 がニコリと笑った見えていた。

「「コウさん！？」「」

「おおっ、二人してどうも。苦戦しているらしいと爺さんから聞いてな。急いで飛んできたぜ。」

コウさんはこちらへ向けてウィンクをしたかと思うと、直ぐに鬼達

のほうへと顔を向けた。

「さて、こんな美少女達を穢そうとした罪は重いぞ、お前らあ。逝く覚悟はできてるんだろ？ そうだよな、できてるよな。よし、ならば行くぞ！ はあああ！」

コウさんが右手に気を込めると、その右手は輝き始め白炎と化した。なんと凝縮された気なのだろうか。

「とりあえず逝つとけ！ 神をも屠る一撃！！」
ゴッドハンド・スマアアアッシュ

コウさんがそう言い放ち、鬼共に向かって走り出した。右手を振り払うと。右手に纏っていた白炎はまるで意志を持ったかの如く鬼共を蹂躪し始めた。彼が右手を振るう度に鬼は白炎に焼かれ絶命していく。振るう、振るう、振るう！ 肉を焦がす臭いがこの一帯に充満していくが一向に鬼の数は減っていない。10体程片付けたところで彼は立ち止まった。

「拉致があかないな。来い、ムラサメ……！」

洗さんが手を差し伸べるとどこからかバグが出現し、バグの中から一振りの刀が現れた。まがまがしい気を纏った刀を洗さんが掴むとその気は更に強くなった。

「一体一体じゃ拉致があかないのなら、一気に殲滅してやればいい事だろう？ 喰らえ……真・魔人剣！！！！」

ムラサメと呼ばれる刀を振りかぶった洗さんが目にも止まらない程の速さで刀を振りぬいたかと思うと、そこから衝撃波が生じた。剣気が高められた衝撃波は具現化しており物凄い速度で鬼に向かって

いった。一度、二度と剣が振るわれ、その度に衝撃波は鬼を喰らっていった。衝撃波を受けた鬼は触れた瞬間にパン！と弾け飛び、いつしか鬼の半分ほどが消し飛んだ。

「んー、全方位じゃないから目の前の敵にだけ！だけど、眼前は綺麗になったなあ。」

そう、先ほどの衝撃波が通った道には何者も存在していなかった。木々や鬼達が元々そこには無かったのだからと見間違えるほどにそれに伴い、他の鬼達も消え始めた。

「術者も一気に殲滅できたか。安心きつて一箇所に固まってたかな？まあ、居そうな所に目掛けて放ったんだけどさ。」

もう一度こちらへ向けてニコリと笑顔を見せる洸さん。なんというか…圧倒的すぎる。

「助かったよ、コウさん。それにしても呆れるほどの強さだね。」

「ん、ん？そうか？友を思う力が俺を強くしたんだな、きっと。」

一人でうんうんと頷いているコウさん。友を思う力…では私がお嬢様を思う力が足りないから私程度では力不足…とでも言いたいのか？この人は。

「おいおい、刹那ちゃん。そんなに睨まなくてもいいだろ？一応助けた気ではいるんだから。」

こちらに向けてそう言葉を発してくるが、

「助けていただいた事は感謝するが、私はまだ貴方の事を信用はしていない。」

つい、そのような事を言ってしまった。そういわれた本人はショックの様な表情をしていたが…。

「全く、大体の噂は尾びれがつくものだけど…実物の方が更に強大だなんて面白いね。」

「お？何をいって」

「“狂乱の支配者”さん」「っ！」

狂乱の支配者…？なんだ、何の話をしているんだ真名は！？

「なんでその名を？」

「圧倒的な強さ。そして特徴的とも言えるさつきの炎。まあ、私はとっておきもあるしね。」

「魔眼…か。まあ、あんまりばらさないでくれよ？先生さん達に知られるとおっかないんでね！天翔ワックオー黒鳥嵐飛レイ・ヴァン」

そう言い残し、彼は闇夜の空へと飛んでいった。「狂乱の支配者」これは一体何を意味するのだろうか…：静寂な空気の中、梟の囁きだけが聞こえた。

まあ、とりあえずはこんなものか。後はちらほらとお話したり、遊

んだりしたな。後、マンション速攻売り払われてエヴァの家に無理やり居候させられてるとか…ふう、大変だな。全く。

1年生（後書き）

ということで、1年生編。木乃香と刹那って人気？ですよね。結構な小説でもヒロイン？扱いされてたり…

まあ、俺も好きなんですけどね！（あんまり知らないけど！

次はどんなのにしようかな

とりあえず、一つ他ネタを入れたの誰か気づいてくれたかな？w

元ネタが古いんで最近の子は知らないかもしれないけど><

エヴァ宅にて 上篇（前書き）

まだまだネギ君登場してません！

色々とフラグを回収しながら時を進めています。

もうすぐ20万アクセス！何度も読み直していただいてる方や新規様には感謝してながらも、更新遅くて申し訳ないです。

エヴァ宅にて 上篇

朝が来る度にエヴァの家で寝ている自分に混乱したが、もう慣れてしまったのか最近では気にしなくなってしまった…そんなあくる日の事。

何かおもしろいモノが無いか家の中を探索していた所、地下の部屋に何かを見つけた。

「これは…何だったかな。」

月日がたつにつれ、俺の中の原作知識も大分失われていた。大きなイベントとかはかすかながら覚えはいるが…どれも霞がかったかのようにおぼろげでしかない。

えーっと、確かこれは…俺はもつとよく思い出そうと考え、ふと目の前にあるガラスの球体を手にした。その瞬間…俺は球体に吸い込まれるように中へ入ってしまった。

「なっ、なんじゃこりゃああああ！」

先ほどは質素な部屋の中にいたと思ったら急に広い空間に出てしまった。あっ！そうか、これがエヴァの家にあつた別荘って奴か。ここに入ったら…24時間は出られなくなるってあいつが言ってたな。ネギま！の事を教えてくれたのもあいつだったし…感謝しとかないな。

物思いに耽りながら歩いていると、目の前を闇が覆った。周りを見てみてもどこもかしこも闇、闇、闇…

「おお?!なんだ、急に夜か?!俺はいつのまに鳥目に!?!」

あたふたとしている所に凜と通る女の子の声が俺の耳を捉えた。

「私の別荘に無断で入ってくる輩はどんな奴かと思えばお前か。」

パツと辺りが明るくなると思えば、空にエヴァが浮いていた。おう、いい眺めではないか。エヴァは俺の熱い視線に気づき、何事かと考えていた様子だが…その理由に気がついたようでスッと降りてきた。

「何、残念そうな顔をしている。この変態め。」

顔を真っ赤にしながらエヴァがそう言う。なんだこの最終兵器は。これが俗に言う最終兵器彼女という奴か…!（兵器じゃないけど原作と同じく強いもんね!）

「んんっ!それで、わざわざこんな所までどうしたんだ?私に用でもあるのか?」

「いや、暇だったからエヴァの家を探索してたらここまで来ちゃってね…。しかし、別荘か。いい物があるなあ。」

「ふんっ、別にお前なら好きに使用しても構わないが…」

「構わないが…?」

「ちゃっ、ちゃんと入るときは一言声をかけていけよ?また、どこかに行ったと思うと心配するじゃないか…」

顔を赤らめながら両手の人差し指でもじもじし始めるエヴァ。俺はこんな至宝を今まで放置していたと言うのか…！

「わっ、わかった。何かの用事で入るときは声を必ずかけるようにするよ。」

自然と頭を撫でていた俺だが、エヴァも払いのける仕草をしなかったため長い時間俺たちはそうして時を刻んだ。

「ん、そういえばエヴァは最高位の魔法使いだったな。」

二人でリラックスの時間を過ごしていた時に俺はふと思った事を聞いてみた。

「そうだな、元々真祖という個体が最強を示している。」

肉体、再生能力、魔力…確かに真祖というのはこの世界では最強クラス…という事か。でも、今のエヴァからはそういった波動を読み取る事ができない。何故だ…？

「お前の疑問に答えてやろうか。それは、全てお前の友人。サウザントマスターの所為さ。」

ん？ナギ…？ナギの所為…はっ、まさか！

「登校地獄か！」

「そうだ。その変な魔法の所為で私の魔力は極限にまで封じられている。全く腹の立つ。まあ、吸血行為をすればある程度ではあるが回復するが。後満月の時もな。」

「あはは…。それにしても吸血か。」

「そういえば吸血鬼だったもんな。それにしても、魔力のないエヴァ…か。」

「なるほど、それでは今はただの少女…と。ククク…」

「なんだ、何をするつもりだ!？」

俺はニヤニヤと笑いながらエヴァに近づいていく。その俺の変化に気づいたエヴァは俺との距離を開ける。が、所詮はただの少女。そこまでの距離を開けるというわけではない。

「いや、何…それならばやりたい放題できる…ってな。」

俺は少しずつエヴァに近づき、エヴァを追い詰めていく。逃げるエヴァ、追う俺。そして距離が近づいた時、意を決したエヴァは俺に飛び掛ってきた!

「ちよつ、えつ、いてっ!」

こっ、こいつ噛み付いてきたぞ!良く見たら血まで出てきている。それはいたい…って血?まさか…!?

「くくっ、流石だな。狂乱の。これだけの血なのにこれほどの魔力量とは。しかも美味と来ている。すばらしいな。」

俺の血の味に酔いしれているエヴァ。俺の血ってそんなにうまいのか？ちろつと舐めてみても鉄混じりの味しかない。鉄分つえーよ…。

「くくつ、それに勘違いしているようだが、この別荘の中では力は使えるんだぞ？更に貴様の血のおかげでより魔力が濃くなったわ！さて、仕返しをさせてもらおうか？」

ほう、俺に仕返しだと…。くくつ、流石は最強種。俺が何者か知ってる上でそう言っているとはな。

「俺もただではやられてやるわけにはいかない…。勝負だ、エヴァ！」

「ふっ、あの『狂乱』と戦えるとは…血沸き肉踊るとはこの事かな。」

「さあ、殺り合つとしようかつ！」

エヴァ宅にて 上篇（後書き）

というわけで洗VSエヴァをお送りしたいと思います。

こうやってエヴァとの好感度をグイグイと…！

あつ、実は0話と1話の最後の文章に大事な大事なフラグを書き足しました。その文章が何を意味するのか…一応は考えてますけど、何がどうなるやら！

それでは、またお会いしましょう。ばっはは〜い。

エヴァ宅にて 中篇（前書き）

そして戦闘が始まります。

戦闘描写は相変わらずへたくそなんで大雑把にしか書けていません。
ごめんなさい > <

エヴァ宅にて 中篇

「殺り合う前に一つ…勝った方は負けられた方の願いを一つだけ聞くと
いふのはどうだ？」

「ふむ、面白そうだな。よし、受けてやるよ！勝負だ！」

俺は何もない空間に手を向けて、高らかに声を上げた。

「来い、ヘヴィ・メタル！」

どこからともなく俺の愛用のバッグが現れ、その中から一振りの美しい剣が姿を現した。

「ふんっ、私をただの魔法使いと思うなよ？接近戦をされれば不利
というのは先入観だな、狂乱！エクスキューションーソード！！」

エヴァは海に手を伸ばすとその手に断罪の剣が召還よばれた。魔法使いは接近戦ができない？甘いなエヴァ！ナギだって接近戦できたんだからそれぐらい予想できたわ！

「受けてみる、我が剣を！てやああ！」

俺は剣の切っ先に龍の気をためエヴァへと向けて切りつけた。この封神剣なら高位の存在 つまりこの世界で言う真祖 には効果があるはずだ。と思い、切り込んだんだが…

「ん、くっ…なるほど、確かに良い攻撃だ。しかし、力が戻っている私はその程度ではやられんぞ！」

断罪の剣にて防がれた後、それを弾かれた。

「（くっ、流石の力だな…。）どうした？自分の攻撃が防がれるとは思っていなかったのか？あまい奴め。」

おっ、俺の攻撃が防がれた？俺はそのショックに動けもなかった。ショック…？いや、ショックではないのだ。自分でやりあえる相手を久しぶりに見つけた…そうだった気分だ。気分が高揚してくる。

「いいぜ…いいぜいいぜいいぜ！最高だぜ、エヴァンジェリン！カハハハ！」

俺は狂ったように笑い始めた。それを見たエヴァが口角を上げ口を歪ませた。

「ほう、それが貴様の本性か。黒い。どす黒い感情が渦を巻いているな！なるほど、何故こうも惹かれていると思っていだら…やはり同じ匂いを嗅ぎ取っていたからか！」

「あーはっはっはっは！」

二人して高笑い始め…しかし尚手は休めず切り結んだ。俺が横薙ぎになぎ払えばエヴァは最低限の動きでスウエーをし、お返しとばかりに上段から切り落としてくる。俺は遠心力を利用しそのままくるつと回転し、身を屈めヘヴィーメタルで断罪剣を受け止める。筋力は俺の方が高いため拮抗せずそのまま払いのけ、無防備になったその身へ斬撃をお見舞いするもそれもまた避けられてしまう。しかし、完全には避ける事はできなかった為鮮血が舞い上がる。

斬、斬、斬！流、避、斬！

避、避、避！斬、斬、避！

接近戦は俺の方が優れているからか、最初の方は互角の様にも見え
たが次第に押していく事となる。振るった猛撃をエヴァは受け流し
きれず、そのままの勢いのまま吹き飛んでいった。

エヴァは肩で呼吸しているが、俺は別にそうでもない。ラカンと斬
り合いなんて何度もしたしな。

「やはり、接近戦では分が悪いか。ならばこれでどうだ！リク・ラ
ク ラ・ラック ライラック！闇の精霊 30柱！魔法の射手！
連弾・闇の30矢！！」

エヴァが魔法言語を唱えた後、闇の矢が次々と俺を襲い掛かる。し
かし、距離をあけた事から魔法を使ってくると予想していた俺も既
に魔法を唱える体勢にある！俺は魔法で作った弓矢を掲げ：

「銀嶺より来りて ・メイノー・シルマン バビロンへ帰れ ・ゲイオ・フ・バビロン 魔弓閃光矢！！」

相手の魔法の射手の迎撃として魔弓閃光矢を放つ。俺の手から放た
れた矢は分散し、迫り来る数多の闇の矢を打ち貫いた。俺の魔法の
方が威力は高く、相手の魔法の射手を消滅させ、エヴァに向かって
いくもエヴァの纏う障壁によってこちらも消滅した。俺の魔弓閃光
矢をほぼ相殺か。俺の血が混じってるからと言って、こうまで拮抗
するとはな。

「ふむ…質はそちらの方が上みたいだが…果たして量はどうか？
リク・ラク ラ・ラック ライラック！氷の精霊 1000頭 集い

来りて 敵を切り裂け 魔法の射手 連弾・氷の100矢」

先ほどのに比べて鋭く、速さ、それに量を伴った氷の矢を放ってきた。甘く…みるなよ！

「俺様を舐めるんじゃないやねえー！八極拡散砲^{ラット}！！」

特殊な図形を瞬時に描き、俺の下腹部のチャクラから生体エネルギーを増幅させ無数の光弾を掃射した。光弾の一つ一つの威力は弱い^{レイ・ボウ}が、量は先ほどの魔弓閃光矢の比ではない。お互いの無数の矢がぶつかり合い、相殺していく…相殺される際、氷は溶け蒸発し、気体となってお互いの目を眩ませる。俺は八極拡散砲^{ラット}を解き、瞬動を使用して一気にエヴァへ近づいた。エヴァは目眩ましにより俺の姿を把握できず俺の姿を見失っていたようで、俺に気づいた時には俺の鋭い回し蹴りを喰らって吹き飛んでいた。

「かはっ」

エヴァは吹っ飛び、地面へ叩きつけられた。骨の数本ぐらい折れたかもしれないが、真祖だし死にはしないだろう。

「どうした？まさかそれで終わり…って事もないのだろうか？」

「ふっ、ふふ。やってくれるな。まだ、この程度では終わらないぞ？」

その後も、エヴァの魔法の射手と俺の烈氷破弾^{タンカード}の打ち合いが続くも、やはり圧倒的に俺の方が有利であった。一刻ほど過ぎた頃にはエヴァの身体はボロボロに（真祖なので回復はしていくが。）なり、満身創痍といった所である。

「余裕をかましおって…ならばこれでどうだ！リク・ラク ラ・ラック ライラック！来たれ氷精 闇の精 闇を従え 吹雪け 常夜の氷雪 闇の吹雪！！」

エヴァが魔法を解き放つと辺りは暗くなり、闇が吹雪が、姿を現し、俺を包もうとする。さっと回避を選択しようにも俺の周辺に対して行われているため回避は不可能のようだ。

相殺魔法を使用をしようとした所で、脇腹に鋭い痛みを感じた。

「あ？」

痛む場所を見てみると俺の脇腹に包丁が刺さっていた。それを掴んでいるのは一体の人形。

「ケケケ、オレサマヲワスレテンジエネーヨ。」

人形 チャチャゼロ はそう言い残し姿を消し、俺はそのまま吹雪と暗黒に包まれた。

エヴァ side

「手応えは…」

「ケケケ、アレディキテタラニンゲンジャネエナア。」

魔力が満ちてるこの空間において、動けるようになったチャチャゼロは嬉々とした表情でそう答えた。

「この程度で死ぬはずがないだろう。」

奴の気配は一向に衰えない。寧ろ増大しているのでは、と思える程だ。

「まだ奴は何かを仕掛けて…はっ、なんだ!？」

闇の吹雪が終わりを迎えると、その中心 奴のいる場所 から極大の魔力が溢れ出るのが視覚で捉える事ができた。

「ルーイ・エリ・グレ・スコルビリー…」

奴が魔法言語^{ワード}を唱えたと同時に、奴の前後に雷球が現れた。それ一つでも城が砕けるのではないかと思える程強力な雷球が高密度の電磁波を生み出している。

「汝 黒き魂にて 我を清めたもう おお冥王よ 至高なる者の強き集いの内に 我は死の凍嵐を身に纏いたり…」

電磁波が空気に干渉し、辺りの気温を一気に低下させる。

「今新たな契りによる氷雪の力束ねん いくぜ、エヴァ…絶対零^{テスト}凍波^{メント}。」

絶対零度の冷気の塊が私に襲いかかってきた。

泷side

「絶対零凍波。」
「テストメント」

俺の手から一直線にエヴァへと絶対零度の魔力が迸った。冷気は全てを凍りつかせていく。エヴァまでの地面や空気ですえ凍り始め、電と化して大量に地面へと落ちていく。電が地面に落ちるとまるで散弾銃を放ったようにガガガッと音を立てた。冷気の塊はエヴァを喰らい尽くし……って、え？

「さて、どうするかね……っ、おいおいまじか？」

眼前に見えるは……俺の絶対零凍波をその両手に留めるエヴァの姿が見えた。
テストメント

そしてそのエヴァは何か呪文を唱え始めていた。

「クリュスタリナー・パシビネダネー・デタギオーニオン リク・ラク ラ・ラック ライラック！ト・シュンボライオン 契約に従い ディアアーコネートー・モイ・ヘー 我に従え
エレボス 水の女王 来れ ハイオーニエ・クリュスタレ とこしえの やみ！えいえんのひょうが！！そら、
貴様のこの魔法分も追加してやる！」

俺の魔力を上乗せしたエヴァのえいえんのひょうがが……別荘内の空間全てを絶対零度の世界へと変化させた。無論、俺も魔法盾シールドを使用した。それすらも凍らされ、見事に氷漬けになってしまった。その姿を見たエヴァが高笑いしているのが聞こえた。

「ククク、アハハハ！自分の魔法を上乗せされる気分はどうだ？イフリートの気分を自身で体験できたな、ククク……」

何で、お前がそんなネタを知っているんだ……そう突っ込もうにも氷漬けになっている俺にはどうする事もできず……

「さあ、これが私の最高の魔法だ。しかと身に刻めよ？バーサイス 全ての命ソ」
ーサイス

ある者に 等しき死を 其は 安らぎ也 “ おわるせかい ”

トン・イン・タナトン

ホス

アタラクシア

コスミケー・カストロフエー

エヴァの洩らしたその言葉で…全ての凍りついたモノが砕け散った。

エヴァ宅にて 中篇（後書き）

ここでまたBASTARD!!ネタを投入してみました。

エヴァは氷と闇の魔法が多いんで、得意なのかな？と思ったのでこういう形で幕を終えました。常勝無敗もいいけれど、こういう負け方ならありかなーっと。

まあ、チート主人公なのでそうは負けないんですが…今回もどこか違和感があったのでは？何故負けてしまったのか…とかw

ちなみに烈氷破弾^{タンカード}について

大気中の水分等を氷塊にして、指向性を持つマジックミサイルにする魔法なのです。凄まじいスピードで飛来する氷塊は物理的な衝撃はもちろん、当たって砕けた瞬間に四散する氷片にもダメージ判定があるため非常に危うい魔法なのである！建物に撃ったら蜂の巣どころじゃすまなくなるといった魔法。

皆様の感想などが俺の力になるのでどうか、これからも宜しく願います！

少し、戦闘描写を変更しました。これぐらいしか書けない…未熟。

エヴァ宅にて 下篇（前書き）

いつもご視聴ありがとうございます！

ユニークも3万を越え…様々な方に見てもらってとても嬉しいです。

これからも頑張って書き続けるので応援宜しくお願いします。

エヴァ宅にて 下篇

別荘内は静けさを取り戻した。辺りに氷片、氷塊が散らばっているのはこの際無視するとしよう。その世界で、エヴァは高笑いを続けていた。こちらにも全力を出せる相手がいないのである。そして、今全てを出し切ったのだ。身体に爽快感が染み渡っていくのが判り、身体をブルッと震わせた後、なんとか落ち着けるようになった。

「ククク、完璧な最期だったな。」

「マスター、お一つよろしいでしょうか？」

エヴァの隣にいつの間にか茶々丸が立っていた。その表情は無表情ではあったが、どこか困惑したような顔だった。

「ん、一体どうしたんだ？今はとても気分がいいんだ、一つどころか何個でも構わないぞ。」

「それではお一つ…ラーズさんも一緒に砕いてしまっても宜しかったのですか？」

「は？…あ」

一瞬意味のわからない顔をしたエヴァだが…洸のいる場所を一旦見たかと思うと顔を真っ青にして駆け出した。

「おつ、おい！狂乱、生きているか！？」

砕け散った氷塊をどかすが…洸の姿は見えない。いや、肉片は見え

る…砕け散ってしまったのか…

「つい興奮してやりすぎてしまったというのか…？」

真つ青な顔をしたエヴァがへたりとその場にお尻をついてしまう。

「やっと、見つけたというのに…こんな…」

両の腕で身体をぎゅっと抱きしめ…頬に一筋の涙が零れ落ちそうになった時…異変が起きた。

「ブー・レイ・ブーレイ・ン・デー・ド 長いから略！ 全てを焼き尽くせ魔焦熱地獄！！」
エグ・ゾーダス

近場にあった氷塊が一瞬にして蒸発し、燃え盛る炎が出現した。ただ、範囲は凄く狭かったが。

「きよつ、狂乱！いきてい…た？」

エヴァの目の前で今さっき燃えていた人物は、とてもミニマムな姿に変わっていた。

「おお、エヴァ。やるじゃねえーか！ここまでやられたのはあの時以来だな！…おい、他のも早く復活しろ！」

ミニマム洸が、そう言い放つと砕け散った様々な氷塊が蒸発し、何十体にも及ぶミニマム洸が現れた。

「うわぁ、死ぬかと思ったわ。」「おいおい、こいつDSの格好してるぞ。」「高圧的なのはこいつの所為かよ。」「いいから、早く

戻ろうぜ。」「」「おう！」「」

「ビルド・アップ究極美形超電磁合体！！」

何十体にも及ぶコウが集まり…閃光が辺りを支配した。閃光が薄れていくと…そこには元に戻ったコウの姿があった。

「ふひいー、やられちゃったわ。俺の負けだわー」

元に戻ったコウはそうエヴァにいった。その顔はどこか晴れやかではあったが。

「お前は不死身か…それに何をいつてる…お前、手加減してただろ？」

「え？してないさ。」

「嘘をいうんじゃない。お前、私の得意なのが氷と闇だと知ってて…最期に氷の魔法使っただろ？それに、その前から光と氷しか使っていないではないか。え？『爆炎の魔法使い』さん」

エヴァがそういうと、コウは面を喰らった顔をした…が。直ぐに笑みに変えた。

「いいんだ。こうやってまともな勝負がしたかったんだ。俺も飢えてたのかもな、同程度の魔法使いと戦いたかったのかもしれない。それに、相手が得意なフィールドで勝つのが真の強者ってもんだろっ？」

その顔は余りにも清々しく、純朴な笑顔だった。その顔を見たエヴァ

アも茶々丸も顔を赤らめてしまっ。

「さて、負けは負けだ。俺にできる事ならなんでもするよ。」

「そっ、そうか。それでは、私と仮契約をしよう。」

「仮契約…？」

「なんだ、知らないのか。まあ、説明するより実際にした方がわかりやすいぞ。」

ふむ、説明もなくは…まあ、願いを聞くっていったんだ。腹を決めて待とう。

目の前には魔方陣を描くエヴァの姿が見えた。結構本格的なんだな。それにしても仮契約…どこかで聞いた単語だな。どこだったかな…。

「よし、描けたぞ。この真ん中に来い。」

相変わらずホイホイとついていく俺。魔方陣の真ん中に立つと、ちよつとしゃがめ！と怒られた。何が始まるんだ？と思ってたらエヴァが俺の顔を掴み…そつと口づけをしてきた。その瞬間閃光が辺りを包む。

「ちよつ、おまつ…！」

「ふつ、ふん。手加減なんてしよつて…ざまーみる」

舌をベツと出すエヴァ。こっ、これは…イタキス！？悪戯に絡まる…ゲフンゲフン。そつ、そついや仮契約ってこんなだったな。

今思い出したわ…。

閃光が収まると、俺の手に何かカードが降ってきた。これがパクティオカードって奴か。なんか真っ黒だが…しかも、『異世界の英雄』ってか。ぴったリではあるけどもさ。

ちらりとエヴァの顔を見ると、とても嬉しそうな顔をしてカードを見つめていた…全く…。

そうして、俺とエヴァは仮契約をしてしまった。まあ、勝負に負けたから仕方ないけどさ…。

しかし、自分の力に過信し過ぎないようにするのが今回の教訓だったなあ。

俺だって数年魔力を扱ってきたが、エヴァのように何百年も扱ってきている奴もいるんだ。魔力だけで勝っていても経験が足りないという事かな。俺も修行をしないおさなきゃ…。

また、この別荘をエヴァに借りよう…そう思った一日だった。

エヴァ宅にて 下篇（後書き）

という形で幕を閉じました。

チート持ちではありますが、やはり洗もたかが人間。上には上がいるのです。（そりゃ、まだまだ上級の魔法とかも使えますけどね！）

何事も慢心せず努力せよ！って事ですね。驕る平家は久しからずつてね！

そろそろネギ君登場させようかな…。

追伸

実は…別の小説を書き始めようかと思っています。

ネギま！は最後まで頑張るつもりなんですけど…こっ、煮詰まってきたしまい（笑）

まあ、思っているだけなんで書くかどうかともわかりませんが、もし書くことがあればそちらの方も宜しくお願いします。

候補（俺は他の作家さんと違って、F a t eとかなのはとかわからないんだぜ！）

サモンナイト（2予定）

永遠のアセリア

え？知らない？

こまけえこたぁいいんだよ！

希望がありましたら教えてください^^

その別れは突然に 番外編 (前書き)

あれ、なんだろう。元々出す予定ではあったけど…書いている内に…重たくなった気がするぞ？^^; そんな話は嫌い！という人もいるかもしれませんが、嫌ならページを戻ってください。重要ではありませんが、見なくてもなんとかなる…はず？

その別れは突然に 番外編

「は？好きな人？」

「そつ、好きな人。いなかったらタイプでもいいんだよん」

昼飯を食つてゐる時に、いきなり朝倉がそんな事聞いてきやがつた。その質問にピクリと身体を身動ぎさせた奴が何人かいたが…気にしなかったことにした。

「なんでいきなりそんな事聞くんだよ…？」

「いやあね、体験入学してきた男子。しかもそりやもうイケメン！そんな男子を狙っている女子なんてそりやあもつたくさんいるわけですよ！というわけでこの朝倉様がそんな乙女達お嬢さんの聞けない事を聞いてあげようと思ひまして！」

クネクネと身体を動かしながらいいたい事を言い切りやがつたぞこいつ…。ふむ、好きな人…か。

「好きな人はいなかったが…可愛がつていた奴ならいたな。」

「なんだと！そんな話、私は聞いてないぞ！」

そこで、何故エヴァが怒る。というか、他の連中もチラチラと俺を見ないでくれ…。

「いた…という事は、過去形なのかにや？」

「ああ、過去形だ。俺に懐いてくれてな…。色々教えてくれたり、世話をかけてくれたな。何事も起こらなければそのままアイツと付き合ってたのかもなあ。」

アイツ『蘆江 寧』（あしえ ねい）は様々な事を教えてくれた。このネギま！の事を教えて（強制的）くれたのもアイツだったし…。最後にアイツに会って今までありがとう。とてもいいかったな。アイツも今、幸せにしてんのかな？まあ、可愛かったし男には困らないだろうけど。少し遠い目をする俺に…。また、若干内容が重たい事に気づいた朝倉は言葉を詰まらせた。

『何事も起こらなければ』彼はそう確かに呟いた。という事は、今その子は…？

「へっ、へえ。そうだったんだ！それは貴重な情報をありがとう！」
私にはその場を切り上げて逃げる事しかできなかった。だって、彼の瞳は遠いどこかを見ていて…。どこか寂しげな顔をしていたのだから…。

名もない世界

はあ、洗ちゃんが死んでからもう大分時間が立つちゃったなあ。私の生活に洗ちゃんがいないなんて…。考えられないと思っていたのに。

洗ちゃんと私は幼馴染。幼稚園の頃からずっと一緒だった。小学校も中学校も高校も…。そして大学も。まあ、私が一緒になりたくて頑張っただけだ。高校3年になってから急に「俺は大学にいくわ」といつてきた。その大学は県内でもかなりレベル高かったのに…。私達のレベルじゃむずかしい！って散々いわれな

がらも二人で必死で勉強して受かった時は二人でとても喜んだ。

そして晴れて大学生活を始めて…2年後にアレが起こった。洗ちゃんは轢かれそうになった子を助けてそのまま…

最初見た時は意味がわからなかった。洗ちゃんより先に学校についていた私は、何か嫌な予感がして学校を飛び出した。すると、大きな音とゴムが焼け付くような臭いがしたんだ。慌てて音のした方向かうと、そこには血まみれの洗ちゃんとそれを呆然に見ている子ども。そしてその保護者と思われる女性がいた。女性は倒れている洗ちゃんを抱き上げ…何か喋った後、洗ちゃんの手がだらんと落ちた。私はそれを見て我に返り、大きな声で彼の名前を呼んだ…でも、彼は戻ってこなかったけど。

あれから、子どもの親は何度も彼の家に来ていた。洗ちゃんの両親もとても優しく、洗ちゃんはやっぱりその血を受けついたらんだなと思った。あの子はあれから塞ぐ事はなかった。状況を良くわかっていないのか、それとも何も考えていないのか。私はそんなあの子の顔を見ていると…いつ、いけない。こんな事思っても洗ちゃんは喜びはしないのに…でもでも。そう、私は洗ちゃんが死んでから毎日同じことばかり繰り返し、繰り返し考えている。それほど、洗ちゃんがいなくなっただけという事は私の中で大問題なのだ。あの子を救った洗ちゃんならあの子を恨んだりするものか。死んでからも、助けたあの子が平気かどうかを気にしているのに決まっているんだから。

「ねえ、神様。なんているなら洗ちゃんを助けてくれないの？」

そういつて、何度も神様を恨んだこともあった。ずっと恨んで…ふと思ったの。洗ちゃんはそんな事望んでないんじゃないかって。洗ちゃんはヤサイいんだから…。

返事は…ない。写真立てに飾っている洗ちゃんの写真は…とても笑顔だった。そっか、幸せなんだね。私は胸にポカーンと穴が空いた様で…。洗ちゃんがあんなに好きだった本も何度も読み直して…洗ちゃんとああやって一緒に本読んでた頃を思い出したりして…洗ちゃんもあんな風に蘇ってくるんじゃないかって期待したりして…色々な事を考えているよ。

今日も、一日中こうして仏壇の前に横になっていた。洗ちゃんのお母さんが食事を持ってきてくれていたけど、喉を通らなかった。夕方になると、ピンポンとチャイムの音が聞こえた。玄関が開くとドドドと音を立てて誰かが階段を昇ってくるのがわかる。

「おにいちゃん、きょうもきたよ！」

あの子だった。今日も元気良く…あかるい笑顔で今日も来た。控えめで後から来たこの子お母さんは今の私の姿を見て吃驚としていたようだが。男の子は私の方を見て、私に向けてこういった。

「ねえ、おねえちゃん。そんなくらいかおしてたらおにいちゃんがかなしむよ」

私はそんな言葉を聞くとは思わなかった。洗ちゃんが悲しむ？その洗ちゃん自体を奪った貴方がそれをいうの？誰よりも一番…シンパイスティルワタシニウノ？

「…だが…」

「え？」

「貴方がそんな事を口にしないで！」

「!？」

今まで言えなかった言葉が次々と溢れてくる。止めようと、いわないでおこうと思っていた想いが次々に溢れ出す。私が全てを吐き出した頃には男の子は涙目に、母親は涙を流して「ごめんなさい…」と呟いていた。

「うつ、うわあああ！」

ついに男の子は泣き出して部屋から出てしまった。洗ちゃん、私言っちゃった。言っちゃいけないと思ってたんだけど…そう洗ちゃんに言おうと思つて洗ちゃんの写真立てを見てみると…洗ちゃんの顔が怒っているように見えた。それを見た私は急速に頭が冷えていく感じがした。私は一体なんてことをいつてしまったんだ!! あつ、あの子を追いかけて謝らなくっちゃ! 私も直ぐに部屋を出てあの子を追いかけた。

走る速さは、そこは幼稚園児と大学生。直ぐに追いつくことはできた…ただ。

あの子、また周りが見えてないじゃない!!!

そう、あの子の…隣には…再び車が迫っていたのだった。

洗ちゃんが救った命を…こんな所で!

私は一気に加速を上げ

あの子を突き飛ばした。

「これで、良かったのかな。洸ちゃん」

その後に来る大きな衝撃によって私は意識を手放した。

目を開けると、そこには満天の星が。そういえばもう夜だったのか。最近日は暮れるのが早いなーっと思っていたら、私の直ぐ横で泣き声が聞こえた。何事かと思い、身体を動かそうとするけど…身体は私のいうことを聞いてくれなかった。

「（洸ちゃんもこんな感じだったのかなあ。）」

それでも尚、必死で顔を動かしてみる。少し動いた所で男の子の顔が見えた。私はクスッと笑い、男の子に話しかける。

「泣か…ないで？私も…洸ちゃんも…貴方を…恨んでないから。さつきは、言い過ぎて、ごめんね。」

男の子は私の言葉を聞くと、涙を拭いて「うん」と力強くうなづいた。

「貴方は、洸ちゃんと私の、分まで…生きてね。二人で…あなたの事、見守ってるから…」

男の子は再び涙を流したが、ニカッと笑い「ありがとう」といった。

そうか、この子がずっと笑ってたのって…

私はその子の笑顔を見た後、目を閉じ…再度意識を手放した。

「（この世界にいたくない…神様、約束守ってくれたんだね。ありがとう。）」

そして、私は真っ白な空間で目を覚ました。

その別れは突然に 番外編（後書き）

そう、1話、2話の最後の方に出てたり、時折洗が言ってたアイツの事です。名前は…そう彼女です。当て字？上等！信長の野望での蘆名さん結構使えるんだよ！（あ）

今回の番外編では蘆江 寧の話でした。次はネギ君が登場します。蘆江の最後の文と…ネギ先生が来る時期…色々と絡み合います。

聡明な読者様ならこのような伏線は直ぐに見破るのでしょうか…と
いうわけで次回をお楽しみに！

原作介入 だけではすまんよ！ （前書き）

時間が空きました事をお詫びします。 申し訳ございませんでした。

さて、とうとう原作編へと突入したいと思います。

原作介入 だけではすまんよ！

エヴァとの戦闘は久しぶりに心高ぶったな！そうしてクラスメートとの交流、自らの修行を行っているとあつという間に1年間が過ぎていった。そしてとうとうあの日が近づいてきたのである…。

学園長室にて

「ん、ナギの息子が来るのか。」

「そうじゃ。名をネギ・スプリングフィールド。コウ君は会ったことはないのかの？」

「ないね。産まれている事は知っていたが…奴の息子だ。どうせ何かしらで会おうだろうと予測していたよ。まあ、あの子が教師になつてくるとは思っていなかったけどね。」

ハハハと笑う俺だが、当然教師で来るって事は知っている。まあ、大分知識も失われてはいるけどね。

「そつえばタカミチは面識あるんだっけか？」

「そうですね、まだ彼が小さな頃にですが。」

そついや、ネギ君が来るとタカミチと教師交代になるのか。ああータカミチ先生は楽だったのになー。まあ、いいや。さて、実際のネギ君はいかなものかなあつと。

数日後

さて、今日にネギ君が来る予定になっている。俺はようやく原作介入（今までもしていた？）できる事に喜びを感じながら登校している。…ん、魔力の波動…明日菜とエンカウントしたか？そしてその後にかかる微弱な風…。間違いないな。さて、どんなことをして俺を喜ばせてくれるのだろうか。

学校の近くに差し掛かると、凄剣幕でネギ君を連れ去っていく明日菜とそれをローラーブレードを履いた木乃香が追いかけていく。途中木乃香が俺に気づいたからか、こちらの方へ寄ってきた。

「おはよう、コウはん。」

俺もおはよう、と返しあの騒ぎは？と聞いてみた。

「さっき小さな子がおってんやけど、その子がくしゃみしたら明日菜のスカー트가捲くれてしもてなあ。それに明日菜に失恋の相がでるとかいつてもたから、明日菜カンカンになっちゃってん。」

「ああ、なるほどなあ。あいつはタカミチの事大好きだもんな。まあ、タカミチ自体は見守ってるって感じだけど…んで、その子連れてどこに？」

「なんや知らんけど、その子今日からウチの学校の先生になるらしくてな？せやから多分学園長室に向かってんちゃうかなあ。」

ふむ、と一声を出し「木乃香も付いて行ってあげてくれ。あの剣幕じゃあ少年が可哀相だ。」といってあげる。木乃香もせやねと返事

をしそのまま明日菜の後を追っていった。

俺はクツクツと笑っていると、後からやってきたエヴァ（俺はエヴァの家に居候している（させられている））が怪訝そうにこっちを見ていた。

「なんだ、こんな所にいたのか。先に行くから何かあったのかと思っただぞ。」

「あつたんだよ。今日はナギの息子が来る日だからな。」

エヴァは、「ああ…そういうばそうだったな。」と思い出したかのように、直ぐにどうでも良さそうな顔をしていた。

「スプリングフィールドを追っていたのはお前を探すためだったしな…ああ、そういえばこの魔法の借りを返さなくてはいけないのだつたな…ククク」

邪悪そうな笑みを浮かべるエヴァ…素敵！その後学園長室に向かった彼女らがどうなっていたのかを楽しみにしながら俺は…クラス奴らがトラップを仕掛けているのを面白そうに眺めていた。

そろそろ来る頃か…。いつもの朝のHRには感じない異質な魔力が近づいてくるのがわかる。これがネギ君なんだろう。さて、と。原作では最初どんな始まりだったか…？って、そっぴやネギ君って魔力障壁を消すの忘れてたとかじゃなかったか！？

そう思い出したが無情にもドアは開かれた。

教室のドアを開けた瞬間：ネギ君に目掛けて落ちて粉を撒き散らす予定だった黒板消しは本人には当たらず。本人の上空にて待機していた…というのは原作の話。ドアが開かれた瞬間に俺は自分の机にあった消しゴムに若干の魔力を込め親指で弾いた。魔力付きの消しゴムはネギ君の障壁を打ち破ると威力を弱めたまま彼の額にぶつかった。

「いたっ…ぶへっ。」

若干黒板消しが宙を浮いていた気がするが、多分誰も気づかなかっただろう…？そう思い、周りを見渡すが…ああ、やっぱり明日菜は気づくんだね。訝しそうにネギ君を見てる。んで、突如変な行動を取った俺をめっちゃ恐い視線で刹那が睨んでる、と。何であんなに敵視すっかなあ…？

黒板消しの洗礼を受けたネギ君はふらふらと歩き始め…我がクラスの悪戯という名の歓迎を受けた。すまぬネギ君…。

服がびしょ濡れになった為、一度服を着替えにいったネギ君。可哀相な事をしたなあ…そう思ってたら隣にいたエヴァが話しかけてきた。

「どうした？お前が攻撃を仕掛けるとは。」

「障壁を切るのを忘れていたみたいだったからな。流石にまずいだろ？だからちよつと壊してみた。」

「消しゴムで障壁を破る奴なんてお前ぐらいだぞ？まあ、私としては奴の息子の馬鹿な姿が見れて満足ではあるが。」

クツクツと笑うエヴァ。ネギ君…お父さんの所為で厄介な人に目をつけられたね。

そうこうしている内にネギ君は帰ってきた。さらつと自己紹介を済ませると、前回の俺の時と同じくクラスの連中は黄色い声をあげた。

「か、かわいい〜〜!!」

朝倉を中心に質問攻めを行うが…そこで一緒に来ていたしずな先生がネギ君に助け舟を出した。

「はい、皆さん。質問は後で、ね。まだ紹介する事があるのよ。」

しずな先生は廊下に向けて入ってきてもいいわよ。と声をかけた。静々とドアは開かれ、一人の女の子が顔を俯かせて教室へと入ってきた。

ん?…なんだろう。この既視感は…そして懐かしい感じがあの子からする気が…。

「今日から貴方たちのお友達になる女の子よ。さ、自己紹介をなさつて。」

しずな先生が彼女にそう促すと、彼女は緊張した様子で顔を上げた。

「きよつ、今日から一緒に勉強させていただく…蘆江 寧です。宜しく願います!」

頭を下げた彼女…あしえ…ねい…?どっ、どういつ…?

彼女は顔を上げ…そして俺と目があつた。彼女の顔は驚愕に満ち…
そして溢れんばかりに顔を輝かせた。笑顔なはずなのに頬に流れる
一筋の涙と共に。

「洸ちゃん！私、会いにきちゃった！」

俺の元へ走ってきて抱きつく彼女に呆然とし…

「「ええええええ！?!?!」」

クラスは更なる喧騒に包まれていった。

原作介入 だけではすまさんよ！ （後書き）

前回までのフラグはここへと繋がりました。

オリジナル2人目も介入しにきました。

久しぶりの投稿にもかかわらず短い文章で申し訳ございませんが…
^^；

ご意見やご感想をいただけたら嬉しいです。 それでは、また。

追記

前回までであったあだ名について変更してあります。違和感があると思いますので麻帆良学園に来るところからもう一度読んで頂く方がいいかもしれません。

幼馴染（前書き）

活動報告って誰か見てくれてるのかな（ 台詞が情けない

誰も見てないなら今すぐ見て俺にメッセージを残してくれると喜んで
りますよ！

幼馴染

「ねえ！？貴方と如月君とどういう関係なの！？」

朝のHR、ネギ君の授業が終了しても我がクラスは喧騒を止めなかった。ネギ君の授業はこの子達の質問タイムで潰れてしまい（泣いてたぞあの子…）今は俺と、俺にぴったりとくっついて離れない寧の周りに人が集まっていた。こいつ、やたらとベタベタと引っ付くな…。

「私たちは運命の赤い糸で結ばれてるんですよー」

寧の一言に辺りは再び喧騒に包まれる。俺の隣の席からは主に殺気を感じるんだが…。と、そんなことはこの際どうでもいい。（おい、どうでもいいとは何事か！）エヴァの心の叫びが聞こえた気もするが…。

「おい、寧。どうしてお前がここにいるんだ？」

「え？洸ちゃんにアイに来たんだよ？」

含み笑顔でそう答える寧。会いにきたって…こんな場所簡単には会いにこれるわけないだろ！？

「…後で、詳しく聞かせてくれよ？」

「はい。」

そういつて再び俺の肩に頬を当てる寧。なんなんだ、全く…ん？確

か、授業が終わった後も何か事件があったような…？

「おい、寧。授業が終わった後には何が起こるんだった？」

「え？ええつとね。宮崎のどかが階段で足を滑らせて落ちるんだよ。原作ではね。」

まっ、まずい。再びネギ君のピンチだ！原作では明日菜だけにしか見られていなかったが、もう既にこの世界はなんらかの形で原作からずれていつている。何かが起きてもおかしくはない！

「わりい、寧。ちよつとどいてくれ！」

引っ付いていた寧を引っぺがし、すぐさま走り始めた。後ろから寧の俺を呼ぶ声が聞こえたが、今はそれ所ではなかった。

ええつと、外だったな…って、いた！原作では外だったのに、ここは学校内じゃないか！？

宮崎が視界を防ぐほどの大量の本を持って歩いている。…！？その隣には同じく大量の本を持った綾瀬じゃないか！おいおい、この場面は宮崎一人のはずだろ…ってそんな事 考えている場合じゃない。ネギ君が魔法を使う前に…

宮崎 side

「ゆえ、大丈夫？」

「のっ、のどかこそしつかり前をみるのですよ…あっ！」

ゆえの驚く声が聞こえた同時に私の持っている本がグラリと崩れ始めてしまう。私は体勢を崩してしまい、足をつこうとしますが足は地につくことなくそのまま身体ごと浮遊感に包まれました。いずれ来るであろう痛みと衝撃に目をぎゅっと瞑り、その瞬間を待ちました。

洸 side

しまった、間に合うか！？一歩ずつスピードを上げ彼女らを追う！くっ、間に合わないか！？と思った所、彼女らが一瞬間を浮いた状態になった。

チラッと廊下の奥を見ると、杖を持ったネギ君と、それを目撃してしまった明日菜の姿が…。

他に姿が見えない事から許容範囲内と判断し、彼女らを救出する事に専念する事にした。スピードのつきすぎで階段を降りれない為、壁の手前にて跳躍をし三角飛びの要領で階段を曲がり、二人を空中で抱きかかえる。

まあ、抱きかかえるまでに沢山の本で頭をぶついたり、着地した時にも後ろから降ってくる本に背中をぶついたりと痛かった。それでも尚、彼女らには本をぶつけないように庇ったつもりだ。

「あっ、あんた今の…！」

階段の上を見てみると杖を持ったネギ君が明日菜に連れてかれている場面だった。ああ、ネギ君…どんまい。

「あ、あの…」

つと、いけない。両手に華…ではあるが、彼女らを抱きかかえたままだった。

「ごめんね。二人共落ちそうだったからつい抱きしめてしまった。」

「「あわわわ…」」

その言葉を聞いて顔を真っ赤にしてパニック状態に陥る二人。二人をそつと離し、バラバラになった本を集めておく。

「これ、全部図書館にもってく奴？後は俺が持っていくから先に教室にいつてなよ。」

と声をかけてから図書室へと向かった。

「随分、返却するのに時間をかけてしまったな…。」

図書室で返却を終わらし教室へと戻ると、どうやらネギ君の歓迎パーティーの途中のようだった。ネギ君は楽しめてるかな…？と。辺りをキョロキョロと見渡している内に俺の後方から強大な殺気を感じて、すぐ様防御の姿勢をとった。案の定、後ろからミドルキックが飛んできたのだが、既に防御体勢を取っていた俺にはダメージは少なかった。

誰だ…？と思ったら顔を真っ赤にさせて怒っているエヴァがそこにいた。え、えー？なんで怒ってるんですか貴方は！？

「ちよつ、なんだよエヴァ！いきなり危ないじゃないか！」

「うつ、うるさい！まさか貴様にあんな相手がいうとは…！」

なっ、なんの事をいつてるんだ？この金髪少女は。あんな相手と指を指した方向を見ると得意気に何かを話している寧を見つけた。あいつ…なんかくくでもない事いつてるんじゃないんだろっな…。

「わかった。誤解かもしれないから、とりあえず話を聞かせてくれ。」

そしてエヴァから話される、俺にとっては驚愕の事実…！俺と寧は別にそんな仲じゃねー！妹みたいなもんだー！

話を聞いて直ぐに俺は寧の頭をぽかりと叩き、興味津々に聞いていた一部のクラスメートへ誤解を解きに回った。なんで俺がこんな事をせねばならんだ…。

「お前な、ある事ない事いつてるんじゃないの。」

「えへへ、そんな固いこと言わないでよー。」

誤解を解いて回った後、当然のように俺の横に座る寧に対して俺はそう声をかける。眼前にはクラスメートにいじられているネギ君。ああ、そんなタカミチにあればの魔法使っちゃって…。

「そっいえば、どうやってここに？」

「え？えつとね…洸ちゃんを追いかけてきちゃった。」

くわしい事を聞いてみると（外伝参照）、どうやら死んだ後に俺を

ここに連れてきてくれた神様が寧の所にもやってきたらしく…。ここに連れてきたらしい。俺と同じような能力は持つてないようだ（願いは俺と同じ世界にいききたいとの事だったので）、高レベルの魔術師程度の能力はあるみたいだ。まあ、それなら俺が鍛えてあげればそう負ける事もなくなるだろう。しかし、それにしても…

「良く俺がわかったな。向こうの時とは姿も変わってるだろう？」

髪の色、瞳の色、身体のサイズとか諸々変化しているはず。

「わかるよ。だって洸ちゃんの事だもの。」

真顔でさらっとこういう事言える奴ってすごいよね。流石は妹分つてところかな？

「まあ、こっちでも宜しくな。」

「うん。不束者ですが宜しく願いします。」

何いってんだか…。色々と思う事はあるけれども、ここでの生活も多少なりとも面白くは…なってきたかな？

幼馴染（後書き）

そして相変わらずに短い文章…。一区切り止めてるつもりなんだ…。

P V 3 5 0 0 0 0 ユニーク4万

総合評価も4桁…なんか驚きます。

皆様、今後とも宜しくお願い致します…。目指すはランキング100位以内！（あ

図書館島っ！！（桜島！つばく、あれ？ネタがわからない？）

さて、ネギ君が赴任してきてから数日が立った。相変わらずネギ君と明日菜は仲良く（？）してんなー。この前は惚れ薬騒動、ドキッ！？ネギ君生徒と入浴！？事件とか。そういやあ、先輩方に絡まれた事もあったなあ。で、今は何をしているかというところ…。

「皆さん、まだ時間があります！ここにある本を使ってできる限り勉強しましょう！」

図書館島にいるというわけだ。

「んあ？今度のテストで成績悪い者は留年だー？」

「うん、明日菜がいうてたわー。」

とある昼休みの事である。木乃香と雑談していたら、ふと思い出したらしくそう言ってきた。

「洸はんはあんまり成績宜しくないやろ？真面目にやればええのに。」

そつ、1年の前半は結構真面目にしていたんだが、段々と阿呆臭くなってきたため授業中やテスト中も居眠りが多くなってしまった。まあ、担当がタカミチだったし構わなかったわけだが。

「なんか、真面目にやる気なくてなあ…。でも、それなら明日菜

も動揺してるんじゃないか？」

「そうなんよー。だから……」

そこで俺は次のイベントである図書館島の話を書きだした。そつかり。そろそろそんな時期だったんだ。俺も一緒についていく事が決まり（いつもにか寧もいたわけだが）こうして、一緒に勉強しているわけだ。

「ねえ、洸。ここは？」

「あ？そこは鎌倉幕府だ。創設したのは源頼朝な。創設したのは1192年……いいか、明日菜。覚え方は1192（いい国）取り繕う鎌倉幕府でオツケー。」

「あはは。洸はん、そこは嘘教えたらあかんえ？取り繕うやのうて作ろうやろー？」

「ねえねえ、洸さん！ここは、ここは！？」

「なんだ、まき絵……。そこは”むずかしい”っていう意味だ。反対はeasy”簡単”だ。試験に出るかもしれんし覚えとけよー。」

とまあ、こうやって勉強を教えてやっている。楽しそうに教える俺の姿に時折殺意が込められた視線（主に刹那とか寧とか）から感じるが全く気にしないでおいた。

ネギ君も時計を見ながら、色々と調べ物をしているらしい。ふむ、ちゃんと時間を考えている様子で何より。俺はこの子らの実力アップの手助けでもしますか。

あれから数時間、彼女らの相手をなりつつ…自分でも何かないかとそこらへんの本を手にとって見てみた。何冊か読んでいると…どこからか叫び声が聞こえた。

「しっ、しまった！裸を見逃したか！？」

「…洸ちゃん。声に出てるよ。そんなに他の子の裸が見たいかー！」

「しまっ、げふっ。」

隣に寧がいたのを忘れていた、更に言葉に出してしまい…寧から一発良いのを腹にもらってしまった。中々いいパンチだぜ…。

「って、あれか。爺さんゴーレムが襲ってきたか。」

俺は、叫び声のあがった場所まで急行した。そして着いた先には…
パラダイス
天国があつた。

「oh…beautiful…this place is paradise…?!」

「もう、何見てるの！」

さっと、俺の目を手で伏せる寧。何も見えなくなってしまったが、眼福を得た。そのまま寧を背に担ぎ、彼女らの前に立った。

「お前達大丈夫か！？」

「ちよっ、洸君…って何その格好？」

「お前達の裸を見ない様にと工夫した結果だ！さあ、早く服を着替えにいくんだ！」

「でも、まき絵さんが！」

ん、この声はネギ君か。なるほど、まき絵が捕まっているのか。仕方ない…。

「楓！俺が攻撃を仕掛けるから、その隙にまき絵を救出宜しく！」

「心得たでござる！」

「ふお！？ちよつ、ちよつと待つのだじゃ！」

何か幻聴が聞こえた気がするが、軽くスルーしておく。先ほど幻聴が聞こえたおかげで相手の場所を特定することができた。俺は瞬歩でそのモノへと一瞬にして近づき気で強化した足で…相手の足と思われる場所を思い切り振りぬく！

蹴っ！ガッ、ドガンー！！

俺が足を振りぬくと、わずかな抵抗も空しくゴーレムの足は砕け散った。「ぐへっ！」なんていう声も聞こえたが気のせいだろう。

「洗殿！まき絵殿は救出できたでござるよ！」

「よし、退却だ！全員もどれ！」

急いで服を着替えさせ、誰が見つけたか滝の裏側に非常口を見つけ

た為、全員で向かって走り出す。

「ところで、先ほどまき絵殿を救出した際にこの様な本もついでに戴いたでござるよ。」

そういつて俺に本を差し出す楓。んー、なんかの魔道書…だったかな。

「あつ、それは！」

「お？知ってるの？ネギ君」

「はい、それはメルキセデクの書だと思います！」

ふむ、これがネギ君らが欲していた本か。ネギ君が欲しそうに見ているが…ダメだな。

「まあ、これは一旦俺が預かっておくよ。ネギ君に渡すと今直ぐにでも読んでしまいそうだしね。」

ネギ君がしゅんっとなるのが目に見えた。だが、頭がよくなる魔法なんてそう簡単にあるものじゃあないんだよ。

そうやって話をしている内に後ろから何やら音が聞こえた。ちつ、復活しやがったか？

「さっきのゴーレムが復活したみたいだ！先へ急げ！」

「でも、洸！この扉が開かないのよ！」

「なんだと！？…どれ…ふむ。ここに問題が書いてあるから、それに正解すると開くという仕掛けになっているようだな。よし、古菲！解いてみる！」

「わっ、わかったアル！やってみるアル！」

俺たちは順調に門を通っていった。どうやら先ほどまでの学習が身についていたらしく苦も無く先へ進めている。このまま無事に全員…って、綾瀬の奴遅れてるじゃないか！俺は前進していた脚を止め、後方に向かって走り出した。綾瀬がもう少しでゴーレムに追いつかれて…って所でなんとか、救出成功。

「綾瀬、大丈夫か！？」

「はっ、はい。大丈夫なのです。これで如月さんに助けられるのは二度目、ですね。」

「そんな事気にするな。俺には助けられるだけの力がある。それを使っただけの事さ。」

舌を噛むなよ？と言い、俺は綾瀬をおんぶしたまま走り出した。拒否するかと思っただが意外にも何もいわれなかった。

「洸はん、ゆえ！早くー！」

俺が上がった頃には皆、既に脱出用のエレベーターに乗っていた。先ほどの声は木乃香か。待ってる！と返事をし、更に速度を上げる。直ぐにエレベーターまで辿り着き、俺達が乗った所で警報が鳴り渡った。

「なっ、何!？」

「重量オーバーってところか？本の分余計なのかも。」

そういつて、躊躇無く本を捨てる…が、警報は鳴り止まない。人数が多すぎるのか？試しに俺が降りてみると鳴り止んだ。原作に+寧がいるんだが…原作とやはり変化しているのだろうか。つーか、俺と寧がいなかったら書物持ち出せたのか…良かったのか、悪かったのか。

「お前達、先にいつててくれ。俺は別のルートを探す。」

「そつ、そんな！ダメですよ！」

「ネギ君。もし遅れたら…すまん！俺のクラスメートを宜しく頼む！」

エレベーター内から何やら聞こえるが、無情にもエレベーターは外へと向かっていった。

「さて、爺さん。彼らは送り返したぞ。本もこの通りあるし、帰出道教えろー。」

陰からすつと出てきた爺さんゴーレムに本を返すと、爺さんが話しかけてきた。

「洸君、足がいたい。ちつとは手加減ぐらい…」

「いや、すまんね。つい、加減を間違えて…な。」

爺さんは呆れたようなため息を漏らし、俺に出口への道を教えてくれた。

この図書館の奥の方から何やらなつかしい魔力を感じる気がするが…今はいいや。必要になったら奴の方から何かしてくるだろう。そう考え俺は図書館島を脱出した。

試験当日、俺は遅刻していた。爺さんが教えてくれた帰り道は思ったよりも遠く、また時計も持っていなかったので時間がわからなかったんだ。外に出た頃には外は明るく…俺は急いで学校へと向かった。

「遅れましたーっと。」

「………洸（敬称色々）！？」「………」

俺が入ったと同時に遅刻組がこちらを凝視してきた。なんだよ、こえーじゃん…。手をヒラヒラして案内された席へとついた。さて、原作では俺達抜きでも1位だったが…ここでミスすると原作終了しちまうし真面目にやるか。

試験が終わった後に、遅刻組全員が寄ってきて恐かった。寧なんて外に出てから「私は洸ちゃんを探しに行くのー！」って言うて聞かなかったらしい。なんとか明日菜と楓で連れて帰ったらしいが…こいつ、俺に依存しすぎだろ（笑）宮崎や綾瀬からもまた礼を言われた。ちゃんとお礼していなかった、と言ってだ。今度放課後奢ってくれるらしい、ラッキー！

というか、何時になったら刹那さんは俺に対して警戒を解いてくれ

るのだろうか。一度ちゃんと話をするべきだな……。だって、今も木乃香と話してたらすごい睨んでくるんだもん。

教室に戻ったらエヴァに怒られた。数日間留守にしてただけなのに……俺の周りの女の子（エヴァとか寧とか）ってカルシウム足りなくない？最近怖いよ？

余談だが、テストの順位……なんとか1位になったわけだ。

爺さんが遅刻組の答案も点数に入れる事を忘れていて……それでも1点足りなかった時は吃驚した。え？原作終了？と思っていいたら、更に遅刻してきた俺の分を解答するの忘れていたとか抜かしやがった。まあ、当然の如く満点だった為1位のクラスの平均点を上回り……なんとか原作終了を回避する事ができた。真面目にやっというてよかったー！

一応爺さんには説教と肉体的説教もしておいた。後、追加報酬も戴いた。ざまーみろ！

図書館島っ！！（桜島！っばく、あれ？ネタがわからない？）（後書き）

アクセス40万突破！

皆様が読んでくださるので続けられます。ありがとうございます！

ご意見や感想及び、お気に入り登録や評価は随時期待しておりますので、宜しくお願いします。

ヴァンパイアく飾らなくていい傍にいたいだけ今全てを無くしても貴方が欲しい
タイトルに深く意味はないです。わかる人にはわかるはず、大人の
世界ですよね！

ヴァンパイア飾らなくていい傍にいただけ今全てを無くしても貴方が欲しい

「いやー、今日も疲れたなあー。」

「そーだね、今日も疲れたねー。」

寧と二人でエヴァの家へと帰宅する。どうやら寧もエヴァの家で住むようになったようだ。いつの間に仲良くなったんだろう？

「ただいまーっと、あれ？エヴァ、どこかいくのか？」

「ああ、少し出掛けて来る。留守は任せるぞ。」

そういつて黒いマントを羽織って外へと出かけていった。外はもう暗くなるというのに……って別に心配するほどヤワな奴じゃないか。

「お帰りなさいませ洸様、寧様。」

「やあ、茶々丸。お前さんもいくのか？」

「私はマスターのパートナーですので。御夕飯は用意してありますのでお召し上がりください。では。」

ジェット噴射によって茶々丸も宙へと飛び、エヴァを追いかけていった。なんだ、なんかあるのか？

「そろそろ吸血鬼事件なのかもねー。」

隣にいる寧がそう言う……。吸血鬼事件？

「あれ？ 洸ちゃん忘れちゃったの？ エヴァちゃんが吸血してる時の話だよ。まだ噂にはなってないけど、明日ぐらいにはなってそうだね。」

あー、そんな話も… あった… な？ いかん、記憶がおぼろげだ。本読んだのって数十年も昔だしなあ。

「そういえば洸ちゃんの中身はおじさんなんだもんねー。でも、外見は若いまんま。世の女性に刺されちゃうよー？」

そうはいうがなあ…。まさか不老な身体になっちまうとは思ってないなかったんだよな。

「髪型も真つ赤に… まっ、まあ… 格好いいけどね。」

「ありがと。しかし、吸血鬼事件か…。」

その夜、少し満足そうに帰ってきたエヴァを迎えた。何かあったのか？ と聞くと内緒だつていわれた。若干の血の臭いはするのだが… まあ、普通の人なら気づかない程度の臭いだけだね。戦場で嗅ぎ過ぎちゃって、つい敏感に…。

次の日、学校では昨夜の出来事が噂になっていた。エヴァ、茶々丸は知らず存じぬの表情をし普段の生活を送っている。俺たちにも教えないつもり… か。まあ、知ってるけどね。

「あの、如月さん。」

ん、ネギ君が話しかけてきたぞ？一体何のようだ？

「うん？ネギ君、なんかあったの？」

「えっ、えつとですね！何か吸血鬼の事件について知りませんか！？」

あ、あれ？俺つてもしかして疑われてる？

「いんや、俺は特に知らないね。クラスメートが襲われたって話だから用心はしなきゃなと思ってはいるけど。」

「そうですか…。えつと、良ければ今日って空いてますか！？」

おいおい、これは何だ？デートの誘いか？

「…。ネギ君。デートに誘うなら女の子にするべきだと思うぞ？そうだ、明日菜とは仲がいいみたいだし、明日菜とk」

「ちょっと、あんたは何いってんのよー！」

グシャ。と音を立てて吹き飛ぶ俺。いてて、くそ。明日菜の奴…スカーツで飛び蹴りとはやってくれるな。そして…

「クマさんか。中々可憐なものを。」

「！洸のエツチ！」

ばちこーん！明日菜の平手打ちが俺の頬に直撃。頬には真っ赤に染まる手跡…いたい。

「わわわわ、そ、その！違うんです。歳の近い男の人って如月さんだけなのでちょっと頼ってみたくなくて…迷惑だったらすいません！」

俺に頭を下げて逃げていくネギ君。冗談は通じないのか英国紳士と
いうのは。まあ、いい。ちょっとエヴァをからかってやるか…。ど
うせ今夜もエヴァは出かけるのだろうしな。

ネギ side

僕のクラスで事件が起きました！

なんでも、昨日まき絵さんが吸血鬼？に襲われたみたいです…。僕
の生徒を狙うなんて許せません！でも、情報が少なすぎるなあ…誰
かに聞いてみよう！えっと、誰に聞いてみようかなあ…あつ、あの
人は如月さん！この前のテストの時にも皆さんに頼られていたし、
僕のクラスでの中心人物といっても過言ではないはずです！あの人
に聞いてみましょう！

「あの、如月さん。」

僕が話しかけると如月さんは不思議そうな顔をされました。確かに
こうやって1対1で話した事はなかった気がします。

「うん？ネギ君、なんかあったの？」

それでも笑顔で話に答えてくれる如月さん。お姉ちゃん、この人い
い人みたいです！ととっ、本題に入らないと。

「えっ、えっですすね！何か吸血鬼の事件について知りませんか！？」

如月さんは一瞬目を見開きましたが、少し考える素振を見せました。

「いんや、俺は特に知らないね。クラスメートが襲われたって話だから用心はしなきゃなと思ってはいるけど。」

如月さんは知らないですか…。それにしても如月さんってお兄さんって感じがしますね。ちょっと頼ってみようかな？

「そうですか…。えっと、良ければ今日って空いてますか!？」

僕の言葉に、如月さんはぽけーとした表情を浮かべた後、

「…。ネギ君。デートに誘うなら女の子にするべきだと思うぞ？そうだ、明日菜とは仲がいいみたいだし、明日菜とk」

「ちょっと、あんたは何いつてんのよー！」

急に現れた明日菜さん。助走をつけ、勢いそのまま如月さんへ向けてジャンプキック。グシャ。と音を立てて如月さんは吹っ飛んでしまった。い、痛そうです…。

「クマさんか。中々可憐なものを。」

「！洸のエッチ！」

ばちこーん！如月さんは結構平気そうだったみたいですが、どうやら下着が見えてしまっていたようですね。それにしても、ぼ、僕が

変な事聞いたから如月さんがお怪我を！？

「わわわわ、そ、その！違うんです。歳の近い男の人って如月さんだけなのでちょっと頼ってみたくなくて…迷惑だったらすいません！」

如月さんの返答も聞かずに立ち去ってしまいました。職員室に戻ってから如月さんごめんなさい、と心の中で思いました…。

光 side

放課後になり、俺はネギ君が職員室から出てくるのを待った。そしてネギ君が扉を開けた所で目が合った。

「え？如月さん？」

「やあ、ネギ君。英国紳士はデートの誘いをするだけで迎えには来てくれないのかな？」

俺がニコリと笑っていったらやるとネギ君も笑顔になり、宜しく願います！と頭を下げたのだった。

「んで、今日はどうするんだい？話の流れからして吸血鬼事件でも探るのかい？」

「はっ、はい。本当に会おうのかわかりませんが…もし、出会ってしまったら僕が吸血鬼の気を逸らしまするのでその隙に狙われている

子を助けて逃げてください。」

ほほう。ちゃんと考えてるじゃないか。俺が魔法使えるって知らないから秘匿にもしないといけないしな。

「ネギ君こそ大丈夫かい？その、吸血鬼というのに狙われても。」

「僕は大丈夫です！なんてたってまっ…じゃなかった。こうみえても身体は丈夫なんです！」

「そうか。まあ、余り無理しないようにな？何かあったらこのお兄さんに頼りなさい。」

「あつ、はい！ありがとうございます。如月さん！」

「クラスメートを守るため、おやすい御用さ。…ところで、俺とネギ君のデートなのに何故キミがいるのかな？寧君。」

俺の右側に歩いているネギ君から顔を外し、左側で歩いている寧を見つめ言葉を発した。

「洗ちゃんのいる場所に私あり！ってね。昨日はまき絵が襲われたんだもん。友達として放っておけないよ。」

「で、でも。危険なんですよ？蘆江さんは帰ったほうが…。」

おい、ネギ君。俺なら危険でも別にいいのか。まあ、いいけどさ…。

「大丈夫だよ、先生。いざとなったら洗ちゃんが助けてくれるもんねー？」

完全な信頼を持たせた瞳が俺を射抜く。こいつ、元の世界から並みの人間より強いのに…。

「はいはい。守る必要があったらその時は守らせていただきますよ。」

「何それ、ひどーい！」

3人で笑って歩いていく。暗く行くよりかはいいよな、うん。

敷地内をくまなく探していると…並木道の方から微量の魔力の波動を感じとった。それとなくネギ君を誘導して…エヴァと襲われている宮崎の姿が！

「なんて羨ましい…。俺も美少女を抱擁したい…。」

「洸ちゃん声に出てるよ。というかそんな事考えてたの？」

じろりと睨む寧。くそっ、まさか俺の心の声が心という概念を飛び越え音声として具現化するとは…。

「こらー！やめなさい！」

ネギ君が声を張り上げてエヴァに近づいていく。そして吸血鬼の姿が見えてくると同時に驚愕の顔へと変化していく。そう、犯人がエヴァだと気づいたんだ。

「貴方は僕のクラスの…エヴァンジェリンさん？」

「坊やか…。ん？後ろにいるのは…は？」

エヴァもネギ君に気づき…そして俺たちの姿を見つけて固まった。

「なつ、なんで洸がこんな所に…！？」

「洸さん、手筈通りをお願いします！」

あいよつとネギ君に答え、宮崎の元へ走り出す。エヴァは俺に何か
いいたそうにしているが、ネギ君が矢継ぎ早に質問しまくるのでこ
ちらに集中できないようだ。

地面に横たわっている宮崎を背負い、ネギ君の下へ再び走り出す。

「救助成功だ、ネギ君。一緒に逃げるぞ！」

「でも、エヴァンジェリンさんは父さんの事を知ってるみたいなん
です！聞かなくっちゃ！」

いつの間にか去っていったエヴァを追いかけるように走り出すネギ
君。おーい、俺おいてけぼりだぞー。

「私なんてもつとおいてけぼりだよー…。」

ボソボソと喋る寧を放っておいて、とりあえず宮崎の安全を確保し
ないとな。俺たちは、宮崎の部屋まで彼女を運び…。

「ちょっと、当分エヴァちゃんの所に帰りにくいよね。」

「そうだな。まあ、金はいくらでもあるから…たまにはホテル泊ま

りでもいいか。」

「やったー！今日は豪華なお食事、外食！」

「俺の手料理は不服だったのか…。」

そして俺たちは宿探しに町へと繰り出した。さて、今後のネギ君とエヴァの行動に注目していかないと。

ヴァンパイアく飾らなくていい傍にいたいだけ今全てを無くしても貴方が欲しい
エヴァと一緒にネギを…っていうパターンではなくネギ君サポート
に回ってみました。

まあ、先に声をかけてきたのがネギだったからなワケなんです（笑
不定期更新となっていますが、頑張っています！

そして、ついにあの計画を実行してみます。こんな不定期の癖に更
に自分に負担をかけてみる！

つ　サモ小説始めました。サモンナイトくロード・オブ・ナイトメ
アく

こちらもどうぞ宜しくお願いします。

すいません、最近スレイヤーズみてm（ry

殺したから殺されて、殺されたから殺して…それで平和n(r y(前書き)

長らくです。随分間を空けましたが、新作です。もうすぐPVも50万に…。ユニークも約6万！皆様には本当に感謝しております。

殺したから殺されて、殺されたから殺して…それで平和n(r y

次の日、学校に登校したら…めっちゃエヴァに睨まれた。というか、休み時間に呼び出しをくらいました。こわっ!?

「おい、コウ貴様。一体どういっつもりだ?」

凄みのある顔で睨まれている。視線で人を殺せるなら、俺もう死んでるよ…。

「どういっつもりとは一体何のことでしょうか!」

「とぼけるな? 貴様が昨日、坊やの隣にいたのはわかっているんだからな? というか目が合っただろうが!」

ぐっ、ぐむう…。そうはそうだが。

「ネギ君に、一緒に見回りをつて誘われたからさ。だから一緒にいたんだよ。」

「坊やにだと? 奴め、私のモノに手を出すとは…。」

「いや、別にエヴァのモノじゃないよ? 俺は。」

何かを考えている様子のエヴァ。はあ、と一息ついてから俺を見た。

「まあ、いい。兎に角私の邪魔はするな。」

なんか、カチンとくるな、その言い方。

「邪魔をするなといわれてもな。エヴァの目的がわからない以上、何が邪魔なのかはわからないぜ?」というか、俺に命令をするな。」

そうだ。何で俺は俺の道を決定されねばならんだ。キツとエヴァを睨め付け言葉を走らせる。

「いいか、エヴァ。一ついっておく。俺はな、雲なんだ。雲のように自由に生きる。人に敷かれたレールに沿って動くななんて堪ったもんじゃない。俺は自分の思いの通りに動くだけだ。いいか? お前のいつてる事は忠告じゃない、命令なんだ。そんな事で俺を動かせると思ったら大間違いだぜ?」

言う事を言った後、颯爽と背中を向けて歩き出す俺。そんな俺の背中にエヴァが言葉をかけた。

「ふん、信じるのは自分だけか。その性格、嫌いではないが今は疎ましく感じるな。この裏切り者め!」

裏切り? 何をいつてるんだこいつは? 問うてみようと思い、振り返るが既にエヴァの姿は見えなかった。なんという速さだ…。

「ねえ、洸ちゃん、気づいてる?」

教室に戻つてくると寧が話しかけてくる。気づいてる…? なんの事だろうか?

「朝からネギ君がエヴァちゃんを意識的に恐がってる。昨日、私た

ちが逃げてから原作通りに吸血でもされちゃったかな？」

そういえば、今日のネギ君のエヴァを見る表情はこわばっていた。それ以上にエヴァからの視線で強張っていた俺はそんな事も気にする余裕なんてなかったわけだが。

「クラスの皆も心配してる。やっぱりこのクラスの子は敏感だねえ。」

はやい事この騒動も終わりにさせないとなあ。

「そうだな。元のクラスの雰囲気に戻さないと。吸血鬼事件、ネギ君の態度と…皆を不安にさせているモノが多いからな。」

寧はそうだね。と言葉を告げ、またクラスメートの所に戻っていた。溶け込んでるよなああいつ…と思いながらも、今は主人のいない隣の席を見つめ心配を試してみる。

「（無茶なんかしないでほしいもんだがな）」

俺の心の声は、音をする事なく虚空に消えていった。

翌日、今日もネギ君がビクビクしながら学校に来ている。エヴァは…来てないか。放課後になってもネギ君の態度が変わらない事から、クラスの中ではネギ君を元気づけよう！という計画が立っているようだ。多少は元気になってくれればいいが…。しかし、ネギ君。パートナーを探している事を口に出しちゃだめだろう…。雪広なんてそりゃもう…。

その晩、ホテルに泊まっている俺に、侵入者在りとの報告が届く。

何者かと探しにいくとすると、隣の部屋にいる寧がノックをしてきた。

「この侵入者は、きっとカモ君だね。」

カモ？…ああ、あのオコジヨの事か。となると、だ。

「うん、ネギ君の行動を見ておかないとね。茶々丸さん壊されたら…もう茶々丸さんのご飯が食べられないもの！」

ん、ん？なんか動機が不安なんだが…。まあ、あのオコジヨがやりすぎないかどうかだけ観察しておかないとな…。もし、行き過ぎる様であれば…『アレ』を使って服従させるしかないな…ククク。

そして二日後。いつも通り異変がないかを探知している所…魔力の変動を感じた。魔力の変動の位置の元へ向かうと俺の目にネギ君と明日菜が映った。何かと対峙しているようだが…彼らの視線の先を見てみると茶々丸の姿が見えた。なるほど、分断している所を叩くというわけか。やはりオコジヨ、一度話し合いをしないといけないようだな…。しかし、ネギ君よ。一生懸命で前が見えていないのか…？確かに、戦争ではその手の手段は使用するが…。と、こんな分析している暇はないか。ネギ君が魔法を打つ前に止めないと…つてもう魔法の射手を打つ手前じゃん！間に合え…！俺は今、魔法の速度をも越えてみせる！

「魔法の射手！！」
セリエス・ルーキス
「光の3矢！！！」

っし、間に合った！突如現れた俺の姿に茶々丸が吃驚した表情でこちらを見ている。俺はそれにニコリと笑いかけ…。迫り来る魔法の射手に向けて片手を挙げ、軽く魔法盾シールドを放つ。俺の目の前に透明な盾が生じ、魔法の射手を打ち消し…。と思ったんだが。

「（ちよつ、予想以上に魔力が高いぞネギ君！？）」

パーン！と音を立てて碎ける俺の魔法盾シールド。うはー。俺も平和ボケしたかなー？油断は禁物って事だよねー！？打ち消されなかった魔法の射手は当然の如く俺に向かって飛んでくる。後ろには茶々丸がいて避けれない…。これは当たったら痛いってもんじゃないぞ！？

「うおおおお！？」

瞬時に魔力を集中させ、左手に宿らせる！そのまま魔法の射手に向けて…。魔法を放つ！

大きな轟音を立てて爆発が起こる。茶々丸はもちろん無事だ。明日菜やネギ君は青褪めた表情を浮かべている。そして俺は…。少しづつ煙が薄まっていく中…。左手は千切れ、血まみれの俺の姿があった。

ネギ side

カモ君にいわれ、気が動転しまいつい魔法の射手を撃ってしまった。直前で軌道を反らそうとしたんですが…。間に合わず直撃してしまいました。あわわ、僕は一体なんて事を…。正義の為とはいえ…。隣にいる明日菜さんも動揺しているみたいです。

「ちょっと、ネギやりすぎなんじゃないの!？」

「ぼっ、ぼくもそう思ってます…。」

で、でも。エヴァさんは悪の魔法使いであって、父さんの情報も知ってて…。だからどうしても聞かないといけないのに。

煙が薄れていく中、茶々丸さん以外にももう一人誰かいたという事がわかりました。そして、その人は…。

「ねっ、ねえ？あれって…洗じゃないの？」

震えた声を出す明日菜さん。慌てて見て見ると…左手がない血まみれの洗さんが確かにそこにいました。

洗 side

やつべー！超いてー！まさか暴発するとは思わなかったぜ。ネギ君の魔法自体は瞬時に打ち消す事ができたんだが…自分の魔法で傷つくとは思わなかったぞ。

簡単に現状の説明をすると、拳銃を撃つ際に筒先に詰め物がしてあると行き場のない火薬混じりの風が圧縮して爆発を起こし、使用者を巻き込む…と一緒の様な事が起きたわけだ。

ようするに自分の魔法でこんな惨事になったわけだ。流石は俺の魔法…。あんな瞬時でもナギクラスの魔法を放ちまったな、うん。しかし、これは好都合だ。魔法はこれほど殺傷力を持つてるから注意して使おうねー！っていうアピールをしておこう。

「ネギ君…。いたい。」

そう声をもらすと更に涙を浮かべる向こう側の二人。そういえば明日菜もいたな…。ごめんね

「ネギ君は茶々丸を殺すつもりか…？自分の、大事な生徒じゃないのか？」

「そつ、そうですが…でも、父さんの事を知りたいんです！」

ナギ…。お前の息子とはとてもなくファザコンになってしまったよ。魔力だけはお前譲りだけど。

「そうか…。じゃあ茶々丸を殺すといい。今の俺よりヒドイ状況にさせてみればいい。確かに、そうすればエヴァの戦闘能力は落ちるだろうな。だが、この状況をクラスの奴らが知れば、君に手を貸してくれると思うか？エヴァに手を貸す奴も出てくるだろう。そうなったらまた、その子を殺すか？…そしてまた恨みが募ると。良く出来た出来レースだ。最高だとは思わないかい？ククク。」

更に青褪めていくネギ君。もうチアノーゼみたいじゃないか。とりあえず酸素を取り込め。だが、ここで終わらない！まだ俺のターン！

「まあ、もう一つ言うなら、生徒に手を出すもんじゃあない。君は教師なんだ。教師というのは生徒を守る、育てる為に存在するんだ。手を出す為にいるわけじゃあない。わかるか、ネギ君？」

最後の問いかけは笑いかけてそう問いた。そして笑顔のまま…

「今は、ゆっくりと考えてみるといい。じっくり考えて、物事を進めるんだ。さあ、今日は帰るんだ。誰にも見つからない内に、ね。」

明日菜、ネギ君を連れて行け。」

「で、でも！あんたその怪我は！？」

「心配するんじゃない。いいから行け。」

俺が残った右手でしつしと手を振ってやるも、動かない明日菜。つたく、律儀な奴だな。

「いいか、明日菜。今、この場でネギ君を支えてあげられるのはお前だけなんだ。このままではネギ君は立ち直れなくなるかもしれない。そうなつてはいけないんだ。だからここは言う事を聞いてくれ。聞かないのなら、俺がこの場を去るからな。」

そういつて右手で左肩を押さえ…おぼつかない足取りで動こうとした所、茶々丸が手助けをしてくれる。

「ん、ありがとな。茶々丸。」

「いえ、マスターの大事な人を…。私を守る為に申し訳ありません。」

気にすんな。と笑いかけ、茶々丸に導かれるように歩いていく。このままいくとエヴァにあいそうだが…まあ仕方ないかな。

俺たちが去ったその場には、呆然と悲しみを残した二人がいつまでも座り込んでいた。

殺したから殺されて、殺されたから殺して…それで平和n(r y(後書き)

というわけで重症になりました。

やはり何事も起こってみなければわかりません。というわけでこんな風になるんだよー！という意味合いでダメージを受けてみました。

現代でもそうですが、煙草は身体に悪いので気をつけてください。
格好いいから、なんて理由で吸うもんじゃありませんよ？肺癌…苦しいんだよ。

感想・助言・訂正お待ちしてます。

初めての魔法（前書き）

皆さん、メリークリスマスです！

初めての魔法

そして俺たちは、エヴァの家に。

「ただいま、戻りました。マスター。」

「ん、遅かったな……ってなんだその血まみれの男は。」

キツと俺を睨むが、俺からなんの抵抗もない事から動揺が走った様子。

「……ん？ちよつとまで、なんでお前がこんな重症なんだ？お前相手にここまでの怪我をおわせる奴など……。」

実はマスター。と茶々丸が事の説明をしてくれた。俺はその間ベツドで休憩。自分の魔力が暴走したからか当分ともに魔法が使えなさそうだ。治癒魔法使おうとしたら全身に激痛が走るんだもん。

「茶々丸を助けた……？お前、なんで私を裏切ったのにそんな事を……。」

「なんだよ、裏切ったって。」

「だって、お前は奴の息子の方に！」

やれやれ、何いってるんだ？このロリ吸血鬼は。

「俺は別に裏切りなんてしてないだろ。俺は好きなようにするっていっただけだ。今回だって、茶々丸が危険な目にあってたから助け

「たんだ。」

「こちらが身体が痛いつてのに…一々説明をさせるんじゃないよ、全く。」

「そつ、そうか。裏切つてないならいいんだ。それより傷は治さないのか？お前は治癒の魔法も使えるのだろう？」

「普段なら使えるんだが、どうやら今は魔力回路がズタズタになってるみたいだし…変に魔法を唱えると激痛が走るからやらない。まっ、その内生えてくるだろ。」

「千切れた肩から光の様なモノが発生しているから、自動回復をしているんだろ。ため息をついて首を横に振った俺に、エヴァは少し心配そうな顔を見せる。どうやら誤解も解けたようだ。少しずつ前の空気が流れていつているようだ。」

「しかし、それにしてもあの少年がこのような手段を用いるとは…。」

「当たる寸前で思いなおしたかもしれないが…。その前に俺が出ちやったからなあ。一応説教はしておいたからさ、少しの間時間をあげてやってよ。」

「お前がそついうなら、仕方あるまいが少しの間様子を見るとするか。」

「洸様、私は壊れても直ります。しかし、洸様はそついうわけにはいきませんから…今度は気をつけてください…。」

あっけらかんと話す俺に、茶々丸が近づいてきた。

「気にするなっというたろー？お前さんには世話になってるし、助けれるのなら助けてやるさ。…なあ、茶々丸もそろそろくだけでもいいんじゃない？いつまでも様づけなんて他人行儀な！」

残っている右手で茶々丸の頭をガシガシと撫でてやる。私のモノを誑かすな！と横でエヴァがいつている気がするが、気にしない。

「マスターよろしいでしょうか？」

「ふん、こいつが良いと言っているんだ。好きにしろ！」

「では、旦那様と…。」

「飛躍しすぎだろーっ！？」

俺と幼女の驚きの声が辺りに響き渡った。

翌日、学校は休んだ。流石にこんな状態で学校に行くわけにもいかんしな…。前と変わらずエヴァの家にて居候：なんか情けない男じやあないか（笑

んで、学校で俺がいない事を確認した+茶々丸に話を聞いたのか俺がエヴァの家で居候しているのを知った寧が学校を早引きして俺の看病をしている。事情を聞いた際になんかヤバいオーラが出ていたが：なんとか落ち着いてくれた様子。あのままだとネギ君に何をするやらわからなかったぜ。ん…？寧…か。

「なあ、寧なら俺の腕を治せるんじゃないか？」

「え？うーん、どうなのかなあ？。私、魔法って使ったことないんだよね。」

「俺も初めてここに飛ばされた時はドキドキしたけど、使ってみたら意外とできるもんだぜ。良い機会だな、ちょっと使ってみるよ。」

そう言いながら俺は上の服を脱ぎ肩口を寧に向けた。傷口を見て「うひゃー、グロいよ！洸ちゃん！」なんて言う寧に対しては苦笑を返しておいた。

「えっと、回復魔法ね…。そういえば洸ちゃんは何の魔法を使ってるの？」

「俺は、基本的にはBASTARD!!の魔法を使ってる。他のモノは中々思いつかなくてなあ。」

「洸ちゃん好きだものね。じゃあ私もBASTARD!!の魔法をスイルヴェン・マウンティア主に使っていいのかな。っと、そうになると…白銀の癒し手かな？」

スイルヴェン・マウンティア白銀の癒し手か。原作での能力は…対象の如何なる負傷も完全治癒させる奇跡だったな。まあ、対象は一人であるが…。こちらの場合ファ・イート金色の癒し手と違って、術者が死ぬ事はない。高レベルではない者が使用した場合は大きな負担がかかるが…まあ、寧なら大丈夫だろう。

「そうだな、頼む。」

寧はうん、と頷くと声を走らせた。

「慈悲深き方癒しの神よ 聖し御手を以ち示したまえ 人の血は血に 肉は肉 骨は骨に白銀スィルヴェン・マウンティアの癒し手」

スベル
呪文を唱えながら俺の傷口に手を添える。傷口にチリチリと痛みを感じるが無言でそれを耐える。俺の肩に光の粒子が集まりだす。その粒子はなくなった筈の左腕の形を模していき…数分後には俺の左腕として具現化した。

「…ふう！終わったよ、洸ちゃん！加減はどう？」

自分で復活した左腕に触れてみる。…確かに俺の腕だな。ぶんぶんと振り回してみるがなんともない。魔法はどうだ？魔力を集中してみる…うん、大丈夫そうだ。

「おっけー。大丈夫そうだ。サンキューな寧。片腕つてのは色々大変だったんだわー。」

左方向に寝がえりうつたらそのままうつ伏せになったりとかバランスも悪いし…大変だったな。

「今回はなんとかなったからいいけど、余り心配かけさせちゃ駄目だよー？クラスの子も心配してたし、私も心配なんだから！」

俺は蘇った左手で寧の頭をポンポンしながら別の事を考えていた。

「（さて、ネギ君はどう出るかな。原作通りだったら…あれ？どうなるんだっけ？）」

「茶々丸襲撃後のイベントってなんだっけ？」

「んーとね、ネギ君がエヴァちゃんの報復を周りの人にいくのを恐れて逃げちゃって…楓さんと一日過ごすんだよ。」

なるほどな、確かに言われてみればそんなだったな。

「それで次の日にエヴァちゃんの所に果し状を持ってくるのが原作通りだよ。」

しかし、今回は茶々丸を傷つけたのではなく俺だった。ん、一応茶々丸を狙ったわけだから…報復という考えも間違いないのか。エヴァには報復しないようにと釘を刺しておいたから大丈夫なはず。考える時間は与えたぞつと。ネギ君の出す答えを楽しみにしているよ。

「今日、坊やは学校に来て直ぐに早退していったぞ。」

夕飯の時に今日のネギ君の状態を聞いてみた所、そうエヴァが答えてくれた。

「お前の安否を案じたのかもしれないが…茶々丸と私の顔を見た瞬間に去っていったな。全く、困った坊やだ。クックク。」

怖い笑みですよ、エヴァさん。どうせ殺気とか出したんでしょ？

「しかし…昨日の今日だというのになんだ、もう腕は生えたのか？」

今朝、家を出る時にはなかったはずの俺の左腕を見てエヴァはそう

言った。

「いんや、治してもらった。魔力も大きいのでなければ大丈夫そう
だ。大きいの使っちゃうとまた暴走しそうだ（笑）」

いや、笑いごとじゃないだろ！と突っ込みを入れるエヴァ。その言
葉をスルし、茶々丸にご飯のお代わりを頼む。どうやら身体と魔
力の修復に大分力を取られていたようだ。今日は山盛り食える！

「それにしても良く食うな…。どこにそれだけ入るんだ？」

「俺の魔法は体力をかなり使っんでね。魔法自体はそう使ってない
けど傷と自動回復に大分体力を奪われてたみたいだ。だから食う！
食いまくる！食い物と女はいただける時にいっ！グハッ！痛いじゃ
ないか、エヴァ。」

喋ってる最中にエヴァの右ストレートが俺の頬に直撃した。良いパ
ンチだぜ…。

「食事の最中に下品な事を言うからだ。全く…それにしても治して
もらっただと？一体誰にだ？」

「ふふっ、それは企業秘密だ。」

寧の事は別に言わなくてもいいだろう。本人が言いたい時に言うだ
ろっし…俺から洩らす事ではないかな。ちなみに寧は明日菜の所
に行った。俺の事をかなり心配していた様子だったから無事だと言
いにいったみたいだ。

「…女か？」

「は？あ、ああ。まあ、女だな。」

「また女、こいつの周りには女が集まる…。」

なんかブツブツ言い始めたぞこいつ？まあいいや。ブツブツ言っている間に飯食おうっと。

「茶々丸お代わり！」

「はい、もっと食べてくださいね。旦那様。」

「それまだ続いていたの！？」

初めての魔法（後書き）

クリスマスに投稿・・・くっ、クリスマスなんて爆死しろー！

少しずつ始めるリアル（前書き）

皆様かなり遅いですが、あけましておめでとございます。

今後とも、このネギまの世界でやりたい放題！を宜しく願います。

少しずつ始めるリアル

「ふああゝ。」

朝、あくびをしながら居間まで降りていくとそこで寛いでいるエヴァと目があつた。

「どうした、寝不足か？」

「んにや、継続的に左腕がちくちくしてなあ…。気になって眠れなかったんだ。」

先日、寧に治癒してもらった左腕だが…治癒してもらった時は良かったのだが、徐々に痛みが増してきた。やはり完全に治癒はしていなかったようだ。しかし全く魔法が使えないというわけではなく、ダムド爆裂やアンセム銅雷破弾程度なら大丈夫なわけだ。しかし、それ以上の…例えば七鍵守護神等を使用するとなると痛みが走ってしまうのだ…俺の魔法はそんなに燃費が悪いというのか！これからの時代はTNPってか！低燃費、低燃費、低燃費っぴっぴゝ

「ふむ、完全に治癒したわけではなさそうだな。それならば休めばいいというのに。」

ネグリジエ姿のエヴァがそう話す。君、一応男の前なんだが。よく見ると少し惚けた表情をしている。

「エヴァ、ちよつと失礼するよ。」

「なっ…！？」

エヴァの前髪をさつとかき上げ俺の額と合わせる。顔を真つ赤に染め硬直するエヴァ…ふむ。熱があるようだ。吸血鬼も風邪を引くんだな。

「何をするか貴様！」

顔を真つ赤にしたまま腕を振り回す少女。振り回した結果ふらふらとよろめいてしまった。

「つと、これは学校休んだほうがいいのはエヴァの方らしいな。」

俺がニヤリと笑うと苦々しい表情をするエヴァ。そんな彼女を抱き上げて部屋まで連れて行く。

「茶々丸。マスターは具合が悪いご様子だ。俺は学校にいくが、エヴァを宜しく頼む。」

「わかりました、旦那様。」

相変わらずこの呼称は変わっていない。故障かと思ったのでハカセに見せたんだが…The importance fire というフォルダに保存されておりガツガチにプロテクトがかけてあった。無理にこじ開けようとすると茶々丸自体が壊れてしまう可能性が高かったので様子見している。というかもう慣れたよ…。

エヴァをお姫様抱きをしたまま自室まで連れて行きベッドの上に寝かせた。膨れ面をしているが仕方がない。

「それじゃあ、俺は学校にいつてくる…の前に朝食を摂取しなければ

ば。茶々丸！」

「用意は万全でございます、旦那様。」

「なんだお前らのその会話は…。」

エヴァはやれやれといった表情を見せ、目を閉じて見せた。それを確認した俺は、茶々丸が用意してくれた俺様専用朝食（通常の朝食の10倍以上の量）を平らげにリビングへと歩いていった。

ふいー、食った食った。無意識下で自然治癒力を向上させる魔法を使用しているからか腹が減るなあと思いつつながら登校路を歩く。そろそろ寧と合流する頃…おろ？あそこにいるのは…。

「あつ！洸！あんた大丈夫なの！？」

明日菜と木乃香も一緒か。俺の身体をじろじろと眺める明日菜…。

「そんなに見られたらはずかしいだろ？そんなに俺様の美しい裸体を見たいのならそういつてくれれば…。」

「なつ、そんな事誰もいつてないわよ！変態！」

バチーン！と俺の頬を痺れる痛みが走る。俺に平手打ちをした明日菜は顔を真っ赤にさせたまま走っていつてしまった。

「洸ちゃんさいてー。元気そうに見せる為とはいえ女の子にいきなりそんな事しちゃいけないんだよ！」

「洸はん、あれはあかんえ。明日菜も何も言えへんままいってもうたやないの。」

「むう、ダメだったか…。見れない身体じゃないとは思うんだがなあ…。」

「「そこじゃないよ！（やないよ！）」」

そのまま寧と木乃香と3人で登校…教室についた時、空気が違った。なんだこの空気は…！

「「「「洸（敬称様々）！？もう大丈夫なの！？」」」」

そうか、この目は労わる目だったのか…！うう、こんな扱いは復活して以来久しぶりだぜ。俺のお墓に来てたあの子は元気かなー。

「やあやあ、愛しの諸君。今日もご機嫌麗しゅう！一日休んだぐらいでなんだよー？」

俺が笑顔でそう言い、その場でジャンプして見せたりした。すると、おずおずと綾瀬が声を出した。

「“あの” 洸さんが学校を休むなんてよっぱどの事だと、皆思っているのです。」

「おー？”あの”ってなんだ”あの”って。」

「そりゃあもう。超人にゴキリ並のしぶとさをもってむうー！」

そこでまき絵も話に加わってきた。そして話の途中で裕奈に口を塞がれている。

「あははは。洸君、なんでもないんだにやー。」

「なるほど、貴様等…俺様の事をそんな風に見ていた訳だ。いい度胸をしているじゃねーか。」

「出っ、出たよ！洸君の俺様モードが！やばいよ皆逃げろー！」

クラスの中をキヤーキヤーと笑いながら叫ぶクラスメイト。それを冗談交じりに怒った顔を見せながら追いかける俺。…これが平和なんだな、ナギ。俺達が掴んだ未来だぜ。

少し、ほろつと涙が一粒流れたが…気にせず今の時間を楽しむ事にした。

チャイムの音が鳴り、ネギ君が教室に入ってきた。ふむ、どうやら何かを考えたようだな…。前に会った時とは違い良い顔をしている。出席簿をつけながらクラスを見渡し、俺を見つけるとぎよつとした表情を見せたが、直ぐにすつと頭を下げるネギ君。周りは何事かと俺とネギ君を交互に見る…。注目されるのは嫌だな。

「ネギ君。エヴァは体調不良で休みだ。一応茶々丸から連絡がいつていると思うが、な。」

「あつ、さつき学校の方に連絡があつたみたいです。」

「そうか、そいつは重畳。出席を続けてくれ。」

そう言つて窓の外に視線を変える。今日の天気は恐ろしく良い天気だなあ…。

そのままぼーっとしていたらどうやら午前の授業は終わっていたようだ。あるえー？教師も俺の事そっちのけかよ…。

「洸さん。」

ふと呼ばれた方を見てみるとネギ君がそこに立っていた。恐ろしく顔が真面目じゃないか。

「ん？どうした、ネギ君。お兄さんの何か用事かな？」

微笑を向けると、俺の後ろでご飯を食べていた寧が吹き込んだ。「お兄さんって…お父さんぐらいの年齢じゃない。」…ほっておきたまへ。

「え、はい。えつと…ちょっと場所を変えませんか？」

「良いよ。どうやらネギ君はお兄さんとデートしたいようだね。どこにいくのか？」

「そのネタいただき！」

そついつて席を立つ俺。もちろん手には茶々丸が用意してくれた俺様専用昼食『O・B・E・N・T・O』をしっかりと持っている。そして颯爽とシャッターを切る朝倉…。俺とした事が迂闊だったぜ。

「朝倉。」

「なつ、何？いくら洗君の頼みでもこれは譲れないよ！」

「わかっている。撮ったからにはちゃんと美しく掲載しろ。被写体が俺様とネギ君だからな。」

俺のその言葉を聞いた朝倉は「任せてよ！」といって親指を立てた。相変わらず後ろで笑いを堪えきれない寧が声を出して笑っているのを気にせず、ネギ君と二人で…

「あの、洗。私もついていっていい？」

二人ではなかったようだ。

「俺は構わないよ。ネギ君は？」

僕も大丈夫です。と頷くネギ君。なので三人で教室を後にした。…教室を後にしたはいいが、後ろから「三角関係!？」とか大きな声が聞こえるのは気のせいという事にしておこう。

少しずつ始めるリアル（後書き）

漫画ではへたれなネギ君でしたが少しずつ成長しています。

洗は少しずつDSに近づいていきます。既に日常生活に影響が
…。

成長と理解（前書き）

60万アクセスだぜえ 許定無双伝見てたらつつりました。皆様
感謝です。

私にしては今回、ちょっと長め・・・？

成長と理解

「さて、と。話ってなんだい？」

俺はとりあえず持っていた弁当箱を開け食べ始める。

「あんた、そんなに食べるの？」

「身体を良くする為にはおいしい物をたくさん食わないとね。」

ガツガツと食べる俺を見て明日菜は呆れた物言いをする。うんうん、少し元に戻ったみたいだな。

「お前は悩んでる顔をしているよりそうした顔の方が良いぞ。」

これはこれで失礼か…？と思っていたが明日菜は「あはは、そうね」と笑い返してくれた。

「えっと、それで…」

「おっと、ネギ君の事を忘れていたわけじゃないぞ？」

「はい…。えっと、もう大丈夫なんですか？その、腕の方は…？」

ネギ君。それ一般人に聞く事なのか？普通、腕千切れたら大丈夫じゃないだろう。まあ、俺は普通じゃないから大丈夫だけどさ！

「腕…か。実は…」

「じつ、実は？」

ゴクリと喉を鳴らすネギ君と明日菜。そして俺は…

「なんか生えてきちゃった」

ずてーん！と音を立てて倒れる二人。お前たちお笑いでもしているつもりなのか。

「生えてきちゃったって…まあ、さつきから普通にご飯食べてるもんね。なんかあまりにも普通すぎて気にしてなかったわ。」

「そつ、そういえばそうでしたね。でも、あんな状態だったのにこの数日でここまで回復するなんて…。あつ、あの時はすいませんでした！」

「まーまー。過ぎた事は仕方ないよ。次回の教訓に生かせばいい。それに、魔法は危険なものってわかっただろ？」

俺がそう言つと、ネギ君ははっきりと頷いた。

「はい。今まで当然のように使っていた魔法はあやつて人を簡単に壊してしまうものだと考えませんでした。今も身体能力を向上させる魔法とか使っていますが…とても恐いものだと実感しました。」

「ん、それでよし。まずは自分の持っている特殊なものをちゃんと理解する事が大事なんだ。魔法は万能だ。火は起こせる、水を湧かす事もできる。風がなければ風を吹かせるし、電気が必要なら雷も呼べる。日常で使えるものまで多々ある。しかし、それを取って返せばそれを物じゃなくて人に向ける事ができる。物すら簡単に壊す

魔法を人間に向ければどうなるのか。対魔法防御を使用していれば確かに耐えられるだろう事もあるだろう。しかし、一般の人はそれを持つ術を知ら^{すべ}ない。どんな小さな魔法でも致死と化してしまう。魔法は悪用しちやいけないんだ…大事なものの為に使うものだ。まあ、だから善悪を区別するのに難儀するわけだけだね。双方に自分の思う正義があるわけだから。」

食べていた箸を脇に置き、俺はちよつと長めの台詞を話した。ネギ君の表情は至極真剣で話を聞かたびに頷いていた。理解できてるみたいだね。

「今の俺にとって戦うというもんはそういうことなんだ。既にクラスメイトは俺の大事なもののリストにピックアップされてしまった。俺はこいつらを守る為なら腕が吹き飛ばされようが関係ない。もしも狙う奴がいるのなら…潰す。」

少し殺気を漏らすとネギ君と明日菜もビクツとする。直ぐに殺気を収め、ネギ君を見る。

「キミにとっての正義とは…一体なんだい？」

わかってる。俺自身も甘いとは思う。生徒だからといって非常に徹するのが決して悪い事ではない事を…。ただ、それでは唯の戦争機械だ。目的の為なら何でもする…俺はネギ君をそういう魔法使いにはしたくない。きっとナギもそう思うだろうからな…。

「僕は…今まで漠然とした正義しかもっていませんでした。茶々丸さんを攻撃した事も、カモ君に言われてエヴァンジェリンさんの力を削ぎ今後に繋がると思ったからやったっていうのもあります。」

まあ、常套手段ではあるからね…。敵戦力を削ぐという事は。

「…悪い人にも理由があるというのならエヴァンジェリンさんにも何か理由があつたのでしょうか？」

「ん、エヴァから聞いてないのか？なんでも君のお父さんに呪いをかけられたらしい。」

「あつ、そういえば…。」

「それを解除する為には君の血が必要らしいし…それが大きな理由ではないかな？」

ネギ君は少し考える素振りを見せ…キツと俺の方を見た。

「やっぱり僕は父さんの事を知りたい。でも、その前に僕は教師なんですよね？茶々丸さんもエヴァンジェリンさんも僕の生徒なんですよね…生徒に卑怯な真似はもうしたくないです…洸さんにいわれたから気づいたというのがありますが、あれから悩んで考えた答えでもあります。僕は…エヴァンジェリンさんに正々堂々と戦ってみます。そこで勝てた時に話を聞いてみたいと思います。」

「それでいいんだな？今度は邪魔はしないよ？また茶々丸を襲うならすれば戦闘は楽になるよ？」

「犠牲の上で何かを得る…。それが正義なのでしょうか？僕はそう思いたくないです。戦闘以外で解決できるのならいいんですけど、今回はそれは許されないのでしょうか。それに…」

「それに？」

「…これ以上、洸さんに嫌われたくないですから。」

ニコッと笑いかけられる。犠牲を出したくない、か。甘い考えだが…これは昔のような戦争じゃないんだ。そういった甘さも必要なのかもしれない…ネギ君が俺に向ける顔は何かすつきりした表情で…昔のナギみたいだった。

「ふふふ。そっか。そう言われたなら邪魔することなんて余計にできないな。」

俺も少年に笑みを返す。横で俺の話を聞いていた明日菜も考えがまとまったようだ、こちらもすつきりとした表情でいる。このまま良い感じで終わりそうだ…

「ちよつ、ちよつと待ってくださいよ兄貴！」

「ほあ！？」

「カツ、カモ君！？」

突如、ネギ君のスーツから生物なまものが出てきた。気を抜いていたからか変な声を出してしまった…ちつ、気にせず飯食おう。

「どうしたのよエロオコジヨ。そんな切羽詰まったようにして。」

「姐さんも兄貴もこのいかにも胡散臭そうな男に騙されてますよ！」

おい、俺の事かこの生物なまもの。焼いて食うぞ…ありかも…じゅるり。

「ほら兄貴見てみなよ！俺っちの事みて涎たらしてやがる！」

はっ、俺とした事が…いつの間にこんなに食い意地が悪くなったんだろうか。

「で、でも洸さんはいいい人だよ！」「洸はいい人よ！」

二人がそう言うが、生物なまものは聞く耳持たず…。

「兄貴、姐さん。その良い雰囲気だかのせいか忘れてるみたいです
が…こいつなんで魔法の事知ってやがるんでしょう？」

場の空気が凍った…。あー…そいや俺一般生徒JAN すっかり忘れてた…。

「そつ、そういえば…！洸さん、貴方は一体…」

うひー！警戒心でできちゃったよ！ここで正体ばらすのは面白くないなあ…。

「んー、旅の魔法使いってとこかな。学園長の依頼でここにいるんだが…内緒だぞ？」

「こつ、洸も魔法使いだったのね…だから完璧なのね！」

いや、實力だから。と笑い飛ばしてやると明日菜に殴られた、理不尽だ。

「旅の魔法使い…あやしいつすよ！そもそも…」

「おい生物なまもの：そろそろいい加減にしておけよ」

俺は生物なまものに向かって笑顔を向けると共に濃密な殺気を送った。更に少し魔力を放出してみた。魔力のオーラが可視化して俺を纏い、大気を揺るがし軽く地震を起こす。

「今、この場でお前をデリートしてもいいんだぜえ？前回の俺様の實力だと思ったら大間違いだぜえ？それとも…。」

俺はゆつくりと両手を十字に交差し：魔力を凝縮させる！

「ここで受けてみるか？聖爆クロミング・ロー！！」

十字に交差した腕から極太のレーザー光線：まあ、分かりやすい様に言えば某宇宙生命体が使用するスペなんとら光線に似たものがネギ君の上空を超高速で飛びぬけてき：俺の前方に見える山を吹き飛ばした：クレーターなんて俺には見えないんだからねっ！

「あわわ…」

生物なまものが泡を吹きながらふつと気を失ったのを確認した。ざまあみろ…ん、注目を集めている気がする。

「まっ、まあ。しがないウルトラじゃなかった、旅の魔法使いだ。宜しく！」

「「どがしがないですかー！（よー！）」」

「まっ、まあまあ。おっ！？もう直ぐで昼休み終わっちゃうぞー！お兄さんお腹減っちゃったなあ！さあさあ、早くご飯食べないと昼

から持たないぜ！」

焦ったフリをして急ぎ昼食をかきこむ俺。それを見て、呆れた様子をみせた二人だったが、確に残り時間も限られているのでそのまま食事を始めた。

「あー、それとなネギ君。」

「え？」

食事の最中に話しかけられたネギ君はフォークを咥えながらこちらを見た。

「本当はな、俺にはさっきまでいっていた事をいう資格なんてないんだよ。俺の手は血まみれだから…。だから俺は自分の行いを正義だとは思わない。だけど俺には戦うという道しかなかった…。むなしいけどな。」

ご馳走様、と手を合わせて弁当箱を元に戻していく。

「決闘の申し込みは直接エヴァに言うといい。今なら幸い誰にも邪魔をされないだろう。じゃあね。」

そう言つて、屋上の隅っこに歩いていく俺。

「…ねえ洸。あんたそんな所で何してんの？」

なんだ明日菜…そんなハイライトが消えたような目で俺を見つめるなよ、照れるじゃないか。

「ふつ、見て分からないのか？食後のしえす…痛い。ねえ、明日菜ちゃん痛いよ？おい。耳を引っ張らないでよ、ねえったら。明日菜ちゃんったら。」

俺は食後の^{シエスタ}昼寝をさせてもらえず、明日菜はそのまま「ちくしよー、俺が完全体なら明日菜なんぞにやられやしなかったのにー！」と喚く俺に対して、無言のまま耳を引っ張って教室へと連れて行ったのだった。

成長と理解（後書き）

誤字・脱字等あれば宜しくお願いします。

もちろん感想や評価、お気に入りも大募集してるんだぜえ
いですが、すみません （くど

目覚める何か（前書き）

今回も少し長めです。お待たせ？しましたので！

しかし、何かとやりたい放題しすぎた気がする。

後半部分に意見がございましたので少し変更してみました。感想お待ちしております。

目覚める何か

「ふはははは！いいぞ！坊や！坊やの覚悟：見せてもらっぞ！？」

高らかに響き渡るエヴァの声：そしてそのエヴァから発する濃密な魔力の塊が彼女の目の前にいる少年へと飛び交う。

「うう、僕は…！負けたくない！」

必死で逃げながらも反撃を試みようとするネギ君。

今宵は満月…。数分前よりこの辺り一帯は停電しており、一時的にエヴァの魔力は回復している。そして、今日はネギ君が彼女に勝負を挑んだ日でもあった。

「ん、ネギ君苦戦してるけど中々やるじゃん！」

俺の隣ではしゃぐ寧。今回の戦いを楽しんでいる様子だ。

「そうだな。何かを企んでいる表情にも見える…。さて、何をしてくれるのやら。」

俺達は月明かりが照らす真下…校舎の屋上から彼らの戦いを見ている。エヴァが繰り出す魔法の射手・闇の矢は寸分を違わず彼を狙い、行動不能をさせようと襲い掛かる。

ネギ君はそれを光の矢で相殺する。相殺しきれない分は回避や持参してきた高級　なのだろう　魔法具を手に応戦。遂に校門まで追い詰められ…いや、誘き出したのか？

エヴァ side

ふん、流石にアイツの息子だけあるか。一つ一つの矢が重みがある。それだけ魔力を練れるという事か。これがまだ10歳とは…恐ろしくもあるが、な。だが

「ほほう。確かにここは学園の端…この端から外へは私はここからは出られない、が。そんな逃げ腰で私に挑戦状を持ってきたのか？期待はずれなのかい？」

坊やに対して笑いながら近づくと…足元に違和感が…こつ、これは！？

「くつ、捕縛…結界かつ！？」

どうやら、ここに罠を作っていたようだな…。ふん、こざかしい事を…！

「やつ、やりました！さあ、エヴァさん。僕の勝ちですよ！大人しく諦めてくださいね！」

クッククク、あまいよ。坊や…私は悪なのだぞ？

「茶々丸。」

「イエス、マスター…はっ！」

バチバチ！と音を立てて消える捕縛結界。こんな事もあるつかとお

！…というのは洩がいつか言ってみたい一言であるらしい。…どうでもいいが。

「クツクツ。結界を引いたまでは良かったが…そこから甘かったな坊や。茶々丸にはそれを解除するシステムを用意させてあるのさ。」

「うう…卑怯…！と言いたい所ですが、生徒に手を出すわけにも…ん？何かブツブツ言っているようだが…。これでおしまいか？…残念だ。」

「残念だが、ここで終わりのようだな？では、ここで私の前に…」

「待ちなさーいっ！」

ん？神楽坂 明日菜か？ふん、あんな攻撃等…私に通用「バキツツ！」「つつうう！？！？なんだ！？私の防御障壁を超えてきたぞ！？こやつは一体何者なのだ！？

「くつ、神楽坂 明日菜め…。ここへ一体何をしにきたのだ！？」

「…こいつが頼りないから…助けにきたのよ！」

「アスナさん！！」

「洩のいう事は難しかったからよくわかんなかったけど…でも、私にはこいつの力に成れるんだったら、手助けしてやりたい！そう思ったのよ！ネギも、ちゃんとぶつかりなさいよ！出せる力を出さないで、どうやって勝つのよ！？」

「でも…僕は教師で…エヴァンジェリンさん達は生徒で…」

生徒だと…？坊やの癖に手加減していたつもりか？

「ネギ！あんた挑戦状出したんでしょ！？今のあんたが言ってるのはただの言い訳よ！正々堂々、正面から戦う事を決めたんだったら…全力を出し切りなさいよ！」

坊やに熱く語った後、神楽坂 明日菜はこちらの方を向いた。

「エヴァンジェリンさんも、まともな勝負を楽しみたいんでしょ？…だから、少し時間を頂戴！」

「まともな勝負？クッククク…まあいいだろう。…3分間待ってやる。」

待つときはそうやって言え！と洸が言っていた気がするのでそう答えてやった。坊や達は私から見えない位置に移動し…鮮やかな光があふれ出した。

「ふん…仮契約か。確かに少しは楽しめそうだな。」

仮契約を済ませた二人は再び私の目の前に姿を現し、戦闘態勢を取った。

「いくわよ、ネギ！」

「わかりました…。アスナさん…いきます！シス・メアパルス契約執行 90秒間！
ネギの術者 神楽坂 明日菜…！」

坊やの魔法に対して神楽坂 明日菜の体が淡く光った。

「ネギ！茶々丸さんは私に任せて！…あんたはあんたのやるべき事をしなさい！」

「アスナさん…はい！…いきますよ！エヴァンジェリンさん！風の精霊！集い来たりて…魔法の射手！！連弾・雷の17矢！！」

「ふん、甘いよ坊や。魔法の射手！！連弾・氷の17矢！！」

坊やが放った魔法の射手を相殺してやる。さて、どうしてくれようか。

「今度はこちらかいくぞ！闇の精霊29柱！！魔法の射手！！連弾・闇の29矢！！」

「え、29…！？ええつと、光の精霊29柱！！魔法の射手連弾・光の29矢！！」

私の放った闇の魔法を坊やが光の魔法で打ち消す。ふん、光まで操るか。まあ、坊やの性格からして真面目に勉強したんだろう。クツ親とは似つかぬものだ。

「くうつ…このままじゃ拉致があかない…。じゃあこれで！来れ雷精風の精！！」

ほう、大技で来るか。ならば…！

「ククツ…来れ氷精 闇の精…！」
ウエニアント・スリーザヤス・レス・オブスクランデース

ニヤツと笑う私の表情を見て、驚愕の表情を浮かべる坊や。いい顔じゃないか。

「おいおい、これは兄貴が使える中で一番の魔法だぜ！？兄貴の奴、勝負にでたな…」

勝負してやろうではないか、坊や…！

ヨウイス・テンベスター・フルグリエンスニウス・テンベスター・オブスクランス
「雷の暴風…！！！」 「闇の吹雪…！！！」

私から出でるは闇と吹雪…坊やから出でるは旋風と稲妻…互いにぶつかり合い、捻れ！火花を散らし！尚も轟音を立てる！

ガガガガガガツツツツツ！！！！！！！！！！

風が凍りを砕き、稲妻が闇を切り裂く…砕けた氷は稲妻を反転させ、闇は全てを包み込む…。徐々に坊やの方へと魔力の塊は押し寄せていく…。まだまだ私には勝てないようだな、坊や！

「くつ、くう…！僕は…負けない…！傷つけたのに、許しをくれたあの人！傷つけたのに、僕に進む道を提示してくれるあの人！表立って…そして影ながら皆さんを支えてくれるあの人、洸さんに…！僕の、僕の力を見せてやりたいんだ…！」

「なっ！？」

坊やの力が一気に…！？あいつを…私があいつを想う気持ち…坊やに負けるとも…？

「今度こそ！これで！はあああああ！！！」

更に…！？押し込まれ…！？

「マスター！？」

均衡を保てなくなった二つの大きな魔力の塊が一斉に片方を喰らう。喰らった魔力はそれを加え、術者に向けて一気に襲いかかった。

ズガガガガーン！！！！

くう・・・！？まさか坊やがここまでやるとは！だが、まだやれる…！この程度の傷ならば直ぐに…

「マスターいけません！」

茶々丸の切羽詰まった声が聞こえる。一体なんだ？と思う暇もなく、周囲に変化が訪れた。

「なっ、何だっ！？」

深淵の闇がこの場を支配していた…その中から一つ、一つ光が漏れ始めた。遠く見てみれば、暗黒に包まれていた都市も次々に輝きを放ち始めた。

「予定より7分27秒も停電の復旧が早いです…！ マスタ
ー！！！」

「ちい！？なんといい加減な仕事を…！！」

慌てて吹き飛ばされた場所から橋のある方へ戻ろうとするも、身体に大きな違和感を感じる…まずい！

「きゃん…！！」

身体に雷を感じると共に、自分の身体から再び魔力が封じられているのがわかった…。まずい、このままでは湖に落ちてしまう…。全く碌なものではないな…。坊やはさっきの魔法で力尽きたか…。ふふ、どうしたものかなあ？

「エヴァアアアーーーー！！！！！！」

あいつの声が…聞こえる。ずっと昔にこんな…同じような事があったなあ。私と、お前の…最初の出会いの時に…

洗side

ぬおおお！？やっべえ！！後半から真名や刹那、楓達も合流してしまい…少し談話をしている間に停電終わっちゃった！ふと戦いの場を見てみると…バシユ、と激しい音と共に、エヴァの身体に雷光が走ったかのように見えた。見る見る内に消えるエヴァの魔力…

「ちよつ、洒落にならないじゃねーか！天翔 ワックオー 黒鳥嵐飛 レイ・ヴン！！！！」

俺は屋上を一瞬の内に駆け、明かりが灯った夜空へと飛翔し魔力をフル稼働して一気にエヴァの下へ飛んでいく。ネギ君は…先ほどの戦闘で魔力を大分失ったか、動けないようだ。こうなれば意地でも

俺様がイクしかねえ！

「エヴァアアアアーーーーー！！！」

急激な魔力の放出に身体が軋みを訴えるが、この際そんな事はどうだっていい。とにかく間に合わせなければ……！！

「俺様の後方に……ちよびつと爆裂^{ダムド}！！！」

後方で小規模な爆発が起こり、俺のスピードは更に加速する。そしてエヴァの真下まで行き急停止する。身体に更に負担がかかり、多少顔を歪めてしまったが……無事にエヴァを抱きかかえる事に成功した。

「よう、無事か？」

痛む身体を無視してニカツと笑いかけやると、エヴァは少し頬を赤らめながら答えをくれる。

「おつ、お前……急激な魔法は身体に……」

俺の求めている答えではなかったが、喋れるって事はとにかく無事なわけだ。

「阿呆、あのまま落ちてたらエヴァみたいな少女は大怪我するだろうが。」

「……少女……いうな」

おうおう、照れおつて。頭側にある手でエヴァの頭をガシガシと撫

でてやる。「やつ、やめないか…」という声はスルーしておく。しかし、このままの格好では少年の健康にも、エヴァの羞恥心にも悪いな…。非常時か、仕方ない。俺は懐から一枚のカードを出す。

「ん？それは…私のカードか？」

「ふふつ、アーティファクト…『ファンタズマゴリア』…毛皮のコート」

俺がカードに魔力を込め…毛皮のコートを想像する。すると、目の前に毛皮のコートが出現した。それをエヴァに被せる。

「おつ、おい！今は…なんだ!？」

「これは、幻想さ。現^{うつ}に存在するの^うか、それとも夢の中に存在するの^うか…。それは誰にもわからない。総^{ソウ}じて幻想…俺の^{ファンタズマゴリア}とっておきさ。」

「とっておき…だと…？」

「とりあえず、ネギ君の所へいこうか。茶々丸も心配しているだろうし。」

「あつ、ああ…。」

納得してなさそうな表情を浮かべるエヴァを無視し、そのまま橋へと降り立つ。

「マスター！ご無事で…。」

「う、うむ。洸が文字通り飛んできた。」

「女の子を救うのは男として当然だからな！」

ガハハハ！と笑う俺に尊敬の目で見てくる子が一人…。

「こっ、洸さんってスゴいんですね！」

「おゝ？ネギ君も今回頑張ったじゃん。始祖相手に勝っちゃったもんなあ？」

お姫様抱っこをされ、俺の腕の中で頬を赤らめているエヴァに向かってニヤニヤしながらそういつてやると拳が飛んできた。

「さっ、さっきは油断しただけだ。私が本気ならば負けるはずなからう！？」

「はいはい、負けて残念でちたね！」

殴られながらもニヤニヤして頭を撫でる俺に、またも怒るエヴァ。

「エヴァンジェリンさんも洸にかかれば本当に女の子なのね…。」

「エヴァは本当は優しい子なんだよ。今回は事情が事情だったし…。だから、嫌いにならないであげてく」余計な事をいうんじゃない！「フゴツ！？…痛いじゃないか。」

俺とエヴァが漫才をしている中、ネギ君がオズオズと俺に声をかけてきた。

「あの…洸さん。僕、頑張りましたよ。」

「ん？…そうだな。正々堂々と戦い、勝利したな。勝ちの権利はキミのもんだ。よくやったよ。」

エヴァをそつと降ろし（何故かとても睨まれたが）、ネギ君の頭をぐしゃぐしゃと撫でてやる。…おい、何故頬を赤らめる？

「おい、洸。その坊やから離れる。何か嫌な予感がするぞ。」

俺もそう思う。すつと手をどけると（何故か悲しそうな顔をされたが）、エヴァの隣に戻る。

「そういえば、この前エヴァンジェリンさんの記憶を見た時の話なんですが…。」

「貴様あ！こんな所でいきなり何を言い出す！？」

ふがー！と顔を真っ赤させたエヴァが襲い掛かろうとしたのでそれを抱きとめる。

「まあ、落ち着けて。んで、急にどうしたんだい？」

「はっ、はい。父さんが…また解きにくるって言ってましたが…その後にもう一言言ってましたよね？」

「あ？何をいつているんだ貴様は？」

「エヴァ、そんなにイライラしないの。で、ネギ君のお父さんが何をいつてたって？」

「俺が来れなかったら…洸さんに解いてもらえって…」

なっ、あいつ！俺に押し付けやがったのか！？なんてやろうだ…！
！（自分がエヴァを押し付けた事をすっかり忘れている。

「洸に…だと！？むっ…確かにそんな事言っていた様な気がする…
おい、洸！解けるのか！？」

「封印の解除？自分のなら魔力で無理やり解くんだが…アクセプト主命受諾ぐ
らいか？ん…」

「なんだその魔法は？それで封印は解けるのか？それならば「ちょっと待ったあああ！」早…なんだ寧ではないか。」

声がした方を見ると空中で浮いている寧の姿が見えた。なるほど、黒鳥嵐飛レイ・ヴンで飛んできたのか。

「芦江さんも魔法使いだっただの！？」

明日菜が大きな声を出す。そういえば一緒に隠してた…つか、俺ら
って隠す気あんまりないよね！。まあ、ばれてもオコジョにされな
いし！あたいつて最強だし！

「そんな事はどうでもいいの！アクセプト主命受諾？そんなの私が許さないよ
！洸ちゃんの唇は私のものなんだから！」

おい、俺の唇はいつの間にお前のものになったんだ。だが…

「何をいつている？洸と唇を重ねるぐらいしたことが「なああああ

んですってえええ！？」一々うるさい奴だな…。」

なんかものすつごい睨まれている気がする。しかし、ネギ君。キミは何故エヴァを睨んでるんだい？お兄さん、何か心配しちゃうよ？

「どどど、どついう事？ねえ、洸ちゃん！私の事が遊びだったの！？」

「いや、遊びも何も手出してないだろ…。」

はい、そこでエヴァも勝ち誇った顔をしないの。

「うあああん！洸ちゃんの浮気者！スレイヤード スレイヤード
バルモル…。」

「ちよつ、おま！お前の魔力で魔法を…！！俺以外魔法使えないじやん！皆、俺の後ろに隠れろ！」

「暗き闇の雷よ！洸ちゃんのばかああ！
バルウオルト 雷撃！！！」

寧の手のひらに急激に圧縮された魔力が…雷と化して俺を襲う！

ダガガガガガッ！！

強烈な程煌く雷線が音速を超えて近づく…！が、俺もそう簡単にやられてやるわけにはいかない。前回のネギ君の時はテンパってたから俺にこんな芸当ができる事を忘れていたのだ…それはっ！

「ふんっ！」

雷という魔力を掴み取る！！バシィィィ！！と音を漏らす、魔力を漏らす事なく掌握できた。俺程の魔法使いになるとこういった芸当もできるのだ！（参照：伯爵戦（笑

「えっ？えっ？」

事情を飲み込めていない明日菜とネギ君は驚きの表情を浮かべている。

「魔法障壁も張らないでどうするかと思えば…相変わらずお前はむしろちやくちやな男だな。ククク…」

笑いを漏らすエヴァ。毎回シールドで防いでも芸がないしね。ちなみに昔、魔力を叩き潰した事もあったなあ。まあ、あれの応用みたいなものだよな。まあ、条件としては俺が掌握できる程度の魔力である事…だが。

「まあ、なんとかなってよかったか。というか、危ないだろうが…」

ポイツと掌握した魔力を橋の下に放り投げる。橋の遥か下の方からバチィィ！と音が聞こえなんだか水かさが減った気もするが気のせいだろう。

「くっ…これくらいじゃ洗ちゃんに効かないのか…それじゃあ次は…！」

次の魔法を唱えようとする寧。そうはさせないと、はあ…とため息をつきながら寧に近づき手を取る俺。その時、頭の上に豆電球が浮かんだ。ピロリン

「やん、ちょっと…離して」

「清らかな処女の接吻ね…。なるほど、俺の代わりがちゃんというじゃないか。」

口を寧の耳元に持って行き、一言呟く。

「そんなに俺が他の女の子と唇を交わす事が嫌なんだったら…代わりにお前がすればいいじゃん。」

「…え？」

頬を紅く染めた寧が驚いた表情でおれを見た。

「俺はキスしなくて済むし…そもそも性別が違うしな？俺とエヴァを救う為だ。頼むよ。」

ぽんと頭に手を置き、頭を撫でながらそう言ってやる。寧は戸惑った顔をしたが…。

「…わかった。冴ちゃんがするよりかはいいもんね。」

分かってくれたようで何よりだ。さてと、エヴァにそれを伝えよう
そう思ったときに「で、でも！」寧から声をかけられる。

「こ、冴ちゃんから、何かご褒美がほしいかなーなんて。」

上目遣いをしながら寧がそう呟いてくる。俺の中の何かがざわめき立つ。

「（俺は…オレ様は食い物と女は…食べる時に喰っちまう主義だろ
うが　　…!）」

そうか、この世界に来てから女の子に近づかれた時にたまに違和感
があった。その正体は、俺の中のオレが満足していなかったのかっ！

さつと、空いた手で寧を抱き寄せる。「あつ…」と寧が声を漏らす。

「ちよつ、洸ちゃん！？ご褒美は欲しいって言ったけど、こんな所
で！」

「ふふつ、カワイイ声を出すじゃねーか。寧…全部上手に行ったら、
ご褒美をやるっ。」

寧の前髪をさつとかき上げ、額に口を添えてやる。ちゅつ、と音を
立てて離れる。

「こつ、洸ちゃん！？もつ、やん！」

「よし、それじゃあ始めるぞ…っってお前ら何してんの？」

ネギ君達の方を向くと…

ネギ君は驚いた表情をしている。君はつい先ほどその女子中学生
と唇を交わしただろ。そしてオコジョは何を興奮している。

赤らめた顔で別の方向を向いている明日菜。だからキミは（以下同
文）。今更他人の、しかもデコチューぐらいで赤くなるな。

目が尋常じゃないぐらいなんかコワイエヴァさん。お前さんの為に
してるんだがねえ…。

無表情の茶々丸。なんか。なんか色々な事を計算してそうないん

き（何故か変換できなかった）だ。

なんだこのカオスな空気は…こういう時は…

「…へけ」

某小動物のモノマネをしてみたんだが…。誰にも聞いてもらえなかったようだ。

「…まあいい。おい、その人様を視線で殺せそうな幼女。こちらへ来るんだ。」

「くつくつく、私の事か？いいだろう…」

妖しげな雰囲気醸し出してゐるが…まあ、いいだろう。

「解けるかどうかはわからないが…寧が使える解除の魔法を使うぞ。用意はいいな？」

寧の言葉を出した時に嫌そうな顔をするエヴァさん。

「貴様ではないのか？何故その小娘とせねばならんだ。」

「使い手の条件ではあるが…『清らかな処女』っていうのがあってな。俺には該当しないんだ。ただ、寧ならそれを使うことができるはずだ。」

「洸ちゃん地味に酷い事を言ってる気がするよ？まあ、事実だけでも…。」

「まあ、エヴァも封印が解ける可能性があるんだ。キスぐらい気にするんじゃない。」

そう言うと、ふん！と顔を背け寧の方を向くエヴァ。全く…。

「さあ、寧。始めてくれ。」

「ん、わかった。主命を受諾せよ」
アクセント

寧が呪文^{スベル}を唱え始めると寧とエヴァを光が包み込む。そしてそのまま歌を歌うかの如く紡ぎ始める。俺は今使用できる範囲内の魔力でサポートを行う。

「最愛なる美の女神イーノ・マータの名において 封印よ 退け」

呪文^{スベル}を唱え終わり、エヴァと唇を重ねる…と、そこから先ほどより比べ物にならない程の光が溢れ…エヴァの身体から黒いもやが抜けて出たのが目に見えた…。

目覚める何か（後書き）

というわけでネギ君が覚醒（色々な意味でも）・・・と見せかけて
洸の何かが目覚めています。心の声…そう彼は…まあ、ご想像にお
任せします。

アクセプトについては色々と思いますが…私はエヴァと京都
に行きたかったのだ！だから、こうした！批判はとも受け入れる
が、具体的に言ってくれるととても嬉しい！

ご意見・感想お待ちしております。お気に入り、評価も絶賛受け入
れ中！

いざ、行かん。京都の街へ

「おい、なんだこれは…？」

俺達の眼前を覆う鬼の群れ…そしてその奥には異形の魔物が見える。明らかにここにいるべきではないはずの存在。形状としては丸い…と称していいだろう。そこから筋肉質の腕や足が生えているのを抜きにして、だ。そしてその丸いなかの中心には大きな一つ目、その下には、本来の人の顔の形と同じように口がついている。そして中心より更に上には触手の様なものが何本も備わっている。…はつきり言おう。異形すぎる。丸い形状には血管が浮き出ており醜悪である。わかりやすくいうのなら目玉の親父さん + といったところか、簡単に言えばだが。

「ここはネギまの世界じゃなかったのか…？なんで、ここに…ここに！」

放心状態のまましていると、異形のものが何か呪文を唱え始める。そして、紫電の魔力を帯びたところで…こちらに向けて放った。

「ちいつ！？魔法盾^{シールド}！！」

眼前に魔法盾^{シールド}を出現させ、魔法を防ぐ。今は戦闘中なんだ、気を抜いてはならない。…何故こうなったんだろうか。

時は遡る

「昔、京都にナギの使っていた隠れ家があるはずだ。」

先日の戦鬪の翌日、ネギ君達とカフェで出会った。制限はあるものの封印が解けたエヴァはご機嫌の様子。また、ナギが生きてる事も知って更にご機嫌の様子。あれ？いつてなかったか。

「ほんとですか！？でも、京都だなんて…」

「丁度いいじゃない。もう直ぐ修学旅行だしね！」

「修学旅行ですか？それが一体…」

ネギ君がその事実について知るのは数時間後だった。

「なんだ、爺さん。」

修学旅行の前夜。俺は学園長に呼ばれ、学園長室へと足を向けていた。

「今度の修学旅行の件なんじゃが…。」

どうやら、木乃香の奴が狙われているらしい。まあ、あの子は内に巨大な魔力を秘めている…そうだなパンドラの箱みたいなものか？だからあの子の力を欲しがる人間なんて山ほどいるわけか…。詠春の奴も苦労してるんだな。

「ネギ君にやらせてあげればいいじゃないか。いい経験になるんじ

やないか？」

「うぬ。ネギ君には既に西洋魔術師と陰陽師との関係改善の親書を携えた特使として行ってもらう様頼んではあるのじゃ。刹那君にもお願いはしているのじゃが、護衛は多くて損はないじやろう？」

「ふん、俺は高い事を知っているだろうに。見返りはどうするつもりだ？」

爺さんは体の前で腕を組みしばし考える素振りを見せた。ふと、閃いた様に顔を上げ俺に言葉を発した。

「木乃香のお見合い相手というのは「却下するぞ、爺さん。」なんじゃ駄目なのか？」

少ししょんぼりする爺さん。こいつ、何気に冗談ではなかったな。

「俺は構わないが、木乃香の気持ちも大事だろうに。まあ、俺にとつては子どもみたいなもんだけどな。」

昔から詠春の所へ遊びに行く度に良く面倒を見ていたからなあ。しかし、何故刹那は俺の事を覚えてないんだ？小さい頃の話だからかもしれないけども。

「何もなければいつも通り金を戴くぞ？後、修学旅行にはエヴァも連れて行くからな。」

「エヴァンジェリンを？しかし登校地獄の呪いが…。」

「ああ、その事か。」

俺はふん、と鼻で笑いながら「この前の停電の時に解除したぜ？」と伝える。

「なつ、無駄に強力であつたあの呪いを…。流石は英雄殿じゃな？」

英雄、という言葉に少し顔をしかめる。英雄なんて言葉は綺麗であつて残酷な言葉である事を理解しているからだ。そう、人殺しの勲章だ。

「まあ、いい。そうだな、今回の修学旅行中に俺とエヴァが使用する金額の全額負担という事で手を打とうか。」

「ほっ？それぐらいでいいのかのう？お主の事だから、法外な値段を要求してくると思つたのじゃが。」

この爺…。やはり頭の中身を解剖するしかないのか？

「ケケケ。それはそれでいいんだが、さっきも言つた通り木乃香は俺の子どもみたいなもんでもある。それを助けるのにそこまではいらんよ。」

「鬼の目にも涙というのはこういう…。ごっ、ごほん！いや、なんでもないのじゃよ？だから、その手に集めた魔力を拡散してくれんかのう？」

「たたく、くだらない事ばかりいいやがるぜ…。まあ、いい。修学旅行か、良いひまつぶしになりそうだなあ。」

修学旅行当日

「学園外の景色とはこつも美しいものだったか！」

エヴァのテンションが高いなあ。久しぶりに外に出れたし、仕方ないのかもしれないが。

俺の隣の席でエヴァがキャツキャツしている。むう、これが…幼女ゆえの可愛さという奴か。

「おい」

微笑ましくエヴァを見ていたらいつの間にかエヴァににらまれていた。

「ん？どうした？」

「お前、なんかヤバイ空気を出していたぞ？この変態め」

ニヤリと口角を上げるエヴァ。なんだ…と？俺は変態だったのか…。

「旦那様が変態でも、私は一向にかまいませんが幼女趣味というのは些か…。」

「くくつ、このボケロボめ。今、私に喧嘩を売っているな？この、巻いてやる！」

「ああ、マスターいけません、こんなところで！」

俺の隣の席（前の席？）でエヴァがキヤツキヤツしている。（もちろん前回のとは違う意味で）

ふう、とため息をつきながらぼーっとしていると、なにやらクラス
の連中が騒がしい。ふとみてみると、なにやら新幹線内に蛙が大量
発生しているようだ…なにこの状況？戸惑っている俺を置いたまま
事態は刻々と過ぎていた様だ。ネギ君が大きな声を出しながら蛙を
追っていた…あらー、親書盗られちゃったのか…おっちょこちょ
いさん

「相手が蛙だからといって油断しすぎだろうに。」

どれ、助けてやるか…と思ったら既に刹那によって取り返されてい
たようだ。えらいぞ！さつと親書を渡すと颯爽と去っていく刹那。
ネギ君の方を見ると、なんだかカモミールが戯言をいつている
様子。おい、トラブルメイカー。事態をややくしくするなよーと言
いたい、俺が毎回アドバイスをしているのではネギ君の為にはな
らないのでギリギリまで助けない事に決めたのだ。決して遊びたい
わけじゃあない。

「ここが京都かつ！」

相変わらずテンションが急上昇中のエヴァ。まあ、高いのはエヴァ
だけじゃなく…。

「誰かここから飛び降りれ！」

清水の舞台から飛び降りるっていうのはそういう意味じゃなくてだな？ん、なんだお前たち？何故そんな眼で俺を見ているんだ？

「こー君、GOー！」

後ろから強い衝撃を受けたと思うと、俺の体は急激な浮遊感に包まれた。上を向いてみると笑顔でこの先どうなるのかと期待する女生徒達（覚えとけよ）と俺を心配している女生徒（賞賛を授けよう）と別にどうでもよさそうな目線を向けた後、ほかに氣をとられている幼女（金髪）。下を見ると徐々に迫り来る木々の群れ。くそっ…こっという時は…！

「アイ キャン フラアアイ！！」

モモンガの如く四肢を放り出し空気抵抗を味わう！よい子の皆はとても危険だから真似しちゃだめなんだぞおおおお！！！！

「すいませんでした…。」

あの後、空中にて姿勢を整え、見事木の先に止まる事ができた俺は急いで元の場所に戻った。そして酒を飲んでぐでんぐでんとなったている彼女らを捕まえ只今絶賛説教中である。

「俺じゃなかったら超ピンチだったぞ！？」

誰であろうとピンチには変わりねーだろ…と後ろの方で異常な事が嫌いな眼鏡の子が言っているような気がするが、とりあえずここは説教をば…！

「もっと反省しろーっ！」

「はい…」

「全く酷い目にあつたぜ…」

宿に着いた俺達は各人の部屋へと案内された。荷物を置き、腰を下ろすと身体に少しの疲労感を感じた。

「でも、皆さん楽しそうでしたね。」

俺の隣にネギ君が座り、そう話しかけてきた。男が二人しかいない為、教師と生徒という異例ではあるが同じ部屋という形になっていた。

「楽しむのはいいが人に迷惑をかけちゃいかんのさ、これがな。」

「あはは、そうですね。」

ため息混じりに言葉を紡ぐと、それを聞いたネギ君が軽く笑い声をあげる。ネギ君もちょっと変わった…というか、落ち着いたという所か。

「そうだネギ君。ここは温泉があるらしい。ちょっと早いかもしれないが行ってみないか？」

「温泉ですか？是非行ってみたいです！」

眼を輝かせながら話すネギ君…俺にはなんだかまぶしいぜ！

「よっしゃ、行こうか。」

自分の分とネギ君の分の浴衣を持って二人で温泉へと向かうことにした。

「兄貴、あの桜咲刹那ってのはあやしいですぜ」

風呂で疲れを癒し、ネギ君と男同士の裸の付き合いをしている最中にカモミールが何やらほざきおった。

「桜咲さんですか…確かに僕の動きを警戒しているように見えるけど…」

ネギ君は何かを考えるように俯き始める。

「刹那？まあ、警戒はしてるみたいだけど別に悪いヤツじゃ…」

「兄貴、アレを見てください！」

カモミールの指した方を見ると、そこには湯浴みに来た刹那の姿が…あれ？ここって混浴でしたっけ？って、何故近づくネギ君。

「ネギ君、ちょっと待て」

言っても空しく、物音を感じた刹那が一瞬にして距離を詰めてくる。

これはネギ君じゃ反応できないな… ったく。

「誰ですか？不審者であればこのまま潰す… っつ！？」

俺は小声で「ちょびつつ鋼雷破弾^{アンセム}」と唱えてやる。右手の人差し指からでこぴん並の威力のマジックミサイルが輝きを持って解き放たれ、ネギ君のアレを掴んでいる刹那の手を弾いた。

「相手が敵さんだったらいいけど、相手はネギ君だからそこは潰しちゃ可哀相だねえ。」

へらへらと笑う俺を見た後、自分の目の前にいる人物を見た刹那は慌てる姿を見せ、更に自分の姿を見たところで更に困惑としていた。眼福でござる。

「こちらに気づいていたのなら話しかけてくだされば…。」

頬を赤らめつつも警戒心を解かない刹那。何でこんなに警戒されてるんだか…。

「言おうと思ったんだが、ネギ君が先走っちゃってなあ。」

「うう…。すいません。」

恥ずかしそうに笑うネギ君。ネギ君が… とうかカモミールが刹那の事を敵のスパイだと勘違いしているようだなあ。

「刹那、ネギ君達がお前さんを敵のスパイだと思っているようだ。誤解を解いた方がいいんじゃないか？」

え？と素っ頓狂な顔をする刹那とネギ君。おい、こいつら誰かなんとかしてくれ…。

「…というわけだ。」

簡単な説明をするとお互いに納得いったようだ。最近の俺の立場って仲介役？爺さん恨むぞ？…しかし、誤解が解けたのはうれしいが、何故俺への警戒心を解かないのだこのでこ娘は。

「おい、刹那…」

刹那に声をかけようとした所で、脱衣所の方から大きな叫び声が聞こえる。この声は…明日菜と木乃香？

「お嬢様！」

湯からさつと上がる刹那。ネギ君もそれに習い後についていく。俺も…いかなきゃいかんよな？こいつらを守るって思った所だし。

脱衣所に入ると、そこはパラダイス…よりも先に目に入るのは猿の群れ。猿、猿、猿！んー、ここはいつの間に動物園になったのだろうか。

「お嬢様！」「明日菜さん！」

俺がボーっとしている間に救出部隊（刹那・ネギ君）が二人を助けてようと躍起になるが、あえなく木乃香は攫われようと…

「そう簡単に攫われる訳にはいかんのよね。ちょびつつ鋼雷破弾！」

アンセム

でこぴんをする動作を行い、人差し指を弾く。人差し指からマジックミサイルの閃光が迸り、木乃香を連れ去ろうとする猿を一筋の光が撃ち貫こうとした。その猿の前に幾多の猿が邪魔をしなければの話だったが。

一匹の猿はそのまま木乃香を連れ去っていった…。ちょっと油断しすぎたな。もうちょいマジになるか。

「ネギ君。ここは俺に任せて、木乃香を追うんだ。刹那、サポートを頼む。」

「コウさん…?」

「木乃香は俺にとっても大事な人の一人だ。そう簡単に攫われてたまるものか。さあ、行け！」

はい！と返事を残し、後を追っていったネギ君。刹那は俺に頷きを返しネギ君を追っていった。明日菜は…まあ、放っておいてもネギ君を追っていくだろう。

「さて…ちやちゃつと終わらせるぞ？」

俺に向かって多数の猿が襲い掛かってきた。一匹一匹は早いけど、どうも決定力にかけようだ、これがな。一匹ずつ魔力を帯びた拳で叩き潰していく。魔法を使うと宿が壊れるからな…。

「さて、これで…ラスト！」

最後の一匹を渾身の一撃で粉碎する。たかが式如きに時間をとられる訳にはいかない。俺は急いで三人の後を追うことにしたのだった。

遠目に見えるは極大の炎の渦…そしてそれを一瞬で吹き飛ばす強力な嵐。どうやら目的地はあそのようだな…見つけた！ネギ君達が黒髪の女と対峙しているのがわかる。明日菜が女を攻撃…ハリセン？で仕掛けようとするも動く縫いぐるみに邪魔をされている。刹那を見れば、どうやら眼鏡の女に邪魔をされている様子…まだるっこしいな。木乃香に当たらない程度にけん制をしよう。

「レイ・ボウ魔弓閃光矢！！」

上空にて弓を引き絞る動作を行う。手には光り輝く弓が顕在し、狙いをつけて…一気に解き放つ。狙いは縫いぐるみ、眼鏡の女、黒髪の女である。黒髪の女は木乃香を担いでいる為、直接は狙えず傍へと光線を打ち込む事にした。縫いぐるみは光線に触れると同時に消滅し、眼鏡の女は持っていた刀でなんとか防ぐものの光線の圧力を受け気絶している。咄嗟にとはいえ、驚く程のセンスだな…。まあいい、俺は着弾と同時に黒髪の女に一気に近づき、木乃香を取り返す。そのまま回し蹴りを叩き込んでやる。

「悪いが、この子は返してもらうぞ。」

「ガッ！？」

女は勢い良く吹き飛び、背後にあった木に激しく接触した。

「コウさん！」

ネギ君が寄ってくるのが見えた。慕ってくれるのはうれしいが、ここは一応戦場なんだよねえ。

「ネギ君、周囲に敵はいないか？」

「あつ、はい…どうやら、先ほどのコウさんの魔法で消滅したようです。」

ふむ、ならばよし。女の方を見てみると…どうやら眼鏡の女が気付けたらしく目を覚ましていた。

「なつ、なんや…こんな強いガキがいるなんて聞いてへんよ!？」

「ならばどうする?ここで消し屑になっちゃう?」

右手に炎を顕在させる。具現化された炎は高濃度の熱を持ち、距離が離れていようが熱気を感じる程である。これを体内に打ち込んでやれば体内に宿る全ての水分…血液や組織液等が一気に沸騰し体内から焼け切るだろう。

「ひっ!？」

女は驚愕と恐怖に満ちた表情を出し、式神を使役して眼鏡の女と共にこの場を逃げるように去っていった。そういえばあの眼鏡の女は何者だっけ?原作知識は既に薄れすぎて記憶にない。また、寧に聞いてみるか…。

木乃香を抱いたまま、後ろを振り返ると…ネギ君が満面の笑みで抱

きつてきた。気に入られすぎだろう…。見る、明日菜なんて引き笑いしているぞ。

「刹那、今度は離さないようにしておけよ？」

刹那に木乃香を渡す。木乃香はぐつすりと眠っているようで…ん、起きたか。

「おはようさん、居眠り姫様。ご機嫌いかが？」「お嬢様！？大丈夫ですか！？」

「ん…コウはんとせつちゃん…？」

まだ視点の合わない目で木乃香がポツリポツリと声を出す。

「せつちゃん…ウチな？何か夢をみたんえ…。変なオサルに連れ去られてしもつて…そこをせつちゃん達が助けてくれたんや…。」

まだ意識は朦朧としているようだが、別段何かをされたわけではなさそうだ。異質な魔力を感じる事もないし…なんとか無事助けられたようだな。

「お嬢様…良かったです。」

刹那もほっとした表情を浮かべる。二人の間にあった奇妙な違和感が少し拭えた感じがした。護る側と護られる側…と言った所か？二人…特に刹那から木乃香への態度が違和感が大いにあったからなあ。

「とりあえず一先ず一件落着といった所か。」

ふう…と一息つく。今回は別に俺がいなくてもなんとかあったろうが、今後どうなるかはわからないな。さっきの黒髪の女からは微量であったけど異質な魔力を感じた。あれは外道に落ちたモノの匂いだ。何か嫌な予感もするぜ…。

「ねえ、コウさん！」

満面の笑顔で俺に張り付いていたネギ君が話しかけてくる。

「ん、どうしたんだ？」

「もっかい、温泉に入りましょう！」

まあ、今日の所は事件も解決した事だし…休める時に休むのも大事だしな。それに俺は温泉が大の好物なんだ…。

「いいアイディアだネギ君。褒めてあげよう。」

頭を撫でてやるとネギ君は顔を綻ばせた。相変わらず明日菜は引き笑いしていた。

「明日菜も一緒に入るか？気持ちいいぞ？」

「なっ…！」

今日一番の快音がこの一帯に鳴り響いた。

いざ、行かん。京都の街へ（後書き）

お久しぶりです。スランプが続いていたのでちゃんと文章になっ
ているのか不安です。少し長め…ですかね。

激励やお気に入りは受け付けております。これからも宜しく願
います。

罵倒は心が折れるので勘弁して下さいorz

トライアングラー（前書き）

きーみは誰とKissをするー？

三角どころじゃないですが（笑

トライアングラー

「いつつ…明日菜の奴、冗談のつもりだったのに本気で叩きやがって。顔がちよっと腫れてるじゃないか。」

「自業自得だ。」

朝食の席での俺とエヴァの会話である。昨夜、明日菜に叩かれたところがまだ熱を持っててじんじんするんだぜ…。いつの間にこんなに馬鹿力を…？

「そんな事より、今日は奈良に行くそうだ。一緒に周るぞ。」

「ほう？奈良とな。しかし、エヴァと一緒に行動しても俺の事ほったらかしだからなあ…」

「むっ」

そうなのだ。エヴァは周りの物に興味津々過ぎて、最初は見て面白いのだが途中で飽きてるのである。エヴァも自覚があるようで言葉詰まらせてしまった。

「それに、俺がいると何事も気になる事もあるだろう。毎日顔を合わせている訳だし、別に今日ぐらい…」

「うう…コウに捨てられてしまった…」

なんか金髪幼女が泣きながら言っているみたいだ。ここは俺のスルースキルを利用して…華麗にスルーするでしょう。

「まあ、というわけで…茶々丸。エヴァの事は任せたぞ?」

「わかりました。旦那様と離れるのは真に苦しい事ではありますが、命令とあらば仕方ありません。マスターのかわいい写真は私が撮影しますので期待してください。」

「うむ、任せるぞ。」

「貴様ら…!!」

怒るエヴァが目のある茶碗を投擲してくる。俺はそれをヒラリと華麗にかわしてみせる。ふふつ、当たらなければどうという事はない!

「ふははは、今日の俺は赤色のベルトをしているからな。その動きも3倍よ!」

「何を意味のわからぬ事を…!くらえ!」

次々と飛び交う食物。むつ、この漬物おいしいな。つと、魚は骨に気をつけてつと…

「うまい、うまいぞおー!」

「黙れ!」

その不毛な争いは、エヴァが疲れるまで続いた。途中から御腹がいっぱいになったので投擲されてきたものは全て茶々丸が回収し、折り詰めにしていった。これでお昼も安心だな。

しかし、エヴァと別れるとなると……どこのグループと一緒に過ごすかな……そう思っていると、俺の背中に何かが突進してきた。んあ？なんだ？

「こー君、今日の行動する人決まってるんだったら私らとどう？」

ん、裕奈だったか。このクラスは体当たり癖でもあるのか？まあ、担任からして体当たりしてくるぐらいだからな。

「んー、俺的にはどこでもいいんだが……そっちのグループはいいのか？」

裕奈のグループを見ると、まき絵、和泉、大河内の4人グループ。そういえば結構一緒にいるもんな。と、油断しているとまたまた俺の体に衝撃が走った。

「だっ、駄目です！コウさんは僕と一緒に回るんです！」

なっ、ここでネギ君の登場だと……！？まさかの出来事に動揺を隠し切れない。表面上では出してはいないけど。

「むむっ。ネギ君と言えどこー君は譲らないんにゃー。」

おい、俺をぐいっと引っ張るな……ってネギ君も引っ張るな。俺の体が真っ二つに裂けてしまう！

「ネギ先生！私と一緒に回りませんか！？」

ここで更なる乱入者が。どこの猛者だと思ったたら宮崎か。いつのま

にか宮崎とのラブフラグを立てているとは…やるなネギ君。

「あつ、はい。でも、コウさんとも…」

「きつ、如月さんも…来てくれませんか？」

何故そこで頬を赤らめて話すよ、宮崎さん？なんだこのデルタスペシャルは！？周りを見てみると、面白そうに…むしろ爆笑している金髪幼女が入れば、一緒に回りたいと期待の眼を向けてくる多数の女生徒。どこに行ってもいいけど、私は問答無用についていくよ！？という眼をした妹分。俺に味方はいないのか…。

「よし、わかった。昔の人はこういった時の為に公平な勝負方法を編み出してくださった。さあ、お前達は公平に勝負せよっ！」

結局じゃんけんで勝負を決め、見事勝ち抜いたのは最初に名乗りをあげた裕奈達であった。

「ふふん、正義は勝つんだにゃー。」

「他の子達は悪なのか。」

俺の腕に自分の腕を絡めている裕奈にニヤニヤしながら聞いてやると「たはー。」と言ってごまかされた。

「それにしても、ゆうなってば洸君の事気に入ってるね。好みのタイプって年上だったじゃん！ていうかお父さんか。」

裕奈の隣にまき絵がいて、話の輪に入っている。そしてちらちらと裕奈とは反対の方の腕を見ている……しかし、ここには既に先客がいた。

「ぬふふん。」

もう片方に陣取っているのは寧。こいつも自然とこの位置を取りやがったな……そして本当に着いて来る行動力。まあ、こいつは全員と仲良いから違和感はないんだろうが。しかし、まき絵とバチバチと聞こえてくるような視線のバトルが起こっているのは気のせいだろうか。

「んー、なんだろう？なんかこー君からは父性を感じちゃうっていうかなんだろ？説明しにくい！」

むう、勘がするどい。間違いなく年上です。老けないってのはいいことです。

「あー、分かる！私はおにいちゃんって感じかなー？」

間違いなく年上です。老けない（略

「冴ちゃんモテモテだね。」

隣からはじわじわと俺を睨む視線を感じる。私に内緒で汚らわしいハーレムを作ろうとしていた癖にー！って言われそうだ。バリバリ。

（雷撃の音

「アキラも亜子も、離れてないで一緒に話そうよ！」

まき絵が余り話しに参加していないふたりに声をかける。そういえば、余り話したことなかったか。

「そっいゃ、１年間一緒のクラスだったけど余り話したことなかったっけ？」

ふたりに向けてそう話しかけると、顔を赤らめて応対される。これは中々の新鮮具合。ニヤニヤしてたら寧に足を踏まれた。痛いんだっぜ！

「裕奈とかから話は良く聞いてたんやけど、ちょっと恥ずかしくて

」

「うん。それに見てるだけでも面白かったしね。」

こいつは一体何を吹き込んだんだ。そして、俺は周りからはそんな眼で見られていたのか。ちよっぴりショック。

「にやはは。悪い事は…多分言ってないよ！」

満面の笑顔で言われてしまうと反論ができない。俺も甘くなったもんだ…。

「まあ、良い機会だ。これから仲良くしよーぜ。」

俺がニカツと笑い、手を差し出すと照れながら握手を交わしてくれる二人とも。反応が初々しくてかわいいもんだ。

「さあ、折角の旅行だ。楽しんでいこうぜ！」

おー！と俺と一緒に手を挙げる女の子一同。良い思い出になるといいなっ。

寺巡回中

「鹿がいるよー！」「こー君捕まえて！」

「捕まえちゃいけません！鹿煎餅やるから遊んできなさい！」

わー！と鹿に群れるおにやのこ達。鹿が吃驚してるぞ。

「ふふっ。本当にお父さんみたいですな。」

「んあー？なんだあ。大河内はいかないのか？俺なんかより滅多に見ない鹿を見てる方がおもしろいんじゃないのか。」

そういうと、フルフルと頭を振る大河内。

「いえ、一杯群がっちゃうと鹿も迷惑でしょ？今も、ホラ迷惑そう。」

鹿の方を見してみる。んー、わからん。

「大河内はスゴイな。鹿の雰囲気が分かるのか。」

感心していると、大河内がクスクスと笑い始めた。

「冗談ですよ。如月さんってば、結構かわいい所あるんですね。」

大河内も冗談とか話すんだな。ちよつとした発見かも。まだまだ他の子とのコミュニケーションが足りないって事か…。鹿と戯れている女の子達を見て心を癒されながらそう考えてみた。

「ふふ、やっぱり保護者みたいですね。今、とても優しい目をしてましたよ。」

「ん…そんな目をしていたか？」

「本当かどうかは内緒です」

ニコリと笑うこの子の笑顔にも癒される…。修学旅行って素敵だね
(もういい年のおっさんってというのが玉に傷だが。)

朝と変わらず、裕奈と寧を両手にぶら下げて歩いていると前方に見たことのある赤髪の少年を発見する。向こうさんも少年一人に対し複数の女の子連れ…少年の頃からハーレムってうらやましいよね。と、そんなくだらない事を考えていると向こうさんも俺に気づいたら…し…く…なんか滅茶苦茶な速度でこっちに突っ込んで来るんだが。

「コウさーん！」

両手を掴まれているのでどうしようもない。しかし、甘んじて人間ロケット並みの体当たりを受けたくはない。そう考えていると…

「ネギ君には悪いけど」「そう簡単に洗ちゃんは渡さないよ！」

俺の両隣にいた二人がざつざと突進兵器のネギ君に近づいていき…裕奈が足をかけ、ネギ君がバランスを崩した所を寧が残ったもう一つの足を払った。当然、ネギ君はそのまま…。

「ひぐっ！」

なんか10歳とは思えない呻き声だった気がするが、気のせいだろう。しかし、こいつら容赦ないな…。

「ほら、立てるかい？」

腕が自由になった所でネギ君に手を差し伸べる。片方の手で鼻を押さえながら、もう片方の手で俺の手を取った。

「うう…ありがとうございます。」

涙目になりながらお礼の言葉を紡ぐネギ君。一応、両サイドの娘っ子に注意をしておく。

「こら、子どもだけど…教師だし…んー、でもおもしろいから良しとするか！」

両サイドからイエー！っていう声が聞こえる気がする。ネギ君ごめんね。前言撤回だった

「コウさんもひどいですよう…。」

「悪い悪い。でもなネギ君。折角女の子と一緒に歩いているんだ。ほっというて走ってきちゃあだめだろう？」

「うう… すいませんでした。」

頂垂れるネギ君。まあ、本人もわかっているならそれでいいか…。

「次から気をつけるんだよ？つて、教師にいう言葉じゃないか。」

はっはっは。と去ろうとする俺を何人もの手が抑える。

「洸ちゃんこそ何処にいくのかな？」

寧の眼が恐い…！くそ、うまいこと逃げるつもりだったのに。

「よ、よし。もうココにいる全員と一緒に回ろう！もう、お兄さんこわいよ！」

俺は涙を流しながら全員に訴える。なんとか説得できたのか（後で一人一人誘い出して甘味処にいく約束をさせられたが…。）その日は全員でぞろぞろと歩き回る事になった。

「よし、そろそろ帰るぞー。」

所々嫌な空気になったり、良い空気になったりと状況がコロコロ変わるのを上手にフォローしている内に空が赤く染まり始めた。そろそろ帰らないと俺の身体がもたないってのもあるけどなっ！

「え、えつと… きつ如月さん。」

宮崎さんが声をかけてくる。なんだ、嫌な予感がするぞ…。

「ん？どうしたんだい？」

「ちょっと、お話があるんです…。」

お話…？俺がネギ君と仲良くしてるから説教なのか！？説教なのか！？

「あ、ああ…。いいけど、ここじゃ話せない話なのか？」

「ちょっとほかの人がいると…」

二人きりだと…？！逃げ場がなくなる…が、女の子の誘いを断る等俺にはできない！

「わかった。ちょっと向こうにいこうか。」

周りがガヤガヤしている内に移動をし始める。ちょっと行った先に公園があつた。ここならいいかな？

「よし、話を聞こう。」

「は、はい…」

二人とも無言のまま…なんだ？そんなに怒ってるのか？この雰囲気
が更に恐怖を増す…っ！…圧倒的恐怖っ…！！

「私、実は…」

ざわ…ざわ…

「如月さんの事が好きなんですっ！」

なんだ…と…っ!?

「なんだ…と…っ!？」

あつ、吃驚しすぎて言葉と心の声が同時に出てしまった。

しかし、まさか宮崎さんが俺の事を思っていたとは…。いや、しかし彼に必要な人材じゃないのか彼女は？どうしてこうなった。

「っ!！」

頬を赤らめて去っていく宮崎さん。くそっ、なんてこったい。考えがまとまらないまま、俺も帰路についたのだった。

トライアングラー（後書き）

スランプ舐めるなよ！

3ヶ月ぐらい更新できませんでしたが、なんとか更新！

駄文は相変わらずですが見逃してください^^；

初めてのキスってどんな味？

まいった。全くもって困ったことになった。あの後、宿に戻った俺とネギ君はゆつくりと風呂に入った後にぼけーと部屋で時間を過ごしていたんだ。

激動な数年間を送ってきたからか、こういった無駄な時間を過ごすのはとても気持ちよかった。たまにネギ君の相手をしたりとしていた所で・・・宿を包む魔力を感知した。

「おいネギ君。今、何かやったか？」

「いいえ？ 僕は何もしていませんよ。」

窓から外を眺めていたネギ君がこちらを向いてそう言った。ふむ、気のせいかな？

「そうか、なら気のせいかな。それよりも、中々いい風景じゃないか。」

ネギ君の隣に立ち、空を眺めてみる。夕焼けと暗闇が混じるこの瞬間の風景は絶景に思えた。

「そうですね、美しいですね。」

そうして二人でぼーっとこの絶景を楽しんでいたが、ふとさっきまでの事件を思い出した。

「しかし、ネギ君。一般市民に魔法の事をばれすぎじゃないかい？」

その話をすると、ネギ君は暗い顔を浮かべる。

「すみません、注意を払ってはいたんですが…。」

事件というのはあれだ。朝倉にネギ君の正体がばれてしまった。当然の如く、その隣にいた俺も魔法使いだとばれたので、少し口止めをしておいたから大丈夫だと思うが…。

「まあ、口止めしたから大丈夫だろう。」

「コウさんの、あの笑顔は恐かったです。」

ネギ君が引き笑いするのが見えたが、気にしないでおいた。優しい笑顔のつもりだったんだがなあ。

こうして、ネギ君と他愛ない話をしている陰で原作通り朝倉&am
p・カモミールがネギ君の契約者を集めるための準備をせっせと
しているのに気づく事ができなかった。否、既に覚えてはいなかった。

その夜、突然俺達の部屋の襖が開かれた。多数のクラスメイトが押し寄せてきたのだ！これにはネギ君も俺も吃驚してしまう。咄嗟にネギ君を抱えて窓から飛び降りてしまった。この程度、なんてことのない…清水より余裕だ。

「大丈夫か？ネギ君。」

外に飛び降りて逃げたと思わせて、壁を伝って屋上まで登ってみた。ここなら誰もこないだろう。

「は、はい。しかし、一体なんだったんでしょうか？」

ここでふと思い出す。そうか、あの時感じた違和感は仮契約の魔方阵の魔力だったのか。ならば、ネギ君の為にもここは逃げないでいた方がよかったのかな。

「なんだろうな？さて、ぼちぼちと部屋に戻るとしようか。下に降りたと思っているだろうし、部屋は安全だろう。」

二人で忍び足をしながら部屋まで歩いていく。遠くから新田先生の声が聞こえる事から、もう既に何人が捕まったのだろう。南無…。

部屋まで戻ると、誰もいなかった。これで今晚はぐっすりと眠れる…俺はだが。

「ネギ君、明日は親書を届けにいく日だろう？ゆっくりと休んだ方がいい。」

「そうですね…って、コウさんついてきてくれないんですか？」

「ネギ君のフォローはする約束ではあるが…四六時中俺がついていてはキミの成長に繋がらないさ。危険だったら助けにいくから…まあ、頑張っておいでよ！」

はっはっはと笑う俺に、ネギ君はじとーとした眼で見えてきた。そんな悲しげな眼で俺をみるなよ！

「よっ、よし。今日はお休みだ！」

ネギ君を布団に向かって投げ捨て、俺も自分の布団に入り…睡魔に

直ぐ教われ意識を手放した。

「ね、ねえ。ゆえ…本当にするの？」

「ここまできたらやるのです。生き残りも私達だけみたいなので、皆の為にも頑張るのです。」

ん…？なんか声が聞こえ…ぐはあ！？なにか俺に向かってダイブしてきたぞ！？

腹部の痛みに耐えながら、眼をこすり暗闇の中動く物体に眼を凝らす…。人影…？

「捕まえました。のどか、寝ぼけているうちに！」

のどか…だと？もしや、この状況は…！？

顔をがっしりと掴まれる。目の前には幼ない顔をした少女…。

「しっ、失礼します！」

迫ってくる少女…にはわるいが…！

顔をぐいっと背ける。力が強すぎたのか、少女も体勢を崩してしまふ。

「…ちっ！」

ふと、手をだし彼女を支えてやる。しかし、起き抜けの体では力を

発揮できなかったらしく、自分の体勢も崩れてしまう。

「え…？」

宮崎をかばったまま…倒れる先にはもう一人の少女、そのまま顔が近づき…。

ごっん！

額を打ち合わせた。これはどうも痛い！

「おっ、おい！」

宮崎を横に置き、慌ててぶつかった少女…綾瀬を抱き起こす。ぶつかった所は…ん、こぶもできてないな。よかった。

「ん、ん…」

「気づいたか？ぶつかっちまって悪かったな…でも、元はといえば…」

ぽーっとした表情を浮かべていた綾瀬がそつと顔を寄せてきた。今の体勢から顔を寄せてきたとなると…迎える結果は。

ちゅっ

「なっ！？」

唇が触れ合う事数秒、我に返った俺は直ぐに綾瀬を引き離す。すると、再び顔を掴まれる。今度は一体なん…

ちゅっ

・・・俺は今強姦されているのか・・・（orz 俺の心

二人の少女と唇を触れ合わせた時、魔方陣が作動し…俺たちは仮契約を成してしまった。

「はっ、私はつい…」

我に返る綾瀬と

「あうあう…」

顔を真っ赤にして照れる宮崎と

「zzzz…」

隣でそんな事が起きてるのを知らずにぐっすり眠るネギ君と

「なんてこったい…」

油断しまくってた自分の甘さに打ちひしがれる自分達がその場を支配していた。

初めてのキスってどんな味？（後書き）

筆者はコーラの味がしました。

キュンと甘酸っぱい！

やっぱりスランプなんだぜorz

もう少しで鈴木さんなんだぜ…！

応援・評価などお待ちしております。後、新しい小説の方もよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9833m/>

ネギまの世界でやりたい放題！

2011年7月20日16時07分発行